佐賀県文化財調査報告書第146集

杉籠遺跡

－国営吉野ヶ里歴史公園整備に伴う埋蔵文化財調査報告書１－

2001年3月

佐賀県教育委員会

佐賀県文化財調査報告書第146集

杉籠遺跡

－国営吉野ヶ里歴史公園整備に伴う埋蔵文化財調査報告書１－

2001年3月

佐賀県教育委員会

杉籠遺跡II区　調査区全景（上空から）

調査区遠景（南上空から）

中世区画溝出土青磁・白磁

序

この報告書は，佐賀県教育委員会が国土交通省九州地方整備局国営吉野ヶ里歴史公園工事事務所の委託により，平成９年度に実施しました神埼郡三田川町所在の杉籠遺跡の発掘調査報告です。

三田川町は我が国を代表する弥生時代の遺跡である吉野ヶ里遺跡をはじめとして，原始以降の遺跡がきわめて多く分布しています。杉籠遺跡は弥生時代から中世にかけての遺跡であり，今回の調査では中世の屋敷地などが確認され，中国から輸入された陶磁器などの貴重な遺物が出土しました。

埋蔵文化財は地域の歴史を知るうえで欠かすことのできない文化遺産です。本書が文化財に対する県民の方々の御理解のため，また今後の調査・研究に幾分とも活用されるものになれば幸いに存じます。

最後になりましたが，埋蔵文化財の保護に御理解と御協力を賜った国土交通省九州地方整備局国営吉野ヶ里歴史公園工事事務所をはじめ，調査に御協力いただいた三田川町教育委員会，発掘調査に従事していただいた作業員の皆様や関係各位に対し，心から厚くお礼申し上げます。

平成13年３月

佐賀県教育委員会

教育長　松　尾　正　廣

例　言

1．本書は吉野ヶ里公園管理センター建設に伴い，平成９年度に実施した佐賀県神埼郡三田川町大字田手に所在する杉籠遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は建設省九州地方建設局（現：国土交通省九州地方整備局）国営吉野ヶ里歴史公園工事事務所の委託により，三田川町教育委員会の協力をうけ佐賀県教育委員会が実施した。

3．本書の執筆は渋谷　格が行った。

4．調査記録の作成及び整理の分担は次のとおりである。

遺構実測……石松澄子・黒田裕一・七田忠昭・鷲見昌尚・中島茂子・平野三枝子・（有）埋蔵文化財サポートシステム

遺物実測……青山奈緒・秋吉京子・香月輝美・渋谷　格・野口孝子・御厨瑞枝・山崎常美

製　　図……御厨瑞枝

遺物復元……江口啓子・坂口サチ子・佐藤春子・山崎ひとえ

遺構写真撮影……鷲見昌尚

空中写真撮影……（有）空中写真企画

遺物写真撮影……渋谷　格

写真現像焼付……奥知恵子・黒木優子

5．本書で報告した遺構及び遺物に関する図面・写真などの調査記録並びに出土遺物については，佐賀県教育委員会（吉野ヶ里遺跡発掘調査事務所・佐賀県文化財調査研究資料室）が保管している。

6．本書の編集は山崎常美の協力を得て渋谷が行った。

7．発掘調査・報告書作成にあたっては多くの方々からご指導・ご助言をいただいた。特に，大橋康二・徳永貞紹（佐賀県教育委員会文化財課）両氏には出土遺物についてさまざまなご教示をいただいた。この紙面を借りて心から感謝申し上げます。

凡　例

1．遺跡台帳（佐賀県教育委員会作成）に登録した杉籠遺跡の略号はＳＧＲである。

2．本書で用いる遺構の分類記号は次のとおりとする。

　ＳＡ：柵列

　ＳＢ：掘立柱建物

　ＳＤ：溝

　ＳＥ：井戸

　ＳＫ：土坑

　ＳＰ：土坑墓

　ＳＸ：その他の遺構

　Ｐ：小穴・柱穴

3．本書で用いる方位は国土座標第Ⅱ系の座標北である。

4．本書で用いる遺構の法量はｍ単位，遺物の法量はcm単位を原則とする。

5．図版の遺物番号は挿図内の遺物番号と共通させている。

6．本書に掲載した各遺物は，佐賀県教育委員会作成の遺物登録台帳に登録している。遺物一覧表にその登録番号を付記する。

7．遺物実測図の内，断面塗りつぶしは須恵器・中世の国産陶器，器面網伏せは丹塗りもしくは黒色土器を示す。

8．遺物説明の便宜上，土師器鍋については以下の文献による分類を用いた。また，中国産青磁・白磁については補助的に以下の文献による分類を用いた。

　土師器鍋：徳永貞紹「肥前における中世後期の在地土器」『中近世土器の基礎研究』Ⅵ　1990

　中国産青磁・白磁：横田賢次郎・森田　勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』4　1978

本文目次

第１章　はじめに …… 1

１．調査に至る経過 …… 1

２．調査体制 …… 1

３．調査の経過と方法 …… 3

第２章　遺跡の位置と環境 …… 4

１．位置と地理的環境 …… 4

２．歴史的環境 …… 5

第３章　調査の内容 …… 11

１．Ⅱ区の概要 …… 11

２．弥生・古墳時代の遺構と遺物 …… 18

（１）土坑 …… 18

（２）その他の遺物 …… 18

３．古代の遺構と遺物 …… 21

（１）土坑 …… 21

（２）その他の遺物 …… 40

４．中世の遺構と遺物 …… 41

（１）区画溝 …… 41

（２）掘立柱建物・柵列 …… 54

（３）土坑 …… 67

（４）その他の遺構と遺物 …… 78

第４章　まとめ …… 82

１．弥生時代から古代 …… 82

２．中世 …… 82

挿図目次

Fig. 1　周辺遺跡分布図 …… 7
Fig. 2　調査区位置図 …… 12
Fig. 3　遺構配置図 …… 13・14
Fig. 4　ＳＫ218土坑，出土遺物 …… 18
Fig. 5　小穴出土弥生時代遺物 …… 19
Fig. 6　小穴・検出面出土弥生・古墳時代遺物 …… 20
Fig. 7　ＳＫ108土坑 …… 21
Fig. 8　ＳＫ108土坑出土遺物 …… 22
Fig. 9　ＳＫ110土坑，出土遺物① …… 23
Fig. 10　ＳＫ110土坑出土遺物② …… 24
Fig. 11　ＳＫ111土坑，出土遺物 …… 25
Fig. 12　ＳＫ112土坑平面図 …… 26
Fig. 13　ＳＫ112土坑出土遺物① …… 27
Fig. 14　ＳＫ112土坑出土遺物② …… 28
Fig. 15　ＳＫ112土坑出土遺物③ …… 29
Fig. 16　ＳＫ112土坑出土遺物④ …… 30
Fig. 17　ＳＫ112土坑出土遺物⑤ …… 31
Fig. 18　ＳＫ125土坑，出土遺物 …… 32
Fig. 19　ＳＫ127土坑，出土遺物 …… 33
Fig. 20　ＳＫ132土坑，出土遺物 …… 34
Fig. 21　ＳＫ156土坑，出土遺物 …… 35
Fig. 22　ＳＫ158土坑，出土遺物 …… 36
Fig. 23　ＳＫ162・163・164土坑，ＳＫ162土坑出土遺物 …… 37
Fig. 24　ＳＫ163・164土坑出土遺物 …… 38
Fig. 25　ＳＫ199土坑，出土遺物 …… 39
Fig. 26　検出面出土遺物 …… 40
Fig. 27　区画溝 …… 42
Fig. 28　ＳＤ104・105・107溝土層図 …… 43
Fig. 29　ＳＤ104・107溝出土遺物，ＳＤ105溝出土遺物① …… 44
Fig. 30　ＳＤ105溝出土遺物② …… 45
Fig. 31　ＳＤ102・152・153・155・166溝土層図 …… 46
Fig. 32　ＳＤ102溝出土遺物 …… 47
Fig. 33　ＳＤ155溝出土遺物① …… 49
Fig. 34　ＳＤ155溝出土遺物② …… 50
Fig. 35　ＳＤ155溝出土遺物③ …… 51
Fig. 36　ＳＤ155溝出土遺物④ …… 52
Fig. 37　ＳＤ152・153・166・179・182・222溝出土遺物 …… 53
Fig. 38　ＳＢ225掘立柱建物 …… 55
Fig. 39　ＳＡ171柵列 …… 56
Fig. 40　ＳＡ226柵列 …… 56
Fig. 41　ＳＡ224・227・229・230柵列，ＳＢ228掘立柱建物 …… 57
Fig. 42　ＳＡ231・232・233・234柵列 …… 58
Fig. 43　掘立柱建物集中部 …… 60
Fig. 44　ＳＢ172掘立柱建物 …… 61
Fig. 45　ＳＢ173掘立柱建物 …… 62
Fig. 46　ＳＢ175・176掘立柱建物 …… 63
Fig. 47　ＳＢ174・177掘立柱建物 …… 64
Fig. 48　ＳＢ238掘立柱建物 …… 65

Fig. 49　ＳＡ235・239・240柵列 …… 66
Fig. 50　ＳＢ172・228・237掘立柱建物，ＳＡ230柵列出土遺物 …… 67
Fig. 51　ＳＫ100・101土坑周辺平面図，ＳＫ100・101土坑 …… 68
Fig. 52　ＳＫ100土坑出土遺物，ＳＫ101土坑出土遺物① …… 69
Fig. 53　ＳＫ101土坑出土遺物② …… 70
Fig. 54　ＳＫ109・131土坑，出土遺物 …… 71
Fig. 55　ＳＫ134・135土坑，出土遺物 …… 72
Fig. 56　ＳＫ137・139土坑，出土遺物 …… 73
Fig. 57　ＳＫ142土坑，出土遺物 …… 74
Fig. 58　ＳＫ143・151土坑，出土遺物 …… 75
Fig. 59　ＳＫ165土坑，出土遺物 …… 76
Fig. 60　ＳＫ178・213土坑，出土遺物 …… 77
Fig. 61　畑状遺構 …… 79
Fig. 62　ＳＰ241土坑墓，出土遺物 …… 80
Fig. 63　ＳＥ201井戸 …… 80
Fig. 64　小穴・検出面他出土遺物 …… 81

表目次

Tab. 1　遺構一覧表 …… 15
Tab. 2　遺物一覧表 …… 84

図版目次

巻首図版１　調査区全景
巻首図版２　調査区遠景，中世区画溝出土青磁・白磁

PL. 1　調査区遠景　調査区全景
PL. 2　調査区北半部　調査区中央部
PL. 3　Ｐ597・598検出状況　Ｐ597・598遺物出土状況　ＳＫ110土坑
PL. 4　ＳＫ112土坑・遺物出土状況
PL. 5　ＳＫ127土坑　ＳＫ132土坑　ＳＫ156土坑　ＳＫ158土坑　ＳＫ162・163・164土坑
PL. 6　ＳＤ104・105・155・166溝土層　ＳＢ173掘立柱建物　ＳＡ171柵列
PL. 7　掘立柱建物集中部　ＳＫ100土坑　ＳＫ138・139土坑　ＳＫ151土坑　ＳＥ201井戸
PL. 8　出土弥生土器・古墳時代土師器　ＳＫ110・125土坑出土土師器
PL. 9　ＳＫ112土坑出土須恵器
PL. 10　ＳＫ112土坑出土土師器
PL. 11　中世区画溝出土遺物
PL. 12　ＳＫ101・151・178土坑出土遺物　ＳＰ241土坑墓出土遺物　墨書白磁　銅銭　国産陶器　天目茶碗

第1章　はじめに

1．調査に至る経過

佐賀県神埼郡神埼町，三田川町，東脊振村にまたがる吉野ヶ里遺跡の神埼工業団地造成に伴う発掘調査において，弥生時代最大級の環壕集落，銅剣５本やガラス製管玉79個が出土した墳丘墓を始めとする貴重な成果が得られ，遺跡が全面的に保存されることになった。吉野ヶ里遺跡は本格的な稲作農耕が始まり，古代国家成立の基礎が形成される弥生時代の社会変化を一遺跡でとらえることができる学術的価値の極めて高い遺跡であることが明らかとなり，このような重要性から平成２年５月には史跡に指定され，平成３年５月には特別史跡に昇格した。

このような学術的に高い評価から，平成４年10月に国内５番目のロ号国営公園（国家的記念事業もしくは我が国固有の優れた文化的資産の保存と活用を図るため閣議の決定を経て設置される公園）として，また飛鳥歴史公園に次いで２番目の国営歴史公園として整備するという閣議決定がなされた。公園の規模は国営公園54ha，県営公園63haのあわせて117haと決まり，平成５年３月には基本計画，翌６年３月には基本設計が策定された。

この中で公園のインフォメーションや管理事務所がおかれる入口施設が計画された。その場所は杉籠遺跡として周知化された埋蔵文化財包蔵地内であり，三田川町教育委員会が確認調査を実施したところ遺構の存在が明らかとなった。しかし，公園とのアクセスの問題から入口施設の位置を動かすことは難しく，本調査が必要であるということになり，協議の結果，公園区域内の施設ということから佐賀県教育委員会が調査主体となり，文化財課吉野ヶ里遺跡班が担当することになった。ただし，吉野ヶ里遺跡班が通常実施する国庫補助事業による確認調査とは性格が異なるため，建設省九州地方建設局（現：国土交通省九州地方整備局）国営吉野ヶ里歴史公園工事事務所と委託契約を締結し，調査を実施することとなった。

2．調査体制

発掘調査は，佐賀県教育委員会が主体となり，地元の三田川町教育委員会の協力を得て実施した。発掘調査及び整理・報告に係る組織は以下のとおりである。なお，三田川町の職員１名は佐賀県教育委員会文化財課との業務委託契約により調査に従事した。

《発掘調査》　平成９年度

事務局　佐賀県教育委員会文化課

課長	内田　泰智
課長補佐	横田　榮士
庶務企画係長	岩瀬　茂生
主査	久保　信行
主事	吉村　俊也
	富窪　道代

調査担当　佐賀県教育委員会文化財課吉野ヶ里遺跡班

課長	佛坂　勝男
課長補佐	深町　昌司
	大橋　康二
企画調整主査	七田　忠昭
指導主事	原　直樹
文化財保護主事	吉本　健一
三田川町教育委員会	鷲見　昌尚

《整理・報告》　平成12年度

事務局　佐賀県教育委員会文化課

課長	宮地　洋三
参事	堤　博文
副課長	山口　康郎
専門員（庶務係長）	津野　建夫
主査	相川　ミエ子
主事	毎熊　近
	陶山　優

整理・報告担当　佐賀県教育委員会文化財課吉野ヶ里遺跡班

課長	佛坂　勝男
参事	大橋　康二
副課長	東島　桂子
企画調整主査	七田　忠昭
文化財保護主事	細川　金也
	渋谷　格
三田川町教育委員会	草野　誠司

なお，発掘作業に従事した発掘作業員は以下のとおりである。

荒木二三，伊東キヨノ，伊東登，伊東米子，今泉恵子，大石局，大隈和子，大隈ハルヨ，緒方昭二，緒方良美，岡本英彦，小川ウタ，小川八重子，金丸文江，木村宇貫，古賀スミエ，古賀清治，古賀誠，古賀道江，古賀ミドリ，生島フミ子，末安五郎，末安友治，副島シズノ，高尾ミツエ，田中静子，筒井アサノ，筒井シゲヨ，直塚ツユ，中島守，中島ミチ，永田幸治，夏秋政治，納富トミ子，野中整，野中光代，羽田すま子，八谷登美代，平尾ハルヨ，福岡ユキノ，福島忠義，福島保明，松本孝，松本玉樹，松本フミ子，宮地邦夫，宮地久美子，宮地亮子，向井利美，向井寅太，迎昇，迎マスミ，盛ヨシノ，柳川スエコ，山口一，山崎アサ子，山崎久枝，山崎三重子，横尾政一，吉田小夜子，吉田初美，吉田マツエ，吉原彰義，

3．調査の経過と方法

杉籠遺跡は，昭和61年度に筑後川下流用水事業に伴って佐賀県教育委員会により調査が行われている[1]ため，今回の調査区をII区とした。遺跡の略号は，そのときに佐賀県教育委員会が作成している遺跡台帳に登録されたＳＧＲを用いた。遺物には「ＳＧＲ－II」という略号を注記している。なお，昭和61年度の調査地は今回の調査区の北側に近接する。

発掘調査は平成９年８月11日からバックホウによる表土除去作業を行い，８月20日から本格的に発掘作業を開始した。遺構の検出・掘り下げと併行して写真撮影や実測図作成などを行い，平成10年１月26日に現地調査を終了した。引き続き調査図面及び出土遺物について整理作業を進めた。

遺構番号は３桁の一連番号として100から始め，この番号の頭に遺構の分類記号を付けて表示した。ただ，一部番号などの重複があり，報告書作成時点で若干整理しており，遺構一覧表で対照できるようにした。柱穴・小穴は遺物の出土したもののみＰの後に一連番号を付した。

実測作業は，調査の進行に従って遺構配置図を縮尺100分の１の平板図で作成し，さらに国土座標による区割りにしたがって調査区全域を縮尺20分の１で，土層図や個別で必要な遺構図は縮尺10分の１で実測を行った。また，実測の一部を埋蔵文化財の専門業者に委託した。

写真記録は，35㎜サイズとブローニーサイズのモノクロームネガフィルムとカラーポジフィルムを使用した。また，バルーンによる空中写真撮影を業者に委託して行った。

なお，本受託事業による発掘調査が平成10年度以降も継続したことと他の事業との関係から，平成12年度に報告書作成作業を行った。

〈註〉

1．佐賀県教育委員会「杉籠遺跡」『筑後川下流用水事業に係る文化財調査報告書』2，佐賀県文化財調査報告書第93集　1989

第２章　遺跡の位置と環境

１．位置と地理的環境

杉籠遺跡は佐賀県神埼郡三田川町大字田手字杉籠・二本松に所在する。北緯33°19′10″，東経130°23′30″，国土座標では第Ⅱ座標系X＝＋35,490～＋35,850ｍ，Y＝－56,430～－56,880ｍに位置している。国土地理院発行の地形図（１／50,000）では図幅名「佐賀」に含まれる。

三田川町は佐賀県の東部にあり，町域が南北約5.3km，東西約3.85km，面積10.85㎢の南北に細長い町である。佐賀県内では呼子町に次いで２番目に小さな町となっている。東は上峰町，西はおおよそ田手川を境として神埼町，南は千代田町と三根町，北は東脊振村と接している。1889（明治22）年の町村制施行の際，合併する四つの村のうち「田手」，「吉田」，「豆田」の三つの田と，「箱川」の川をとって三田川村と命名された。1961（昭和36）年に大字箱川字南里ヶ里が三根町に編入されている。1965（昭和40）年に町制が施行され，現在に至っている。

三田川町は佐賀平野東部に位置している。佐賀平野とは，有明海の湾奥に臨む九州最大の沖積平野，筑紫平野のうち筑後川以西，六角川以東を指す。佐賀平野の地形的特徴は，佐賀県と福岡県の県境となっている脊振山地から南へのびる洪積段丘とその間を流れる河川が形成する地形である。脊振山地は標高1,054.8ｍの脊振山をはじめ標高900～1,000ｍの山々が連なっており，その基盤は花崗岩である。脊振山地からは南の平野部に向かっていくつもの洪積段丘が細長くのびている。段丘は高位，中位，低位の３段に区分される。高位段丘は風化した花崗岩礫層で構成され，その多くはほとんど平坦面をとどめずに南北に細長い丘陵状になっている。中位段丘は段丘平坦面をもち，その上に砂礫層と阿蘇－４火砕流堆積物を載せているか，あるいは丘陵地の側面に阿蘇－４火砕流堆積物のみの堆積段丘を形成している場合がある。城原川以東ではこの段丘が発達している。低位段丘は，城原川右岸から嘉瀬川付近までの山裾に生じており，沖積面下への埋没段丘へと続いている。

段丘が発達する佐賀平野東部では，その段丘の間を流れる寒水川，切通川，井柳川，田手川，城原川などの河川により扇状地や沖積平野が形成されている。これらの河川はすべて筑後川に流れこみ，有明海に通じている。三田川町域では東に目達原段丘，西に志波屋段丘があり，その間に井柳川，田手川の堆積作用で形成された沖積平野がある。

杉籠遺跡は田手川左岸の標高約９ｍの自然堤防状の微高地に立地しているが，現状では平坦な水田面となっている。田手川は幾度となく流路を変えているものと思われるが，鎌倉時代に描かれたと推定される「東妙寺并妙法寺境内絵図」（重要文化財）には現状と同じく丘陵鞍部を流れているように表現されており，中世のある段階において杉籠遺跡周辺ではある程度田手川本流の流路が固まっていたものと推測される。

なお，この地域の気候は近隣の佐賀市における平成10年度のデータ[1]によると，平均気温17.8℃，最高気温35.6℃，最低気温－4.2℃，相対湿度73％，年間降水量1,721.0㎜，平均風速3.3m/s，日照時間1,851.2時間，日照率42％である。三田川町内では陸上自衛隊目達原駐屯地での観測データがあるが，佐賀市と比較してやや気温が高く，降水量も多い傾向がある。

佐賀平野は以上のような気象条件と肥沃な沖積平野が広がっていることから，水稲耕作に適した土地柄であり，穀倉地帯として知られている。

2．歴史的環境

脊振山地の南麓部から佐賀平野平坦低地にかけては，遺跡が濃密に分布している。時代も旧石器時代から中・近世にわたっている。杉籠遺跡周辺にも神埼町・三田川町・東脊振村にまたがる吉野ヶ里遺跡[2]をはじめとして数多くの遺跡が存在する。本来はこれらすべてを詳細に述べる必要があるが，すでに吉野ヶ里遺跡の報告書などで詳しく記述されていることもあり，ここでは本書に関連が深い奈良・平安時代から中世を中心にして述べることにする。

旧石器時代の遺跡は山麓部から段丘上にかけて確認されている。旧石器時代の石器の大部分は採集などによって発見されている。調査例として，神埼町船塚遺跡[3]では国府型ナイフなど瀬戸内技法により製作された石器群と九州系のナイフ形石器が共伴して検出されている。神埼町塚原遺跡[4]でも国府型ナイフが出土している。東脊振村山古賀遺跡[5]では，旧石器～縄文時代の遺物包含層が確認され，ナイフ形石器などが出土している。このほか，東脊振村と上峰町にまたがる二塚山遺跡や吉野ヶ里遺跡などでナイフ形石器，台形石器などが出土している。

縄文時代の遺跡も山麓部から段丘上にかけて分布しているが，その数は増加する。早期の遺跡として，押型文土器や石器が採集されるなど学史的に著名な東脊振村戦場ヶ谷遺跡[6]，集石遺構が検出された神埼町志波屋六本松遺跡[7]などがある。後・晩期の遺跡として，竪穴住居が確認された船塚遺跡，志波屋六本松遺跡，東脊振村夕ヶ里遺跡[8]などがある。

弥生時代になると，遺跡が爆発的に増加する。著名なものだけでも，吉野ヶ里遺跡を筆頭にして，二塚山遺跡[9]，上峰町切通遺跡[10]，東脊振村松原遺跡(横田遺跡[11])，三津永田遺跡[12]，神埼町川寄吉原遺跡[13]など枚挙のいとまがない。最近でも，東脊振村石動四本松遺跡[14]から異体字銘帯鏡，千代田町高志神社遺跡[15]から細形銅剣がいずれも甕棺墓から出土している。このうち，杉籠遺跡の西側丘陵上に位置する吉野ヶ里遺跡は触れざるを得ない。吉野ヶ里遺跡では前期から環壕集落が営まれ，この地域の中心的な集落として発展する基礎が築かれる。中期になると，志波屋四の坪地区の２列埋葬墓地を代表例として丘陵各所に甕棺墓地が営まれ，その中心的な存在として墳丘墓が構築される。墳丘墓には14基の甕棺墓が確認され，そのうち８基に銅剣やガラス製管玉の副葬がみられた。後期になると面積40ha以上の大規模環壕集落が成立し，後期後半～終末にかけてはいわゆる「弥生都市」的性格をもつようになる。杉籠遺跡も大きくみれば，この吉野ヶ里遺跡の一部を構成するものと考えられる。

古墳時代では，前方後方墳や方形周溝墓など古式の古墳が吉野ヶ里遺跡，東脊振村西一本杉遺跡[16]などで築造されるが，継続して古墳が営まれるわけではない。その後，首長墳としては，三田川町と上峰町にまたがる目達原段丘上に中期から後期にかけて瓢箪塚，上のびゅう塚，目達原大塚などの前方後円墳を中心とする目達原古墳群[17]が形成され，６世紀代になると，東脊振村下三津西古墳[18]，神埼町伊勢塚古墳[19]が山麓部に近い志波屋段丘上に築造される。また，山麓部では神埼町猿嶽古墳群[20]，天神尾古墳群[21]など５世紀後半～末に群集墳が形成され始め，６世紀後半～７世紀にかけて数多くの古墳群が形成される。集落としては，東脊振村瀬ノ尾遺跡[22]，夕ヶ里遺跡，吉野ヶ里遺跡，神埼町切畑遺跡[23]，志波屋六本松遺跡などがある。

律令期になると，官道や官衙的な建物群，寺院など律令体制に密接に関わる遺跡が数多く確認されている。肥前国における古代官道については，空中写真により道路痕跡を認めてゆく歴史地理学的方法により大和町から中原町に至る直線約17kmが木下良氏によって復元されていた[24]。発掘調査においては，吉野ヶ里遺跡で丘

陵の切り通しとなった部分から西側の低地にかけて県内で初めて道路跡が確認された。三田川町鳥の隈遺跡[25]でも切り通しとなっている部分で道路跡が調査されている。この他に，神埼町中園遺跡，鶴前田遺跡，鶴籠遺跡，野畠遺跡，迎田遺跡で道路跡やその痕跡が確認されている。また，発掘調査では明確な道路状痕跡などは認められなかったが，祇園原・唐香原遺跡には切り通しがあり，官道の痕跡と考えられている[26]。このように歴史地理学的方法によって復元された直線道路が奈良時代の官道であることが発掘調査によって確認されている。この官道の周辺には官衙的な建物群が多数検出されている。吉野ヶ里遺跡では，掘立柱建物200基以上，井戸50基以上などが確認され，「日下部鳥甘」「□五月十日稲」「×□大嶋一斗二升」などと判読できる木簡９点や円面硯，墨書土器，ヘラ書き土器などが出土している。中園遺跡をはじめとする馬郡・竹原遺跡群[27]では，掘立柱建物，柵列，井戸，溝などが多数検出され，帯金具（鉸具）や「神人」と記された墨書土器，「厨鉢」「神埼厨」と書かれたヘラ書き土器などが出土している。また，上峰町坊所一本谷遺跡[28]でも，官衙的な建物群が確認されており，注目される。寺院跡としては，東脊振村辛上廃寺[29]，上峰町塔の塚廃寺[30]がある。辛上廃寺からは鴻臚館系の瓦が出土し，本格的な塔心礎も付近に存在している。開墾により削平されたと考えられていたが，最近の確認調査で掘立柱建物などが確認されており[31]，今後の調査が期待される。塔の塚廃寺は南北36尺，東西36尺のおおよそ方形の土壇が残り，礎石も原位置を保っていたらしいが，飛行場建設のために消滅した。百済系単弁軒丸瓦が採集されている。周辺の状況から１堂塔のみの寺院の可能性が想定されている。

三田川町とその周辺は肥前国神埼郡の範囲に含まれる。『肥前風土記』神埼郡条には「郷玖所，里廿六，驛壹所，烽壹所，寺壹所，僧寺」とある。このうち「烽」は日の隈山，「寺」は辛上廃寺に推定されている。これまでの調査の状況から神埼郡衙については，馬郡・竹原遺跡群が有力であり，七田忠昭氏は推定竹原里14・15・22・23坪をその候補地として具体的にあげている[32]。また，吉野ヶ里遺跡で確認された建物群の一部は駅家に関係する可能性がある。以上のように，杉籠遺跡及び吉野ヶ里遺跡周辺は奈良時代において神埼郡の中心的な地域であったことが明らかにされつつある。

平安時代になると，吉野ヶ里遺跡などの調査結果から直線道路は少なくとも「官道」としての役割は終わっており，主要な交通路は奈良時代の官道から２里南に路線を替えているようである。この交通路に隣接して三田川町下中杖遺跡[33]がある。下中杖遺跡は平安時代前期を中心として中世に至る掘立柱建物，井戸が多数確認されている。平安時代の主要な出土遺物としては，越州窯系青磁や刑窯系白磁，木製馬鞍，新羅製青銅製箸などがある。神埼町荒堅目遺跡[34]では溝，柵列などが確認され，溝から木簡が出土している。この他に主に掘立柱建物から構成される集落として，神埼町熊谷遺跡[35]，塚原遺跡，小林遺跡[36]，尾崎土生遺跡[37]などがあり，杉籠遺跡の北側に隣接して所在する田手二本杉遺跡[38]でも溝などが確認されている。これらの遺跡からはやはり越州窯系青磁，長沙窯系水注（小林遺跡）などが出土している。また，坊所一本谷遺跡では竪穴住居を中心とする平安時代前期の集落が確認されている。

『類聚国史』によれば，承和３（836）年に神埼郡の空閑地690町が勅旨田となり，『御堂関白記』には「神埼御庄」の名称が初めてみられ，11世紀初頭には皇室領荘園として成立していたことが知られる。『御堂関白記』には中国宋との対外交渉をうかがわせる記述があり，このような文献記録と多くの遺跡から輸入陶磁器が出土することとは無関係ではないであろう。

平安時代後期から鎌倉時代，中世前期の遺跡としては，下中杖遺跡，荒堅目遺跡，尾崎土生遺跡[39]，神埼町本堀朝日遺跡[40]，尾崎利田遺跡[41]，佐賀市本村遺跡[42]などがある。このうち本村遺跡では溝で区画された集落が確認されており，屋敷地と考えられる。荒堅目遺跡では井戸から銅製帯金具が出土している。これらの遺跡か

1．杉籠遺跡
2．吉野ヶ里遺跡
3．目達原古墳群
4．鳥の隈遺跡
5．下中杖遺跡
6．田手二本杉遺跡
7．妙法寺跡
8．船塚遺跡
9．志波屋六本松遺跡
10．伊勢塚古墳
11．切畑遺跡
12．勢福寺城跡
13．城原二本松西遺跡
14．城原三本松北遺跡
15．猿嶽古墳群
16．天神尾古墳群
17．松崎城跡
18．横大路城跡
19．志波屋六本松乙地区
20．馬郡・竹原遺跡群
21．中園遺跡
22．鶴前田遺跡
23．鶴籠遺跡
24．熊谷遺跡
25．川寄吉原遺跡
26．野畠遺跡
27．塚原遺跡
28．祇園原・唐香原遺跡
29．小林遺跡
30．迎田遺跡
31．尾崎土生遺跡
32．尾崎利田遺跡
33．本村遺跡
34．本堀朝日遺跡
35．荒堅目遺跡
36．横武城跡
37．本告城跡
38．下六丁遺跡
39．横武四本黒木遺跡
40．柳郷城跡
41．姉川城跡
42．莵牟田遺跡
43．野田城跡
44．石動四本松遺跡
45．西一本杉遺跡
46．山古賀遺跡
47．夕ヶ里遺跡
48．戦場ヶ谷遺跡
49．三津永田遺跡
50．下三津西古墳
51．二塚山遺跡
52．大曲Ａ遺跡
53．松原遺跡（横田遺跡）
54．瀬ノ尾遺跡
55．辛上廃寺
56．切通遺跡
57．坊所一本谷遺跡
58．坊所城跡
59．塔の塚廃寺
60．高志神社遺跡

Fig. 1　周辺遺跡分布図（１／50,000）

らは輸入陶磁器が数多く出土しており，対外交渉が盛んであったことがうかがえる。『長秋記』には平忠盛が神埼荘での対宋貿易を独占しようとしたことが記述されており，興味深い。神埼郡域はこの時期も引き続き皇室領，院の荘園であり，鎌倉幕府成立後も地頭がおかれず，院が一円支配していた。しかし，承久の変（1221年）後三浦泰村が地頭に任じられ，幕府の支配力が及ぶようになる。宝治合戦（1249年）で三浦泰村が滅ぶと以後地頭はおかれていないものの，幕府の影響力は残されていたようである。

元寇（文永の役：1274年・弘安の役：1281年）は神埼荘にもさまざまな変化をもたらすことになった。恩賞地として弘安８（1285）年河野通有に小崎郷（神埼町尾崎）が与えられたのを契機に，肥前の御家人を中心とした400人あまりに神埼荘内の地頭職が配分されている（『櫛田神社文書』）。これらの御家人は分配された土地が小規模のため代官などを通じてその支配権を行使した。

また，異国降伏祈願のため弘安年間（1278～1287年）に西大寺の末寺である東妙寺が建立され，それ以前（建長年間か？）に建立されたと伝えられる妙法寺が田手川を挟んで西側にあった。この二つの寺社には，神埼荘が小規模に恩賞地として配分されたこともあって，多くの土地が寄進，売却されている。『東妙寺文書』などによれば，その勢力が盛んであったことが知られる。なお，吉野ヶ里遺跡での平成７年度の調査（田手一本黒木地区：220調査区）で妙法寺の寺域を区画すると推定される溝が検出されている[43]。他にやはり勅願祈禱寺として建立されたとされる石塔院が東妙寺，妙法寺の北側に所在し，両寺との関連が深い。寺内には五輪塔や板碑などが残されている。

中世後期の遺跡としては，山麓部に神埼町勢福寺城跡をはじめとして松崎城跡，横大路城跡などの山城が所在している。勢福寺城跡の麓部では城原三本谷北遺跡[44]，城原二本松西遺跡[45]で溝によって区画された町割りの存在が確認され，総構えの城下町の状況が明らかにされつつある。洪積段丘上では東脊振村大曲Ａ遺跡[46]において溝で区画された集落が確認され，屋敷地と耕地との関係を知ることができるものと推測される。また，吉野ヶ里遺跡志波屋六本松乙地区[47]においても溝で囲まれた屋敷地が確認されており，その他上峰町坊所城跡[48]などが調査されている。沖積平野部においては，佐賀平野東部で特徴的にみられるクリークにより囲まれた「環濠集落」の構造をもつ城館跡がみられる。神埼町姉川城跡[49]，横武城跡[50]，本告城跡[51]，野田城跡，莞牟田遺跡，下六丁遺跡[52]，横武四本黒木遺跡[53]，柳郷城跡[54]などで調査が行われており，その内容が徐々に明らかになってきている。

神埼郡域は南北朝期になると，南朝側の菊池氏，九州探題，足利直冬の三つ巴の勢力争いの場になるなど戦乱が続き，南北朝統一以後も中国の大内氏の支援を受ける九州探題渋川氏と肥前国人層に担がれる少弐氏の争いにより混乱している。勢福寺城は少弐氏の根拠地の一つとしてしばしば文献にも登場する。このような状況の中で東妙寺や妙法寺などの寺社勢力は後退していく。それに替わり，国人層が台頭してくるが，杉籠遺跡，吉野ヶ里遺跡周辺の有力国人として江上氏があげられる。元亀元（1570）年には，江上武種が大友宗麟から神埼郡内800町余の所領と神埼郡の郡職を与えられている（『武雄鍋島家文書』）。その後，江上氏は龍造寺氏との争いに敗れ，龍造寺隆信の次男家種が武種の養子に入り，龍造寺氏の家臣となる。その龍造寺氏も天正18（1584）年に隆信が敗死すると，次第に鍋島直茂が勢力を伸ばし，鍋島氏の佐賀藩が成立する。その中で神埼郡域は知行地が細分化され，藩直轄地が約１／４，家臣の知行地が３／４を占めることになる。

〈註〉

1．佐賀県企画局統計課『平成11年度版　佐賀県統計年鑑』　2000
2．佐賀県教育委員会『吉野ヶ里』佐賀県文化財調査報告書第113集　1992
3．神埼町教育委員会『船塚遺跡』神埼町文化財調査報告書第10集　1984
4．八尋実「塚原遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書』11，佐賀県文化財調査報告書第117集　1993
5．佐賀県教育委員会「山古賀遺跡」『西石動遺跡』佐賀県文化財調査報告書第97集　1990
6．七田忠志「佐賀県戦場ヶ谷出土弥生式有紋土器について」『史前学雑誌』6－2　1934
七田忠志「其の後の佐賀県戦場ヶ谷遺跡と吉野ヶ里遺跡に就いて」『史前学雑誌』6－4　1934
7．神埼町教育委員会『志波屋六本松遺跡』神埼町文化財調査報告書第9集　1983
8．久保伸洋「夕ヶ里遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書』1，佐賀県文化財調査報告書第69集　1983
9．佐賀県教育委員会「二塚山遺跡」『二塚山』佐賀県文化財調査報告書第46集　1979
10．金関丈夫・金関恕・原口正三「佐賀県切通遺跡」『日本農耕文化の生成』　1961
11．木下之治「考古学〈弥生時代〉－神埼郡東脊振村横田遺跡」『新郷土』20－1　1967
12．七田忠志「東脊振村三津の石蓋甕棺と内行花紋明光鏡」『佐賀県文化財調査報告書』第2輯　1953
金関丈夫・坪井清足・金関恕「佐賀県三津永田遺跡」『日本農耕文化の生成』　1961
13．佐賀県教育委員会『川寄吉原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第61集　1981
14．東脊振村教育委員会『石動四本松遺跡』東脊振村文化財調査報告書第19集　1995
15．千代田町教育委員会『高志神社遺跡』千代田町文化財調査報告書第27集　2000
16．佐賀県教育委員会「西一本杉遺跡」『西原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第66集　1982
17．松尾禎作「目達原古墳群調査報告」佐賀県史蹟名勝天然紀念物調査報告第9輯　1950
18．東脊振村教育委員会「下三津西古墳」『平成6・7年度東脊振村内文化財調査報告書』東脊振村文化財調査報告書第21集　1997
19．松尾禎作『佐賀県考古大観』　1957
20．佐賀県教育委員会「猿嶽A遺跡」「猿嶽C・D遺跡」『切畑遺跡』佐賀県文化財調査報告書第116集　1993
21．神埼町教育委員会『早稲隈山』神埼町文化財調査報告書第59集　1997
22．久保伸洋「瀬ノ尾遺跡」『佐賀県文化財年報』1　1996
23．佐賀県教育委員会「切畑遺跡」『切畑遺跡』佐賀県文化財調査報告書第116集　1993
24．木下良「空中写真に認められる想定駅路」『びぞん』64　1976
25．佐賀県教育委員会「三田川町鳥の隈古代官道跡」『古代官道・西海道肥前路』　1995
26．佐賀県教育委員会『古代官道・西海道肥前路』　1995
27．八尋実「馬郡・竹原遺跡群の調査」『佐賀県における古代官衙遺跡の調査』　1997
28．原田大介「坊所一本谷遺跡Ⅰ・Ⅱ区」『佐賀県文化財年報』1　1996
原田大介「坊所一本谷遺跡」『佐賀県文化財年報』4　1999
29．七田忠志「肥前風土記神埼郡の條に於ける寺院に関する一考察」『上代文化』13　1935
松尾禎作「東脊振村辛上廃寺址の調査」佐賀県史蹟名勝天然紀念物調査報告第5輯　1936

30. 松尾禎作「塔の塚廃寺址」佐賀県史蹟名勝天然紀念物調査報告第７輯　1940
31. 平成10年度から佐賀県教育委員会が調査している。
32. 七田忠昭「肥前神埼郡における駅路と周辺の官衙的建物群の調査」『条里制研究』４　1988
33. 佐賀県教育委員会『下中杖遺跡』佐賀県文化財調査報告書第54集　1980
三田川町教育委員会『下中杖遺跡』三田川町文化財調査報告書第１集　1986
34. 神埼町教育委員会『荒堅目遺跡』神埼町文化財調査報告書第12集　1985
35. 桑原幸則「熊谷遺跡」『佐賀県文化財年報』１　1996
36. 桑原幸則「小林遺跡Ⅰ～Ⅴ区」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書』11，佐賀県文化財調査報告書第117集　1993
37. 神埼町教育委員会『尾崎土生遺跡』神埼町文化財調査報告書第65集　1999
38. 三田川町教育委員会『田手一本杉遺跡・田手二本杉遺跡』三田川町文化財調査報告書第２集　1989
39. 神埼町教育委員会『尾崎土生遺跡Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ区』神埼町文化財調査報告書第58集　1997
40. 河野史郎「本堀朝日遺跡」『佐賀県文化財年報』１　1996
41. 佐賀県教育委員会『尾崎利田遺跡』佐賀県文化財調査報告書第55集　1980
42. 佐賀県教育委員会『本村遺跡』佐賀県文化財調査報告書第102集　1991
43. 佐賀県教育委員会『吉野ヶ里遺跡－平成２年度～７年度の発掘調査の概要－』佐賀県文化財調査報告書第132集　1997
44. 河野史郎「城原三本谷北遺跡Ⅰ～Ⅹ区」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書』12，佐賀県文化財調査報告書第122集　1994
45. 八尋実「城原二本谷西遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書』12，佐賀県文化財調査報告書第122集　1994
46. 東脊振村教育委員会『大曲遺跡群Ⅱ』東脊振村文化財調査報告書第９集　1985
47. 原直樹「吉野ヶ里遺跡（志波屋六の坪乙Ⅱ区）」『佐賀県文化財年報』１　1996
48. 上峰町教育委員会『坊所城跡』上峰町文化財調査報告書第10集　1992
49. 神埼町教育委員会『姉川城跡』神埼町文化財調査報告書第50集　1996
神埼町教育委員会『姉川城跡－７次の発掘調査報告書－』神埼町文化財調査報告書第63集　1998
50. 神埼町教育委員会『横武城跡』神埼町文化財調査報告書第57集　1997
51. 神埼町教育委員会『本告牟田遺跡０・Ⅰ区』神埼町文化財調査報告書第62集　1998
52. 佐賀県教育委員会「下六丁遺跡」『筑後川下流用水事業に係る文化財調査報告書』２，佐賀県文化財調査報告書第93集　1989
53. 佐賀県教育委員会「横武四本黒木遺跡」『筑後川下流用水事業に係る文化財調査報告書』２，佐賀県文化財調査報告書第93集　1989
54. 緒方祐次郎「柳郷城跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書』７，佐賀県文化財調査報告書第94集　1989

第3章　調査の内容

1．II区の概要

杉籠遺跡は田手川左岸に位置している。本来は自然堤防上に立地していたものと思われるが，第2章で述べたように中世の段階で田手川本流がほぼ現在の位置となった時点からは，堤防の東に広がる平坦地となった可能性が高い。田手川を挟んで西側には吉野ヶ里遺跡，北側には田手二本杉遺跡，南側には田手遺跡が隣接している。調査前は水田となっており，その標高は9～10mである。

検出された遺構は掘立柱建物，柵列，溝，土坑などがある。遺構は調査区中央部から西側にかけて分布している。東側は削平を受けたのか，小さな谷状となり，遺構が検出できなかった。また，調査区西端で田手川の氾濫によって浸食された部分が確認された。遺構検出面の標高はおおよそ9.2～9.4mで，西側が若干高くなる傾向がある。中世の遺構残存状況からすると，中世の段階からは全体的に若干の削平を受けているようである。後述するように古代の遺構は土坑のみであり，竪穴住居や掘立柱建物は確認されていない。本来存在しなかったのかどうかは不明であるが，土坑の残存状況や遺跡の立地状況などから推測すると古代の掘立柱建物はなかった可能性が高いと判断している。それ以前の状況については，手がかりに乏しく不明といわざるをえない。検出面は褐色系統のやや砂質の土層で，その下層には青灰色のシルト質粘土層が広がっているようであり，深く掘り下げている遺構はこの粘土層まで達している。いずれも田手川の堆積作用に起因するものと推測される。以下，時代順に概要を述べてゆく。

縄文時代以前の遺構，遺物は確認されていない。弥生時代の明確な遺構としては小土坑・小穴があるだけである。しかし，遺物の出土量はかなり多い。出土土器のうち，最も多い時期は後期前半代で，前期のものはごく少量である。土器の中には簾状文が施された壺や凹線文がある器台などの外来系土器がある。ほかに石包丁，土玉などが出土している。古墳時代の遺構としては土坑1基をあげているが，確実ではない。調査区全体の遺物の出土量も多くはない。

古代の遺構としては，土坑15基などがある。調査区中央部から北半部にかけて確認されている。その多くは廃棄土坑と考えられ，ＳＫ110・112土坑に代表されるように埋土から土師器，須恵器が多量に出土する。これらの廃棄土坑は8世紀中頃のものを主体とする。9世紀初頭～前半の遺構もみられるが，遺物量は少なくなる。特徴的なものとして，遺構は須恵器大甕を据えたＳＫ127土坑，遺物はＳＫ125土坑から出土した越州窯系青磁を挙げることができる。また，図示できないほどの小破片であるが，胎土が土師質の緑釉陶器が中世のＳＫ151土坑から出土している。他に調査区南東部に数条検出されている溝からは，奈良時代の遺物を出土したものがあり，この時期の可能性があるが，性格などについては不明といわざるをえない。また，土師器坏や甕，甑が完形に近い状態で調査区北東部の検出面からまとまって出土しており，竪穴住居などが削平されている可能性がある。8世紀以前や9世紀後半以降の遺物はほとんどみられないが，11世紀後半～12世紀初めの土坑墓1基が確認されている。

中世の遺構としては，区画溝，掘立柱建物11棟，柵列12基，土坑26基以上，井戸，畑状遺構などがある。調査区ほぼ全域で確認されている。区画溝は3時期以上に分けることができ，全容は不明であるが，区画内をさらに区画する溝がある。これらは屋敷地を区画するものと推定され，出土遺物から15世紀を中心とした時期が考えられる。掘立柱建物は区画内の小区画溝のＳＤ152溝とＳＤ153溝の間に集中して確認され，この

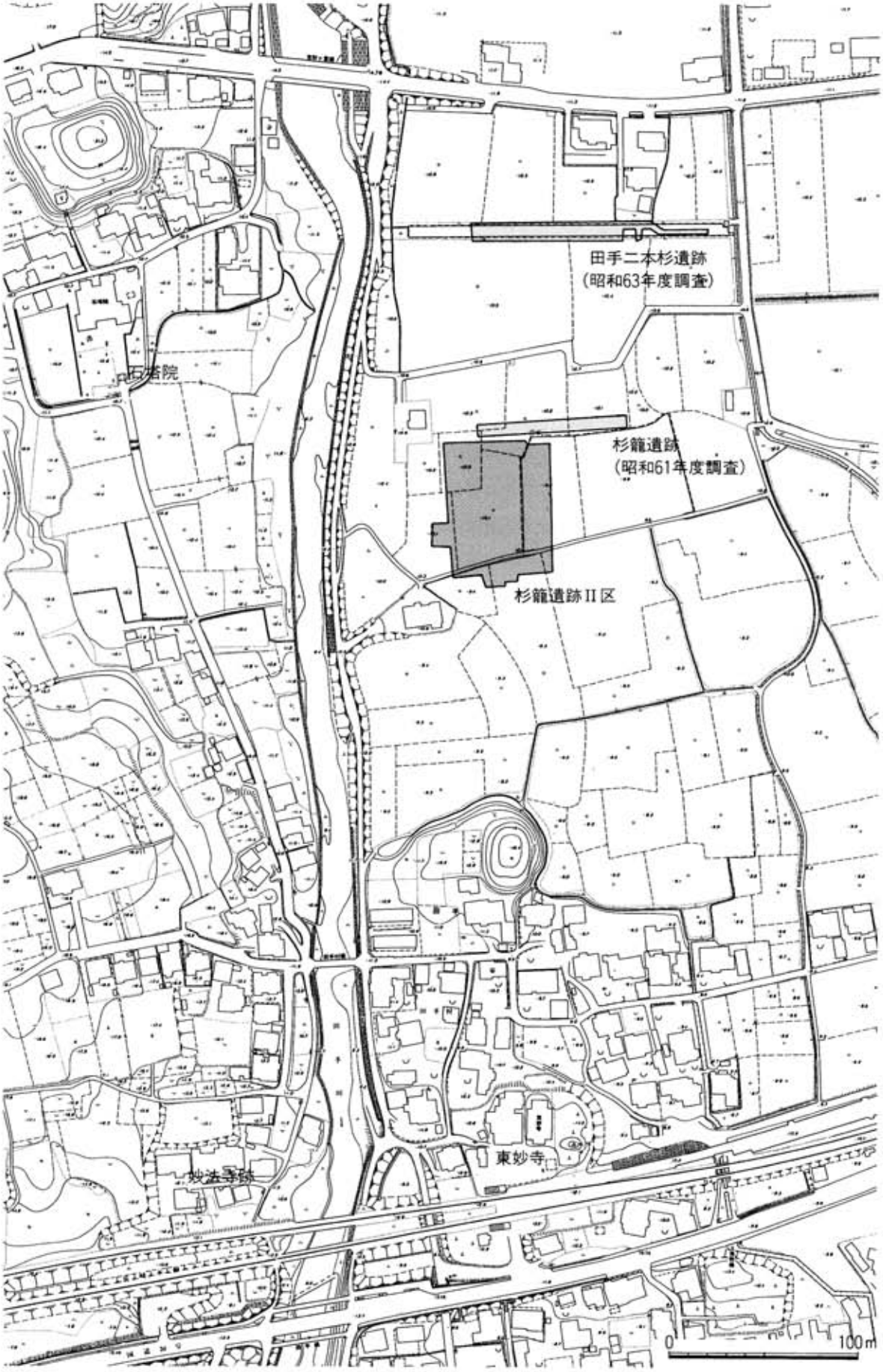


Fig. 2　調査区位置図（1／3,000）

Fig. 3　遺構配置図（1／300）

区域が主な居住空間と推測される。柵列は区画溝や掘立柱建物と平行するものがほとんどで，相互に関連が深いものと考えられる。掘立柱建物・柵列の時期はほとんどのものが主軸方向や位置的な関係から区画溝と同時期であると考えられるが，主軸が異なるＳＢ225掘立柱建物，ＳＡ227･230柵列は時期が異なる可能性が高い。土坑はＳＤ102溝とＳＤ152溝の間に多く検出されている。時期は13世紀前半～中頃のＳＫ142土坑から区画溝と同時期のＳＫ100･101土坑まで確認される。畑状遺構は区画溝の段階のものであると考えられるが，区画のどの段階のものかは不明である。出土遺物には，土師器小皿・坏・鍋，瓦器椀・茶釜・羽釜・擂鉢・火鉢，輸入陶磁器（白磁・青磁）椀・皿・坏・盤，国産陶器（備前焼）擂鉢などが出土しており，14世紀後半～15世紀代のものが主体を占める。特徴としては，青磁盤や火鉢類が比較的多いことがあげられる。また，宋銭８枚が出土しているが，うち４枚は柱穴下層からの出土であり，儀礼的なものと考えられる。

なお，周辺には中世の遺跡が多く，杉籠遺跡西側の吉野ヶ里遺跡においても相当数の遺構，遺物が確認されている。また，調査区の南側約300ｍには東妙寺，北西側約250ｍには石塔院，南西側約400ｍには妙法寺跡が所在している。

Tab. 1　遺構一覧表

遺構番号	遺構種別	時　代	備　　考	ページ
ＳＫ100	土坑	中世		67
ＳＫ101	土坑	中世		67
ＳＤ102	区画溝	中世		46
ＳＤ103	区画溝	中世	ＳＤ104と重複し，ＳＤ104より古い。	
ＳＤ104	区画溝	中世		41
ＳＤ105	区画溝	中世		43
ＳＸ106	土坑？	中世		
ＳＤ107	区画溝？	中世	遺物はＳＤ103として取り上げか？	45
ＳＫ108	土坑	古代	ＳＫ117と同一遺構。	21
ＳＫ109	土坑	中世	ＳＫ129と同一遺構。	70
ＳＫ110	土坑	古代		21
ＳＫ111	土坑	古代		26
ＳＫ112	土坑	古代		26
ＳＫ113	土坑	中世？	ＳＫ198と同一遺構。	
ＳＫ114	土坑？	不明	ＳＫ151と同一遺構か。遺物は古代まで	
ＳＫ115	土坑	中世		
ＳＫ116	土坑	古代？	遺物少量。	
ＳＫ117	土坑	古代	ＳＫ108と同一遺構。ＳＫ108として報告。	
ＳＫ118	土坑	古代	Ｐ828と同一遺構。	
ＳＫ119	土坑	中世	遺物少量。	
ＳＫ120	土坑	不明	遺物ごく少量。	
ＳＫ121	土坑	古代？	遺物少量。	
ＳＫ122	土坑？	不明	未掘？	
ＳＫ123	土坑	古代？	遺物少量。	
ＳＫ124	土坑？	古代？	未掘。ＳＫ127の遺物もＳＫ124で取り上げ。	
ＳＫ125	土坑	古代	Ｐ824と同一遺構。ＳＫ138としても遺物取り上げか。	32
ＳＫ126	土坑	古代？	未掘。	
ＳＫ127	土坑	古代	ＳＫ124で取り上げ。	32
ＳＫ128	土坑	不明	遺物少量。	
ＳＫ129	土坑	中世	ＳＫ109と同一土坑。ＳＫ109で報告。	
ＳＤ130			位置不明。	
ＳＫ131	土坑	中世		70
ＳＫ132	土坑	古代		32
ＳＤ133	区画溝？	中世		
ＳＫ134	土坑	中世		70

遺構番号	遺構種別	時　代	備　　考	ページ
ＳＫ135	土坑	中世		71
ＳＫ136	土坑？	中世		
ＳＫ137	土坑	中世		71
ＳＫ138	土坑？	中世？	二つの土坑に同一番号。一方はＳＫ125と重複か？	
ＳＫ139	土坑	中世		71
ＳＫ140			位置不明。	
ＳＫ141			位置不明。	
ＳＫ142	土坑	中世		73
ＳＫ143	土坑	中世		74
ＳＫ144	土坑	不明	遺物少量。	
ＳＫ145	土坑	中世		
ＳＫ146	土坑	中世？	遺物少量。	
ＳＫ147	土坑	不明	遺物ごく少量。	
ＳＫ148			位置不明。	
ＳＫ149	土坑	中世？	遺物少量。	
ＳＫ150	土坑	中世	遺物少量。	
ＳＫ151	土坑	中世	ＳＫ114と同一遺構か？	74
ＳＤ152	区画溝	中世		48
ＳＤ153	区画溝	中世		48
ＳＫ154	土坑	中世		
ＳＤ155	区画溝	中世		48
ＳＫ156	土坑	古代		34
ＳＫ157	土坑	古代		
ＳＫ158	土坑	古代	番号が重複する中世の土坑あり。	35
ＳＫ159	土坑	中世		
ＳＫ160	土坑	不明	遺物少量。	
ＳＫ161	土坑	中世		
ＳＫ162	土坑	古代		38
ＳＫ163	土坑	古代		39
ＳＫ164	土坑	古代		39
ＳＫ165	土坑	中世		75
ＳＤ166	区画溝	中世		51
ＳＸ167	土坑？	中世		
ＳＫ168			位置不明。	
ＳＫ169			位置不明。	
ＳＸ170			調査区東側中央倒木周辺出土遺物。	
ＳＡ171	柵列	中世		55
ＳＢ172	掘立柱建物	中世		59
ＳＢ173	掘立柱建物	中世		59
ＳＢ174	掘立柱建物	中世		64
ＳＢ175	掘立柱建物	中世		63
ＳＢ176	掘立柱建物	中世		63
ＳＢ177	掘立柱建物	中世		65
ＳＫ178	土坑	中世		76
ＳＤ179	区画溝？	中世		53
ＳＫ180	土坑	中世		
ＳＫ181			未掘？	
ＳＤ182	区画溝？	中世		53
ＳＸ183	畑状遺構	中世		78
ＳＸ184	畑状遺構	中世		78
ＳＸ185	畑状遺構	中世		78
ＳＸ186	畑状遺構	中世		78
ＳＸ187	畑状遺構	中世		78
ＳＸ188	畑状遺構	中世		78
ＳＸ189	畑状遺構	中世		78
ＳＤ190	畑状遺構	中世		78

遺構番号	遺構種別	時　代	備　　考	ページ
ＳＸ191	畑状遺構	中世		78
ＳＸ192	畑状遺構	中世		78
ＳＸ193	畑状遺構	中世		78
ＳＤ194	区画溝	中世		54
ＳＤ195	溝	中世		
ＳＤ196	溝	中世		
ＳＫ197	土坑		二つの土坑に同一番号。	
ＳＫ198	土坑	中世？	ＳＫ113と同一遺構。	
ＳＫ199	土坑	古代		40
ＳＫ200	土坑	中世？	遺物少量。	
ＳＥ201	井戸？	中世		78
ＳＤ202	区画溝	中世		
ＳＤ203	溝	不明	遺物ごく少量。	
ＳＤ204	溝	古代？		
ＳＤ205	溝	不明	遺物ごく少量。	
ＳＤ206	溝	不明	遺物ごく少量。ガラス製丸玉出土。	
ＳＫ207	土坑	中世		
ＳＤ208	溝	中世		
ＳＫ209	土坑	中世		
ＳＫ210			位置不明。	
ＳＤ211	区画溝？	中世		54
212			（トレンチ）	
ＳＫ213	土坑	中世		76
ＳＤ214	溝	中世		
215			（トレンチ）	
ＳＤ216	区画溝？	中世		
ＳＤ217	溝	不明	遺物少量。	
ＳＫ218	土坑	古墳		18
ＳＤ219	溝	不明	遺物少量。	
ＳＤ220	区画溝？	中世		
ＳＤ221	区画溝？	中世？		
ＳＤ222	区画溝？	中世		54
ＳＫ223	土坑	中世		
ＳＡ224	柵列	中世		55
ＳＢ225	掘立柱建物	中世		55
ＳＡ226	柵列	中世		55
ＳＡ227	柵列	中世		56
ＳＢ228	掘立柱建物	中世		56
ＳＡ229	柵列	中世		56
ＳＡ230	柵列	中世		58
ＳＡ231	柵列	中世		59
ＳＡ232	柵列	中世		59
ＳＡ233	柵列	中世		59
ＳＡ234	柵列	中世		59
ＳＡ235	柵列	中世		66
ＳＢ236	掘立柱建物	中世		66
ＳＢ237	掘立柱建物	中世		66
ＳＢ238	掘立柱建物	中世		65
ＳＡ239	柵列	中世		66
ＳＡ240	柵列	中世		67
ＳＰ241	土坑墓	古代		78
ＳＤ242	溝	中世		
ＳＫ459	土坑	中世		
ＳＤ464	区画溝？	中世		
ＳＤ465	区画溝？	中世		

２．弥生・古墳時代の遺構と遺物

（１）土坑

ＳＫ218土坑（Fig. 4）

調査区ほぼ中央に位置する。遺物はごく少量であるが，奈良時代以降の遺物がみられないことから古墳時代のものと判断した。細長い不整形な平面形で，長軸3.3ｍ，短軸0.85ｍ，深さ0.3ｍである。底面はほぼ平坦である。遺物は図示したもののほかに，須恵器蓋坏が出土している。

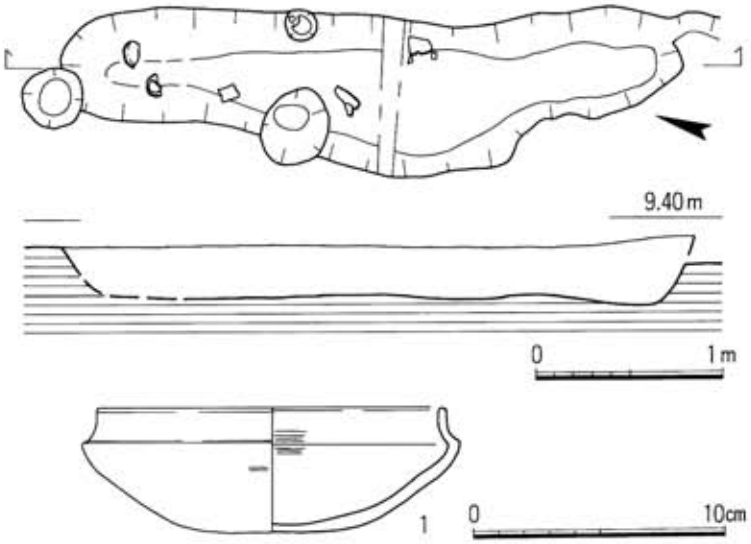


Fig. 4　ＳＫ218土坑（１／40），出土遺物（１／３）

1は土師器坏で，復元口径13.9cm，器高4.9cmである。内外面ともヘラミガキで，外面には黒塗りの痕跡があり，内面も黒塗りの可能性がある。

（２）その他の遺物（Fig. 5・6）

弥生・古墳時代の遺物のうち，小土坑，小穴，検出面から出土したものを取り上げる。

2～**18**は弥生時代の遺物である。**2**・**3**はＰ597，**4**はＰ598から出土した。調査区南側ほぼ中央に位置する。二つの小土坑は近接しており(PL. 3)，弥生土器が集中して出土している。あるいは一つの土坑になるかもしれない。**2**は複合口縁壺で，底部は平底である。復元口径23.0cm，底径6.8cm，器高37.9cmである。頸部外面はハケメ後ナデである。**3**は口縁部が「く」字形に屈折する甕で，復元口径22.6cmである。**4**は複合口縁壺で，底部は平底である。胴部外面上半はハケメ後ナデである。口径23.8cm，底径7.6cm，器高36.4cmである。**5**～**7**は小土坑（Ｐ661）から出土した。**5**は複合口縁壺で，復元口径21.6cmである。口縁屈曲部下に指押さえの痕跡が残る。**6**・**7**は口縁部が「く」字形に屈折する甕である。**6**は復元口径23.6cm，**7**は復元口径24.6cmである。

13は土玉で，小穴（Ｐ839）から出土した。他にこの小穴からは弥生土器片のみ出土している。全体に押さえた平坦面が多く，いびつな形態である。径1.65～1.75cm，孔径0.1cm，高さ1.2cmである。**14**・**15**は小穴（Ｐ470）から出土した。**14**は直口壺で，復元口径8.0cmである。**15**は口縁部が「く」字形に屈折する甕で，復元口径29.0cmである。**16**は小穴（Ｐ547）から出土した。小穴自体は中世のものである。裾部端部に凹線文が施された器台で，復元裾部径19.4cmである。１カ所に穿孔が確認される。**17**・**18**は小穴（Ｐ467）から出土した。ともに直口縁の鉢で，**17**は口径13.0cm，器高5.3cmで，底部は凸レンズ状に近い。**18**は復元口径14.4cmである。

8～**13**は検出面から出土した。**8**は肩部に簾状文が施された壺である。**9**は無頸壺で，底部は平底である。復元口径11.4cm，器高12.1cmである。外面と口縁部内面に丹塗りが施される。**10**はいわゆる立岩産の石包丁で，残存長9.0cm，幅3.3cm，厚さ0.6cmである。**11**はガラス小玉で，径0.26～0.28cm，孔径0.1cm，厚さ0.2cm

である。色調はライトブルーである。**12**は見なれない器形であるが，底部が平底に近い形態と考えられる点などから弥生土器の鉢と判断した。口縁部下の沈線より下位には細かい編み籠によるものと思われる圧痕が全面にみられる。

19・**20**は古墳時代の遺物である。**19**は小穴（P215），**20**は検出面から出土した。ともに甕で，**19**は復元口径16.2cm，**20**は復元口径15.8cmである。

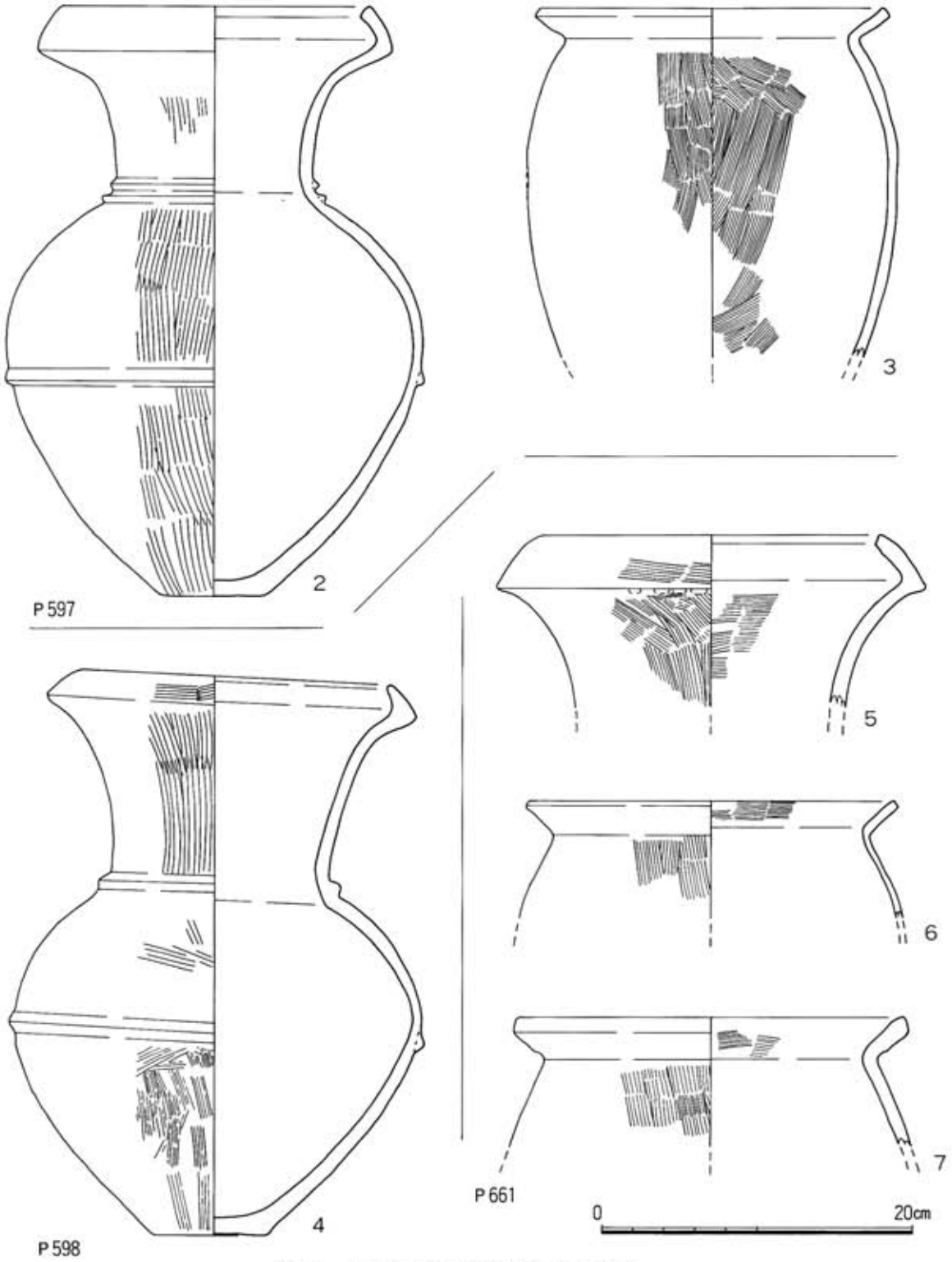


Fig. 5　小穴出土弥生時代遺物（1／4）

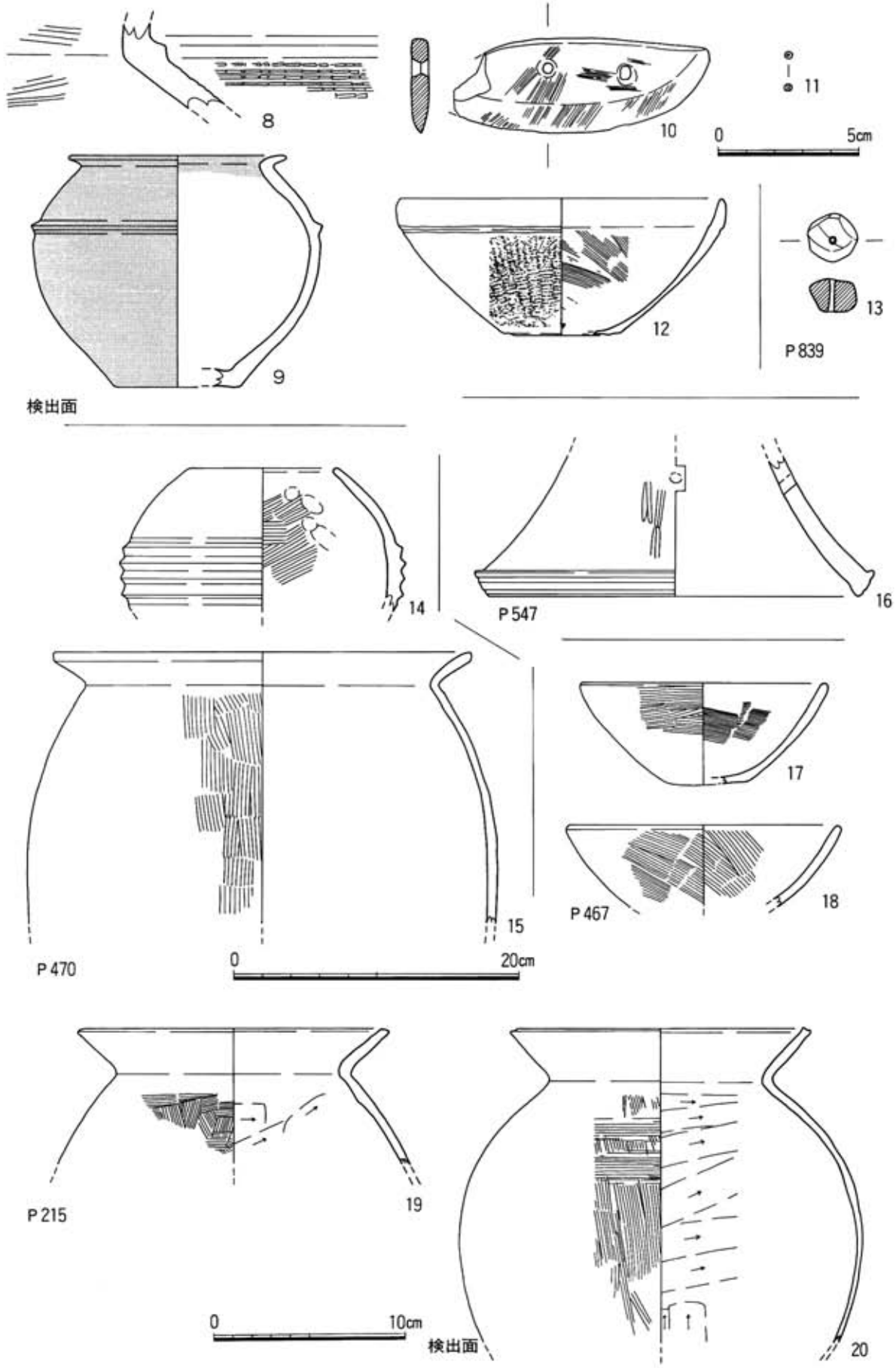


Fig. 6　小穴・検出面出土弥生・古墳時代遺物（8～11・13：1／2，15：1／4，他：1／3）

3．古代の遺構と遺物

（1）土坑

ＳＫ108土坑（Fig. 7・8）

調査区北東部に位置する。平面形は正三角形に近い不整形で，長軸3.04ｍ，短軸2.56ｍである。底面はほぼ平坦である。検出面に近い高さで焼土が確認されている。

21～27は須恵器である。**21**・**22**は蓋である。**21**は復元口径15.6cmで，天井部に回転ヘラケズリが施される。**22**は壺蓋と考えられ，扁平なつまみがつく。口径13.7cm，器高3.6cmで，天井部に回転ヘラケズリが施される。**23**・**24**は坏で，**23**は復元口径13.3cmである。**24**は口径13.7cm，器高3.8cmで，底部外面は周縁部には回転ヘラケズリが施されるが，中心部はヘラ切り後未調整である。**25**は高台付坏で，復元口径14.6cm，器高4.3cmである。底部外面はヘラ切り後ナデである。**26**は皿で，口径18.9cm，器高2.3cmである。底部外面はヘラ切り後ナデである。**27**は高坏の脚部である。

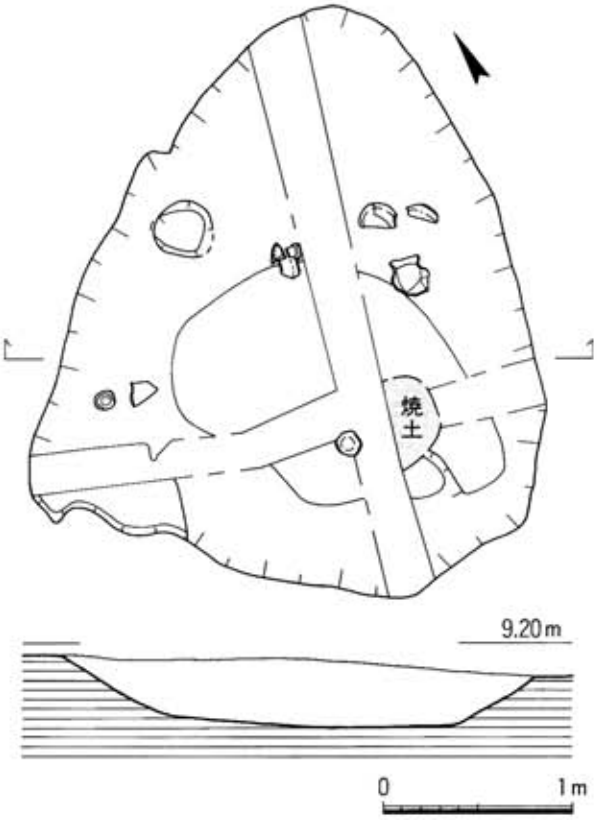


Fig. 7　ＳＫ108土坑（1／40）

28～**34**は土師器である。**28**・**29**は坏で，**28**は混入と考えられ，復元口径11.8cm，器高2.6cmである。**29**は復元口径14.6cm，器高3.4cmである。底部外面は回転ヘラケズリで，体部外面は回転ヘラミガキと推定される。**30**～**32**は小型の甕で，**30**は復元口径19.3cm，**31**は復元口径18.5cm，**32**は復元口径20.3cmである。**33**・**34**は甕で，**33**は復元口径30.0cm，**34**は復元口径28.2cmである。

ＳＫ110土坑（Fig. 9・10）

調査区中央部東側に位置する。西側は小穴との切合と考えられるので，平面形はやや不整形な方形になるものと推定される。一辺2.55ｍ，深さ0.68ｍで，底面はほぼ平坦である。

35～**47**は須恵器である。**35**～**38**は蓋である。**35**は扁平なつまみがつき，復元口径15.6cm，器高1.2cmである。天井部に回転ヘラケズリが施される。**36**は復元口径16.0cmで，天井部に回転ヘラケズリが施される。**37**は復元口径15.3cmで，天井部はヘラ切り後未調整である。**38**は扁平なつまみがつき，復元口径16.4cm，器高1.5cmである。天井部周縁部は回転ヘラケズリが施されるが，中央部はヘラ切り後ナデである。**39**は短頸壺で，復元口径10.0cm，器高7.4cmである。**40**は高台付坏で，復元口径13.7cm，器高4.1cmである。底部外面はナデである。**41**～**43**は坏である。**41**は復元口径13.0cm，**42**は復元口径15.0cm，器高4.0cmで，底部外面はヘラ切り後未調整である。**43**は口径15.3cm，器高3.7cmで，底部外面は回転ヘラケズリか。**44**は皿で，復元口径19.0cm，器高2.3cmである。底部外面はヘラ切り後ナデである。**45**～**47**は高坏坏部である。**45**は復元口径20.4cm，**46**は

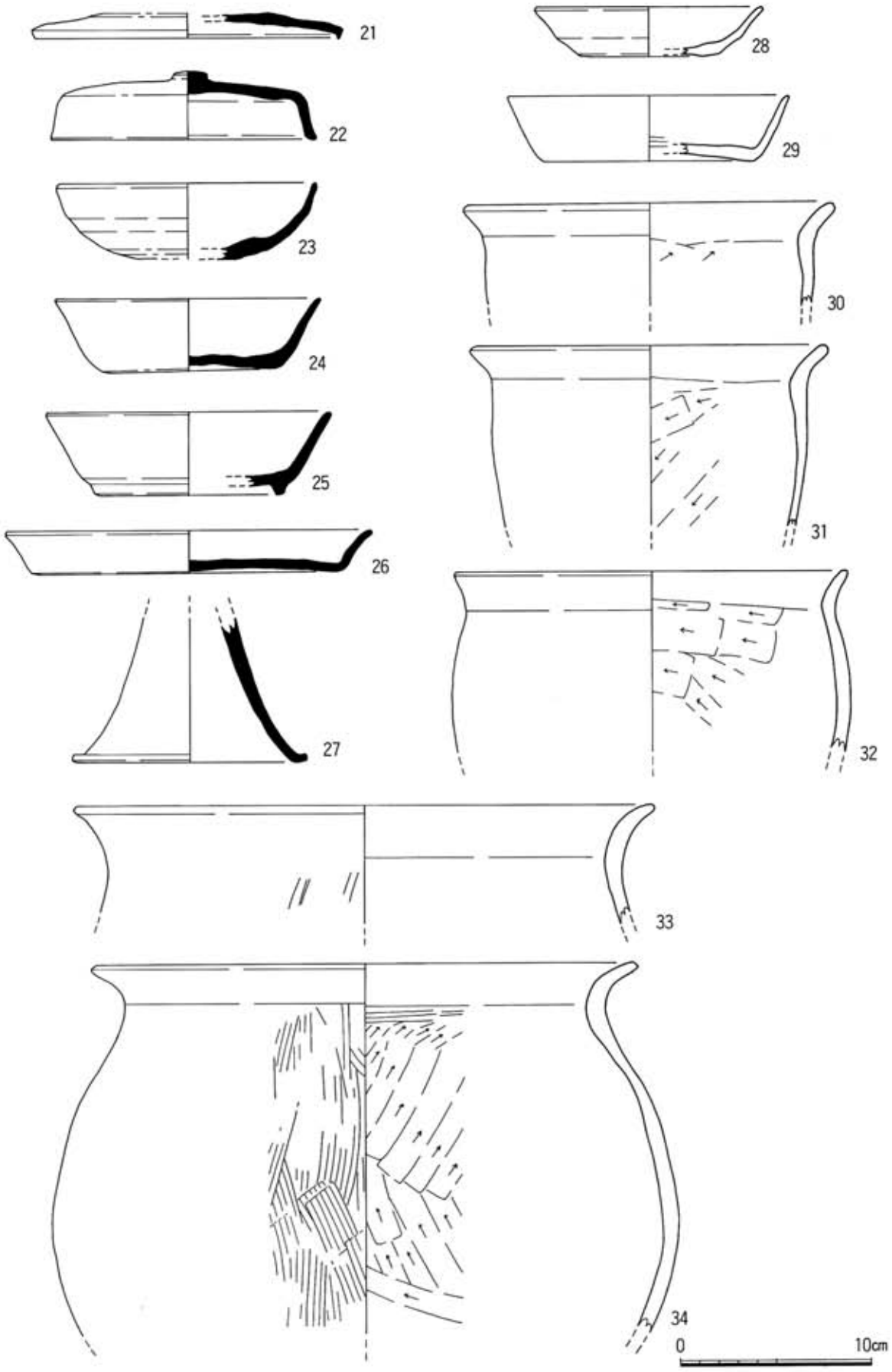


Fig. 8　ＳＫ108土坑出土遺物（１／３）

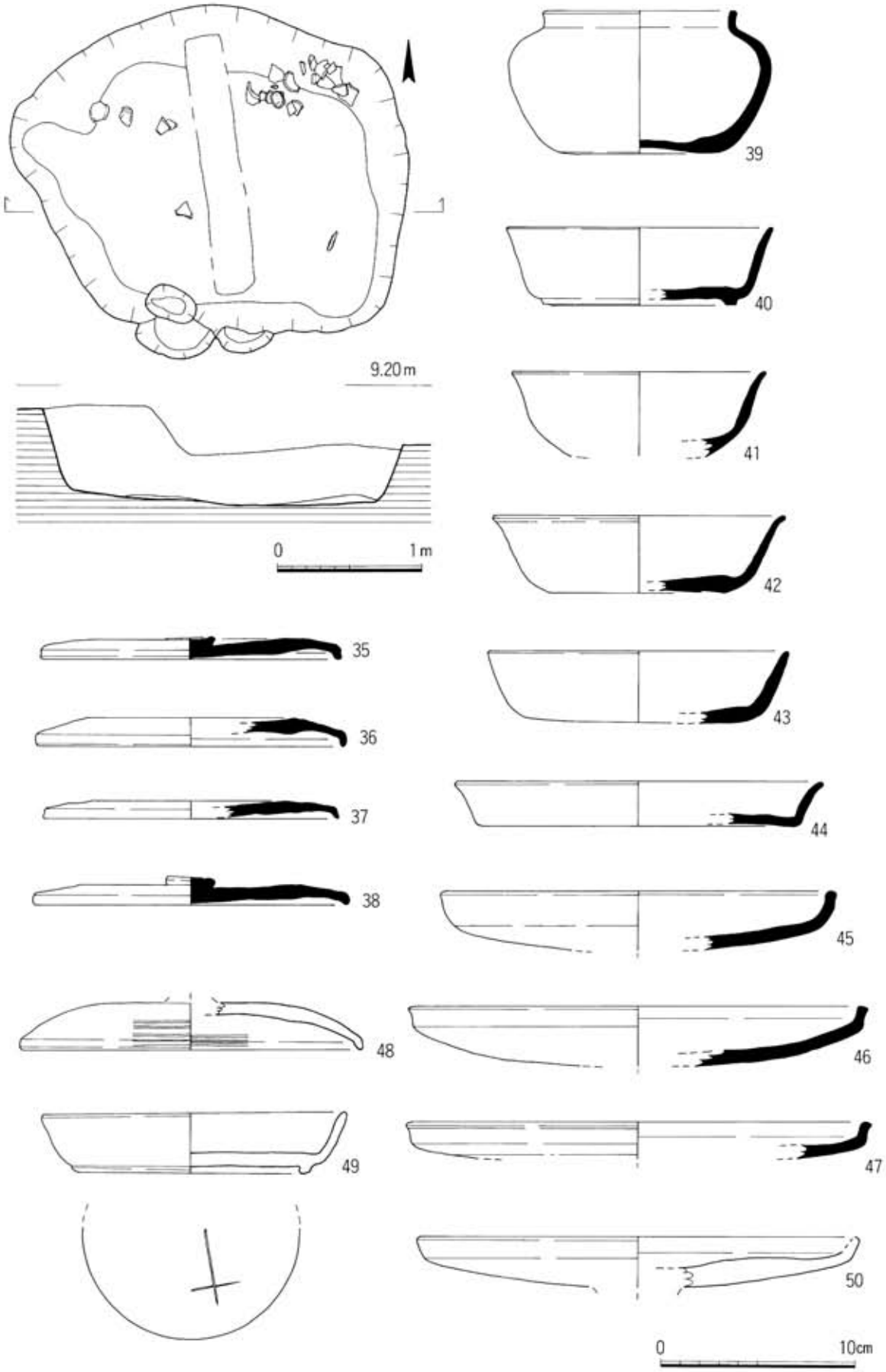


Fig. 9　SK110土坑（1／40），出土遺物①（1／3）

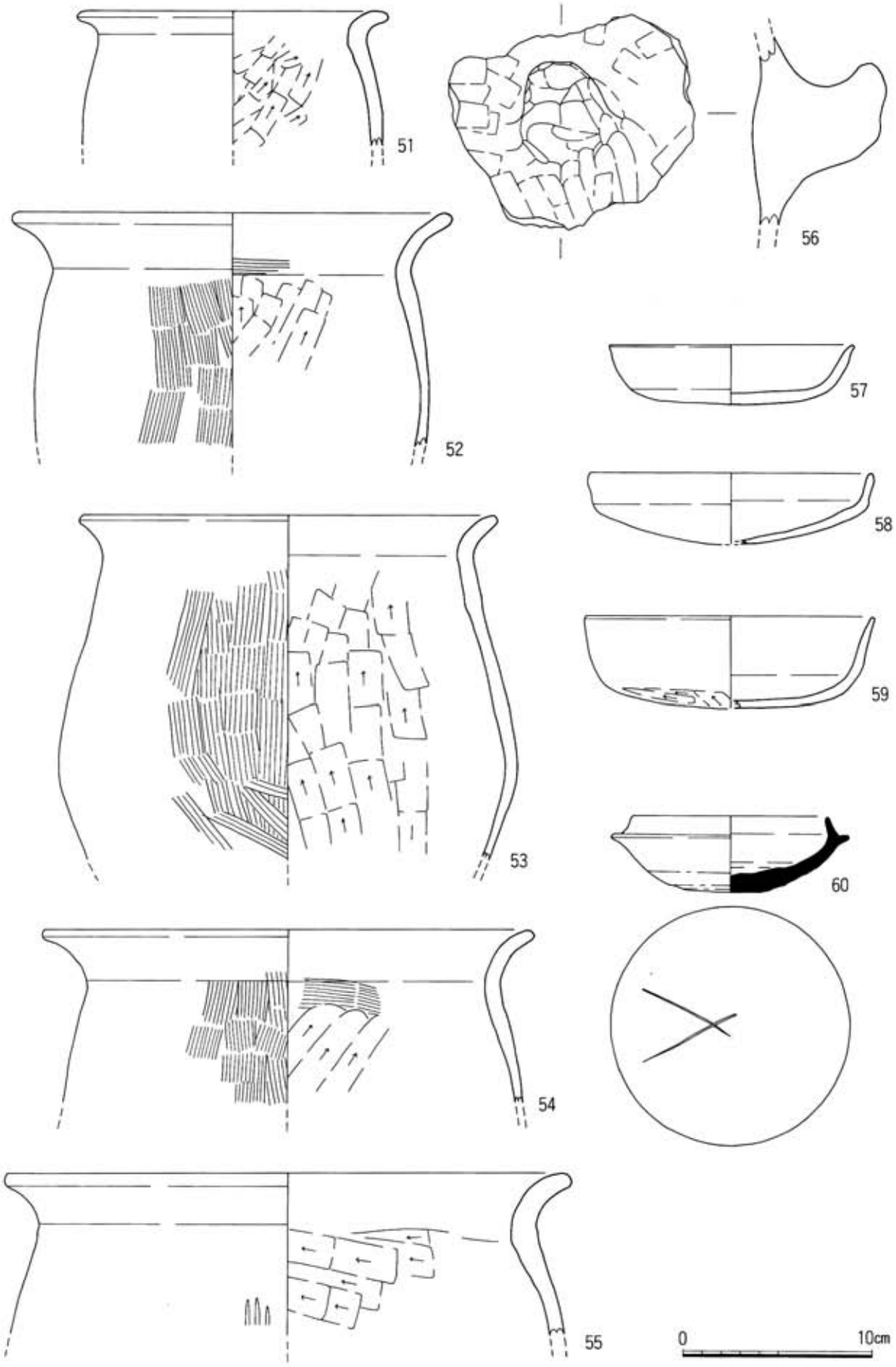


Fig. 10　ＳＫ110土坑出土遺物②（１／３）

復元口径23.6cm，**47**は復元口径24.0cmである。**46**・**47**は外面に回転ヘラケズリが施される。

48～**59**は土師器である。**48**は蓋で，口径17.4cmである。つまみの痕跡がみられる。天井部は回転ヘラケズリで，内外面とも回転ヘラミガキが施される。**49**は高台付坏で，口径15.8cm，器高3.2cmである。摩耗が著しいが，体部には回転ヘラミガキが施されていると推測される。高台内部は回転ヘラケズリで，ヘラ記号がある。**50**は高坏坏部で，復元口径22.3cmである。内面は摩耗が著しいが，ミガキと思われる。外面は回転ヘラケズリである。**51**は小型の甕で，復元口径16.2cmである。**52**～**55**は甕で，**52**は復元口径22.8cm，**53**は復元口径21.8cm，**54**は復元口径25.8cm，**55**は復元口径29.8cmである。**56**は甑の把手である。**57**～**59**は坏である。**57**は口径12.9cm，器高3.1cm，**58**は復元口径15.0cm，**59**は口径15.3cm，器高4.8cmである。いずれも底部外面は手持ちヘラケズリである。**60**は須恵器蓋坏で，混入品である。口径10.4cmで，底部外面にヘラ記号がある。

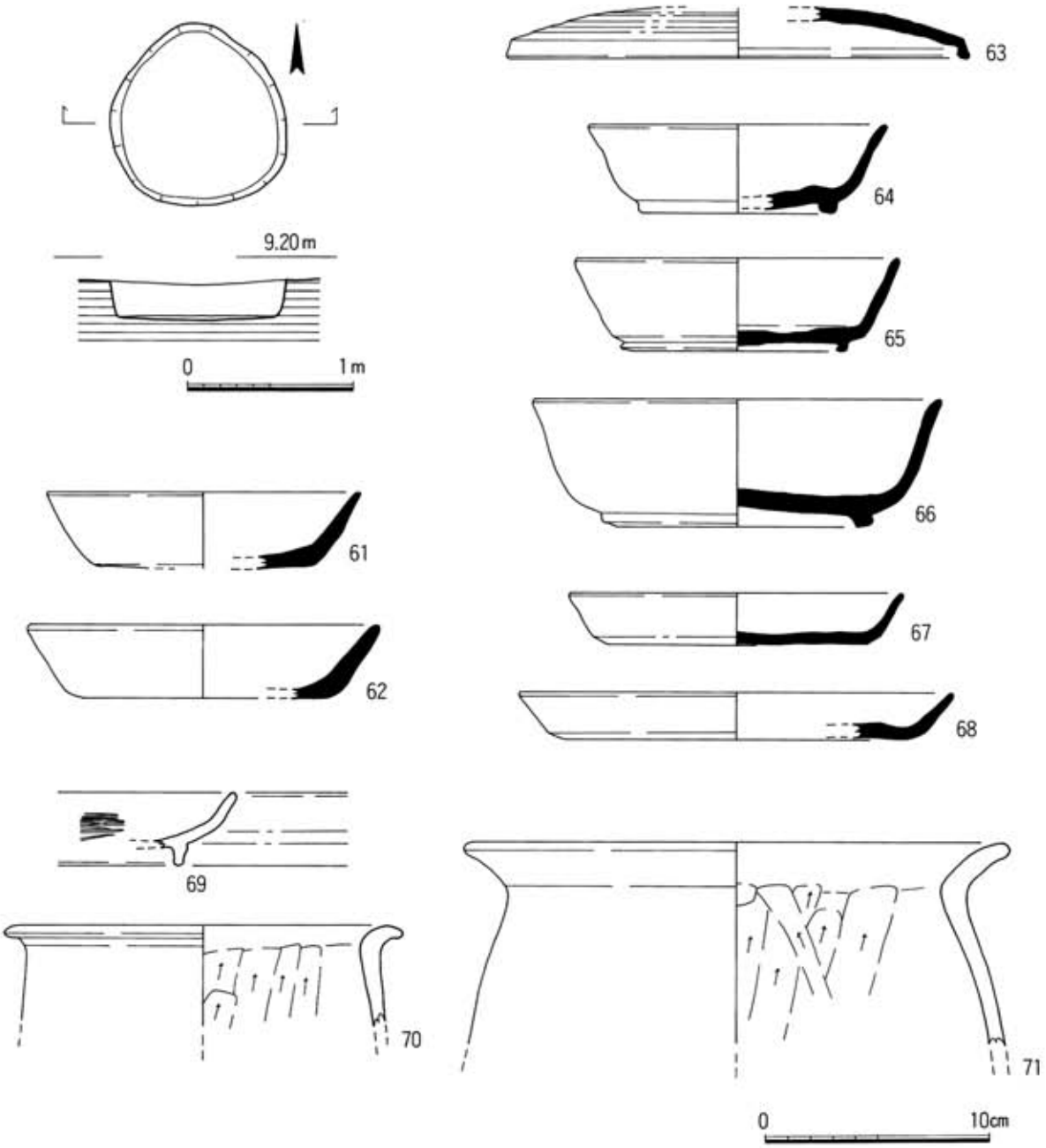


Fig. 11　ＳＫ111土坑（１／40），出土遺物（１／３）

ＳＫ111土坑（Fig. 11）

調査区中央部東側に位置する。平面はほぼ円形で，径1.1ｍ，深さ0.2ｍである。底面はほぼ平坦である。規模の割に遺物の出土量が多い（コンテナ１箱分）ことはやや疑問であるが，掲載した。

61～**68**は須恵器である。**61**･**62**は坏で，**61**は復元口径14.0cm，器高3.4cmである。底部はヘラ切り後ナデである。**62**は復元口径15.8cm，器高3.3cmである。**63**は蓋で，復元口径20.5cmである。天井部周縁部に粗い回転ヘラケズリが施される。**64**～**66**は高台付坏である。**64**は復元口径13.3cm，器高3.9cm，**65**は口径14.4cm，器高4.2cmで，ともに底部外面はヘラ切り後未調整である。**66**は復元口径18.2cm，器高5.7cmで，底部外面周縁部は回転ヘラケズリであるが，中央部にはヘラ切り後未調整の部分が残る。**67**・**68**は皿である。**67**は復元口径14.9cm，器高2.3cm，**68**は復元口径19.4cm，器高2.1cmで，ともに底部外面は回転ヘラケズリである。

69～**71**は土師器である。**69**は高台付皿と考えられ，器高3.3cmである。体部外面はヨコナデの後にミガキを施しているものと思われ，体部下半部は回転ヘラケズリである。**70**は小型の甕で，復元口径17.9cmである。**71**は甕で，復元口径19.4cmである。

ＳＫ112土坑（Fig. 12～17）

調査区ほぼ中央に位置する。中世の掘立柱建物が集中する場所に当たり，小穴との切合が著しく，正確な平面形は不明である。写真（PL. 4）から判断すると，北側の方形の部分と南側の部分は別の土坑の可能性もある。長軸4.4ｍ，短軸2.1ｍで，北側の深い部分の深さは0.7ｍである。詳しい出土状況図があるが，報告者の怠惰により上面の平面図しか図示することができなかった。

72～**102**は須恵器である。**72**・**73**はつまみのつかない小型の蓋である。**72**は復元口径10.6cm，器高1.6cm，

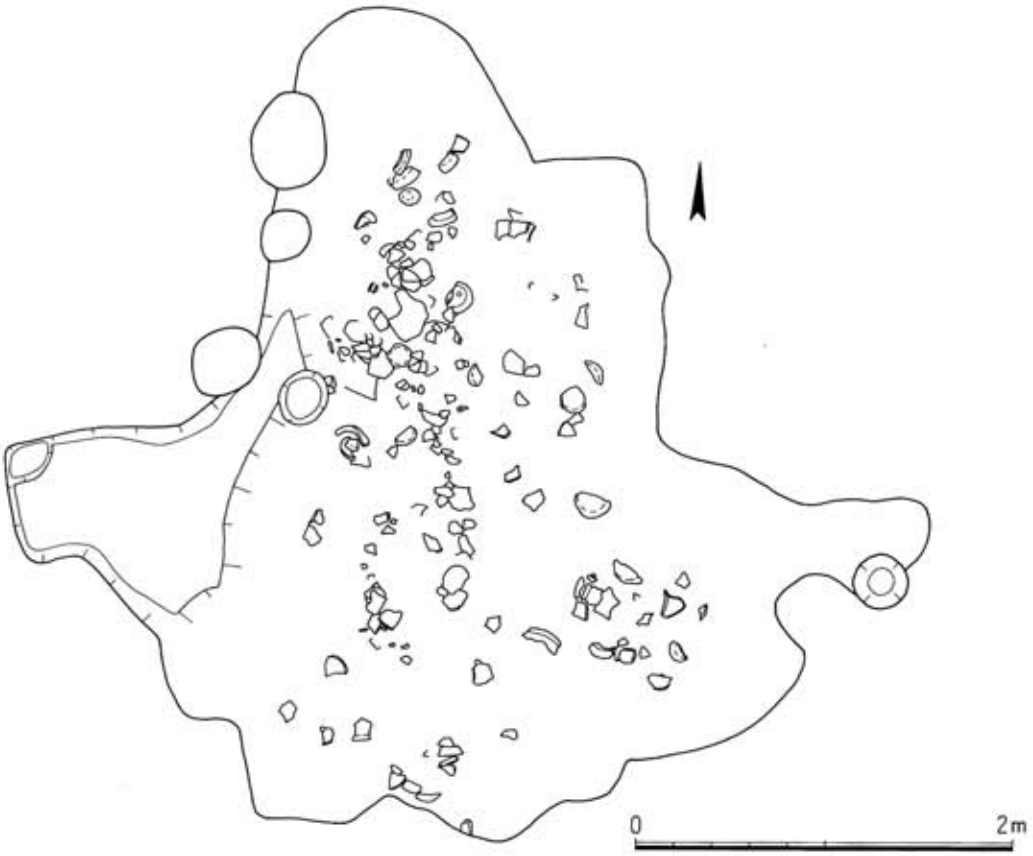


Fig. 12　ＳＫ112土坑平面図（１／40）

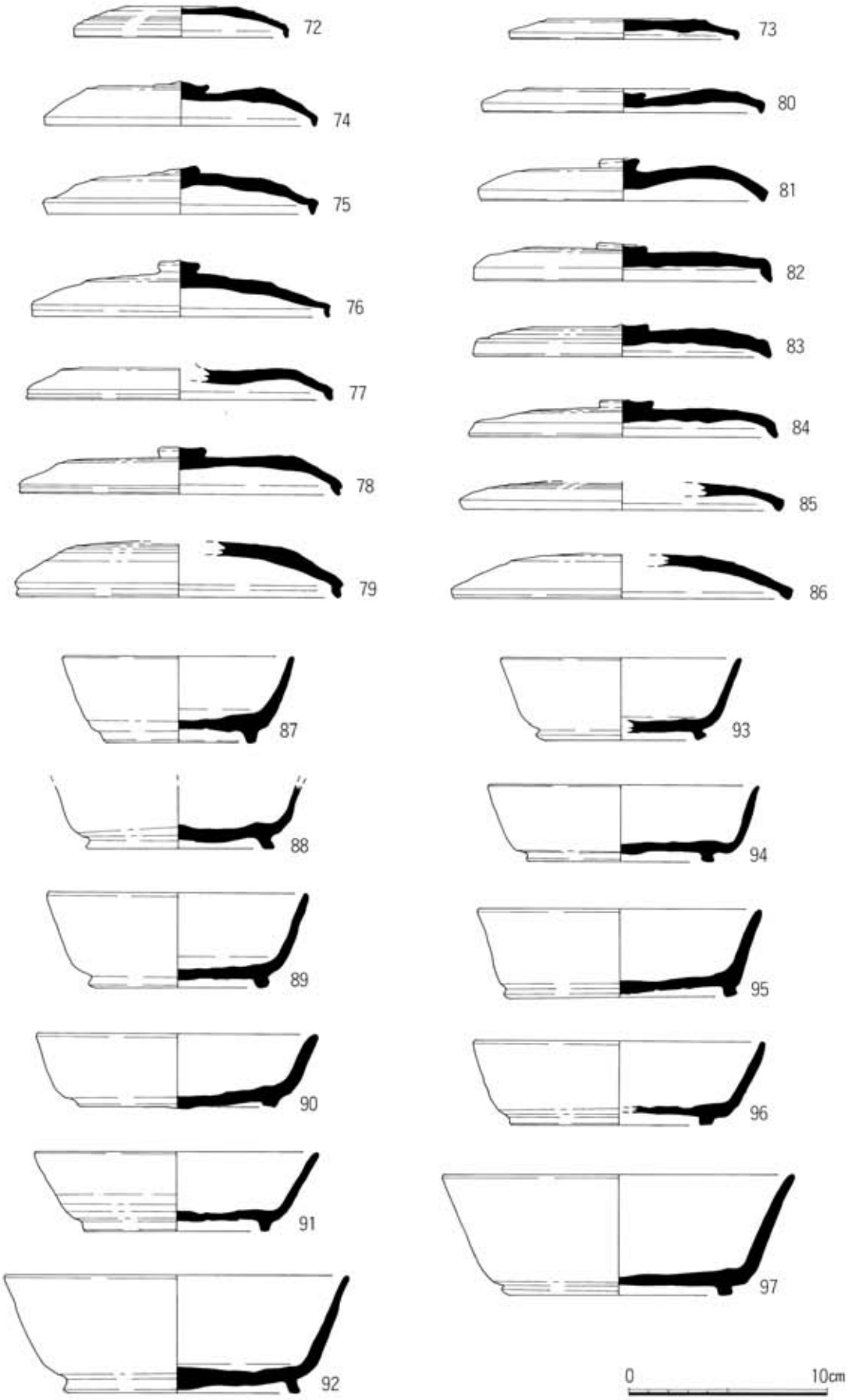


Fig. 13　ＳＫ112土坑出土遺物①（１／３）

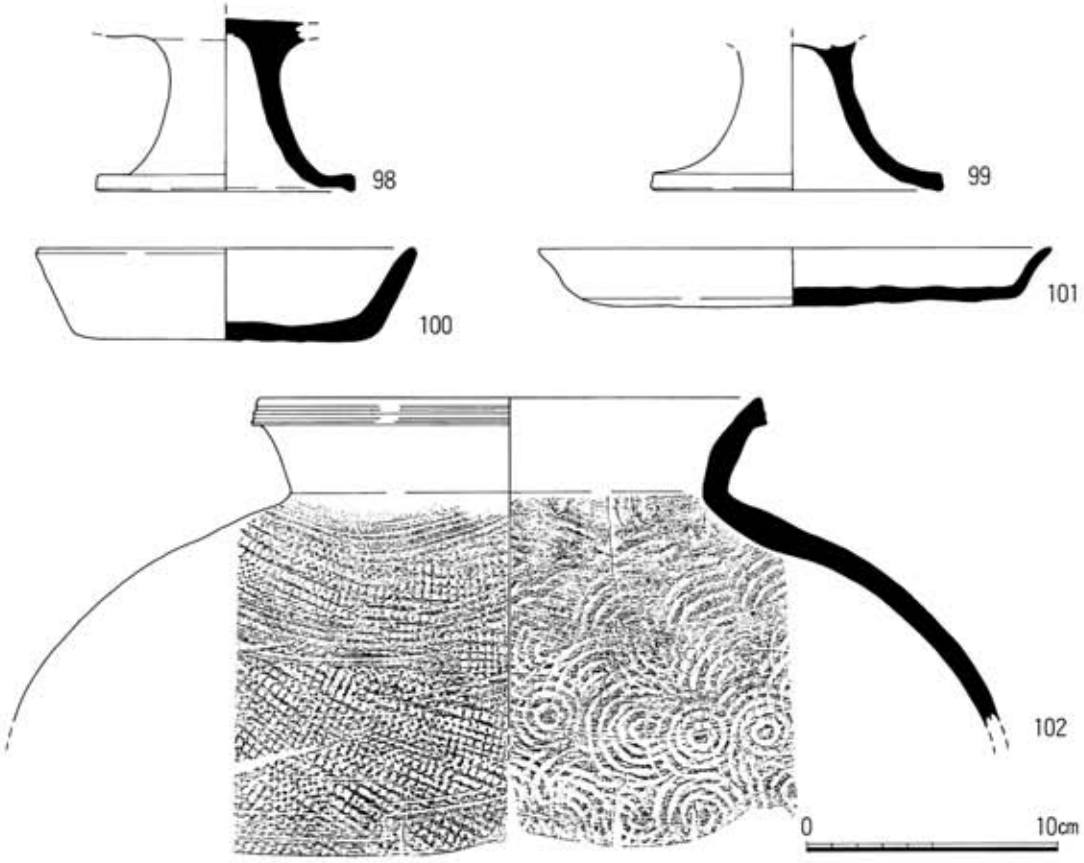


Fig. 14　ＳＫ112土坑出土遺物②（１／３）

73は口径11.3cm，器高1.3cmで，ともに天井部はヘラ切り後ナデである。**74**～**86**は蓋である。**74**はやや扁平な宝珠状のつまみがつき，復元口径13.6cm，器高2.3cmである。**75**は扁平な宝珠状つまみがつき，復元口径13.9cm，器高2.5cmである。**76**は宝珠状つまみがつき，口径14.9cm，器高2.9cmである。**74**～**76**は天井部には回転ヘラケズリが施されるが，中央部にはヘラ切り後未調整の部分が残る。**77**は復元口径15.3cmで，つまみがつくものと考えられる。**78**は扁平なつまみがつき，口径16.0cm，器高2.5cmである。**77**・**78**は天井部に回転ヘラケズリが施される。**79**は復元口径16.1cm，器高2.8cmで，天井部周縁部には回転ヘラケズリが施されるが，中央部はヘラ切り後ナデである。**80**は扁平な宝珠状つまみがつき，復元口径13.8cm，器高1.4cmである。天井部はヘラ切り後ナデである。**81**はやや高いつまみがつき，復元口径14.1cm，器高2.2cmである。上面全体に自然釉がかかる。**82**は扁平なつまみがつき，口径15.0cm，器高2.0cmである。**83**は扁平なつまみがつき，復元口径15.7cm，器高1.6cmである。**81**～**83**は天井部に回転ヘラケズリが施されるが，中央部にはヘラ切り後未調整の部分が残る。**84**は扁平な宝珠状つまみがつき，口径15.4cm，器高1.9cmである。**85**は復元口径15.6cm，**86**は復元口径18.6cmである。**84**～**86**は天井部に回転ヘラケズリが施される。**87**～**97**は高台付坏である。**87**は復元口径11.6cm，器高7.3cm，**87**・**88**は高台部付近には回転ヘラケズリが施され，底部外面はヘラ切り後未調整である。**89**は口径13.1cm，器高4.8cmで，底部外面はヘラ切り後未調整である。**90**は口径14.2cm，器高3.8cmで，高台部付近から底部外面周縁部には回転ヘラケズリが施されるが，中央部にはヘラ切り後未調整の部分が残る。**91**は復元口径14.3cm，器高4.1cmで，高台部付近は回転ヘラケズリが施され，底部外面はヘラ切り後未調整である。**92**は口径17.8cm，器高6.0cmで，高台部付近から底部外面周縁部には回転ヘラケズリが施されるが，中央部にはヘラ切り後未調整の部分が残る。**93**は復元口径11.9cm，器高4.1cmで，底部外面はヘラ切り後未調整である。**94**は復元口径13.8cm，器高3.9cmで，高台部付近から底部外面周縁部には回転ヘラケズリが施され

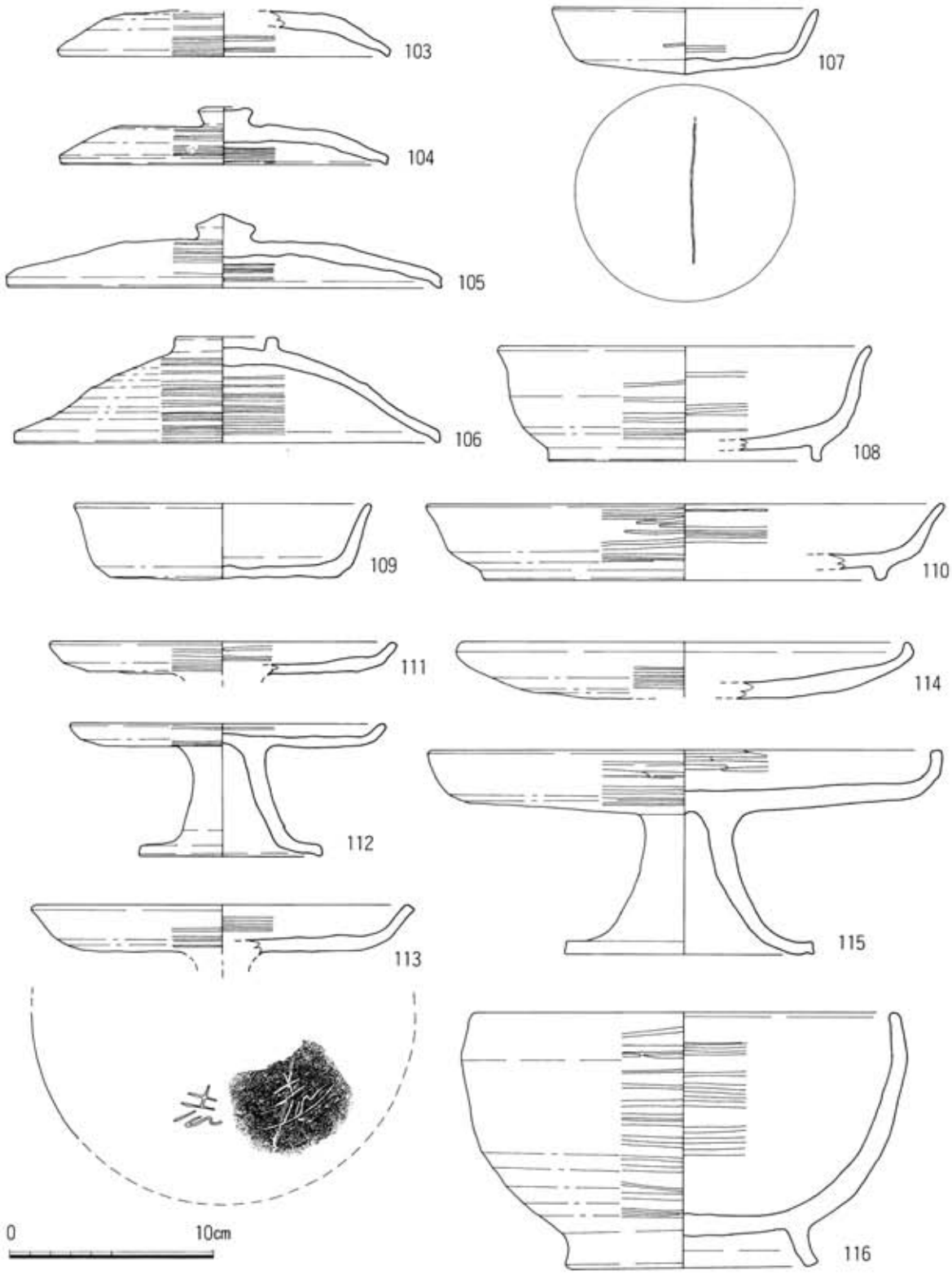


Fig. 15　ＳＫ112土坑出土遺物③（１／３）

るが，中央部にはヘラ切り後未調整の部分が残る。**95**は口径14.2cm，器高4.6cmで，高台部付近から底部外面周縁部には回転ヘラケズリが施されるが，中央部はナデである。**96**は口径14.4cm，器高4.3cmで，高台部付近から底部外面周縁部には回転ヘラケズリが施されるが，中央部にはヘラ切り後未調整の部分が残る。**97**は口径17.7cm，器高6.2cmで，底部外面は回転ヘラケズリである。**98**・**99**は高坏脚部である。**100**は坏で，口径14.8cm，器高3.7cmである。底部はナデである。**101**は皿で，復元口径20.2cm，器高2.3cmである。底部外面はヘラ

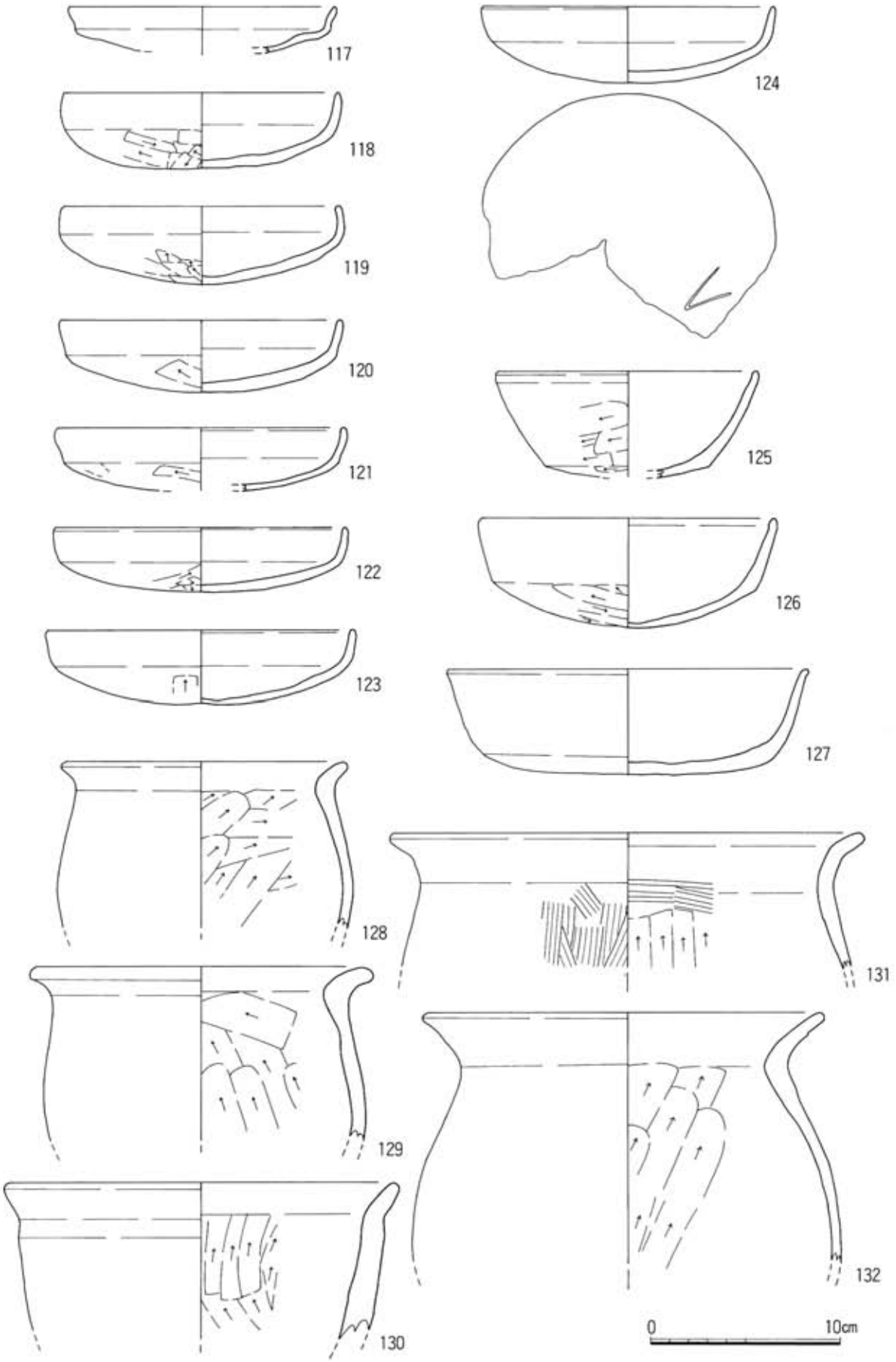


Fig. 16　ＳＫ112土坑出土遺物④（１／３）

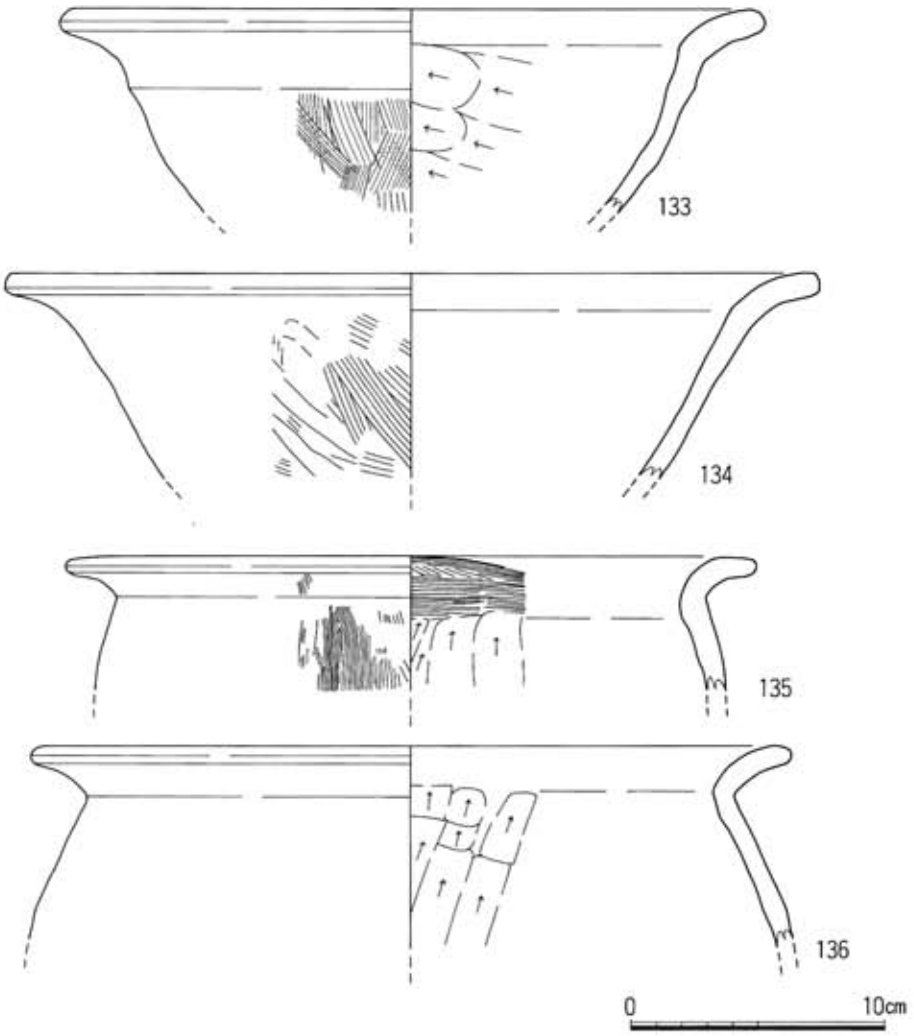


Fig. 17　ＳＫ112土坑出土遺物⑤（１／３）

切り後手持ちヘラケズリが一部に施される。**102**は壺で，復元口径20.4cmである。

103～**136**は土師器である。**103**～**106**は蓋で，**103**は復元口径16.2cmである。**104**はやや高いつまみがつき，口径16.0cm，器高2.8cmである。**105**は宝珠状つまみがつき，復元口径21.4cm，器高3.6cmである。**106**は環状のつまみがつき，復元口径20.6cm，器高5.2cmである。いずれも天井部は回転ヘラケズリで，内外面とも回転ヘラミガキが施される。**107**・**108**は高台付坏で，**107**は高台が欠失している。**107**は口径12.9cmで，外面底部にヘラ記号がみられる。**108**は復元口径18.0cm，器高5.6cmである。ともに底部外面は回転ヘラケズリで，坏部外面から内面は回転ヘラミガキが施される。**109**は坏で，口径14.4cm，器高3.7cmである。底部外面周縁部は回転ヘラケズリで，中央部はナデである。**110**は高台付皿で，復元口径25.0cm，器高3.7cmである。底部外面は回転ヘラケズリで，体部内外面は回転ヘラミガキが施される。**111**～**115**は高坏で，**111**は復元口径17.0cmである。**112**は復元口径15.4cm，裾部径8.9cm，器高6.4cmである。**113**は復元口径18.6cmで，坏部外面に「志」と思われるヘラ書きがある。**114**は復元口径21.2cmで，**115**は口径25.0cm，裾部径12.1cm，器高9.8cmである。いずれも坏部外面は回転ヘラケズリで，坏部内外面は回転ヘラミガキが施される。**116**は高台付鉢で，口径20.6cm，器高12.4cmである。体部下半部から底部にかけては回転ヘラケズリで，体部内外面は回転ヘラミガキが施される。**117**～**127**は底部に手持ちによるヘラケズリが施される坏である。**117**は復元口径14.0cm，**118**は口径14.5cm，器高4.1cm，**119**は口径14.7cm，器高4.1cm，**120**は口径14.7cm，器高3.8cm，**121**は復元口径15.1cm，

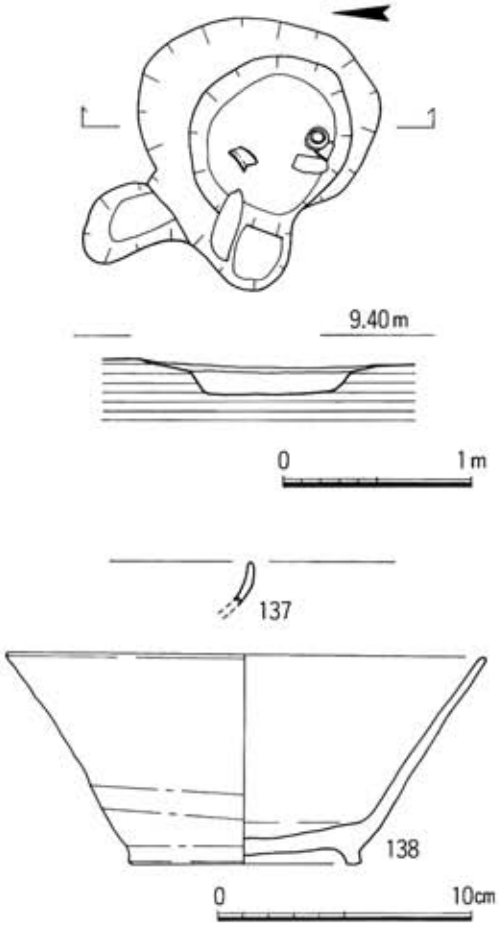


Fig. 18　ＳＫ125土坑（１／40），
出土遺物（１／３）

122は口径15.3cm，器高3.4cm，**123**は復元口径16.2cm，器高3.9cmである。**124**は復元口径15.4cm，器高4.0cmで，底部にヘラ記号がみられる。**125**は口径13.7cmで，体部外面までヘラケズリである。**126**は口径15.6cm，器高5.7cm，**127**は口径19.0cm，器高5.4cmである。**128**～**130**は小型の甕で，**128**は口径14.9cm，**129**は口径18.0cm，**130**は復元口径20.8cmである。いずれも胴部外面はナデである。**131**・**132**は甕で，**131**は復元口径25.0cm，**132**は口径21.0cmである。**133**・**134**は鉢で，**133**は復元口径27.9cm，**134**は復元口径32.2cmで，内面はナデである。**135**・**136**は甕で，**135**は復元口径27.4cm，**136**は復元口径30.1cmである。

ＳＫ125土坑（Fig. 18）

調査区北東部に位置する。平面はほぼ円形で，径0.85m，深さ0.1mである。底面はほぼ平坦である。

137は越州窯系青磁で，皿か椀である。**138**は土師器椀で，口径18.9cm，器高8.3cmである。体部下半部は回転ヘラケズリで，底部外面はナデである。

ＳＫ127土坑（Fig. 19）

調査区北側ほぼ中央に位置する。須恵器大甕口縁部が底部内に落ち込んだ状態で検出されており，大甕を据えた土坑と推定される。内部から12cmほどの石が数個出土している。径0.75mほどの平面ほぼ円形の掘形が確認でき，深さ0.25mである。底面はすり鉢状である。なお，遺物はＳＫ124として取り上げられているが，番号が重複している土坑がある。取り上げた日付によって区別ができるようであり，それに基づき遺物を分け，報告することにした。

139は土師器坏で，復元口径14.0cm，器高1.7cmである。底部外面はヘラ切り後ナデである。**140**は土師器椀で，復元口径13.9cm，器高5.9cmである。**141**は須恵器大甕で，口縁部と底部は接合できないが，図上で約100cmほどの器高に復元した。口径50.6cmで，口縁部外面に粗い波状文が１条施される。

ＳＫ132土坑（Fig. 20）

調査区北東部に位置する。中世のＳＤ102溝と重複する。平面ほぼ方形の土坑と考えられ，長軸2.35m，短軸2.2m，深さ0.65mである。検出面付近で焼土が確認されている。

142・**143**は須恵器蓋である。**142**は扁平なつまみがつき，復元口径13.2cm，器高1.5cmで，天井部は回転ヘラケズリである。**143**は復元口径21.4cmで，天井部はヘラ切り後ナデである。**144**は須恵器高台付坏で，復元口径13.6cm，器高3.9cmである。底部外面周縁部は回転ヘラケズリである。**145**は須恵器坏で，復元口径16.2cm，器高2.8cmである。底部外面はヘラ切り後ナデである。

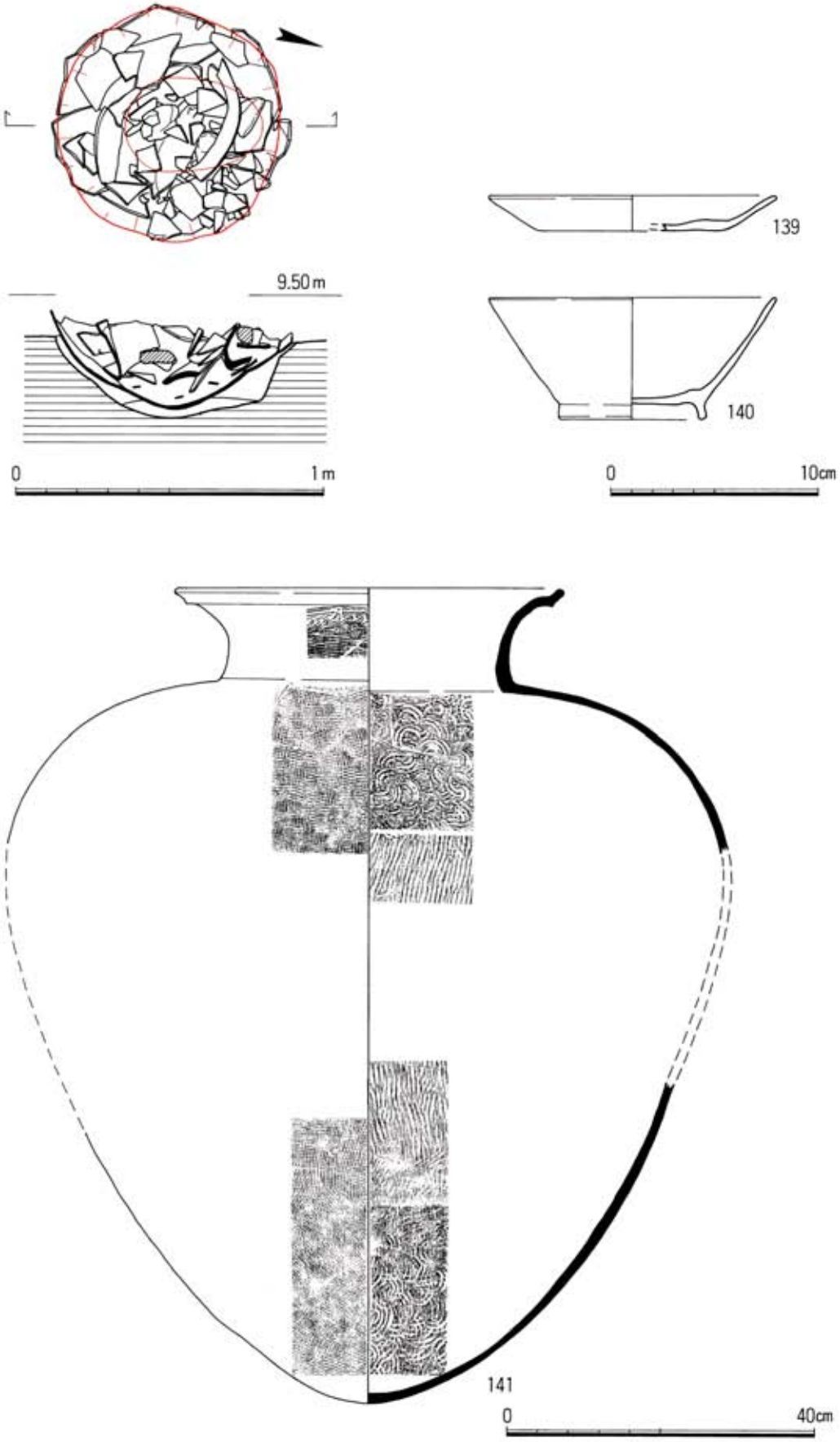


Fig. 19　ＳＫ127土坑（１／20），出土遺物（139・140：１／３，141：１／８）

146は土師器坏で，復元口径13.6cm，器高3.3cmである。底部外面は摩耗のため調整不明である。**147**は土師器高坏で，復元口径24.2cm，裾部径11.1cm，器高7.3cmである。坏部外面は回転ヘラケズリで，坏部内面から口縁部にかけては摩耗のため調整不明である。**148**は土師器小型甕で，復元口径16.6cmである。**149**は土師器甕で，復元口径27.6cmである。**150**は土師器鉢で，復元口径31.2cmである。**151**は平瓦で，布目痕が残る。

ＳＫ156土坑（Fig. 21）

調査区ほぼ中央に位置する。3.6ｍ×1.5ｍほどの細長い平面形で，深さ0.52ｍである。底面はほぼ平坦で

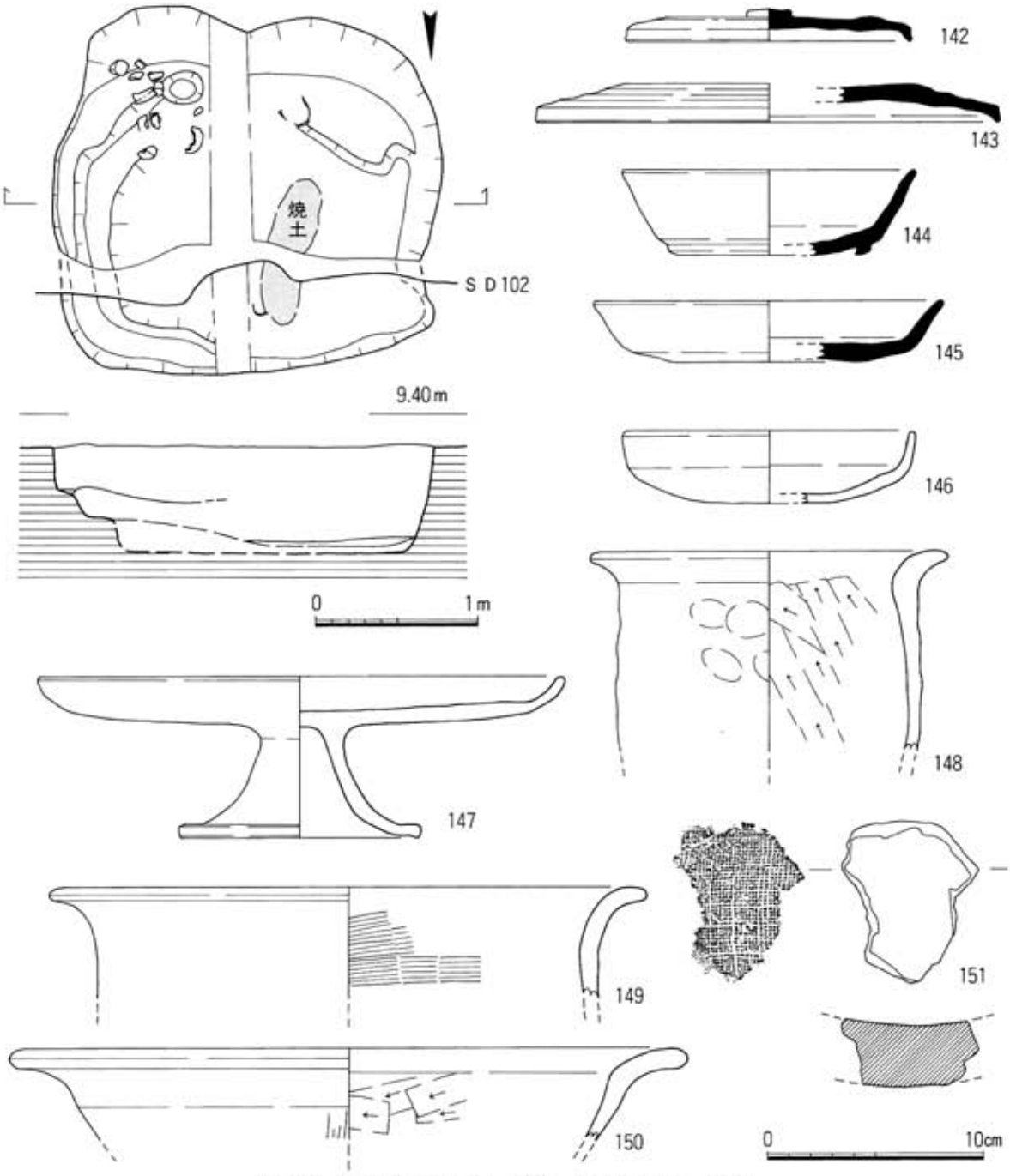


Fig. 20　ＳＫ132土坑（１／40），出土遺物（１／３）

ある。出土遺物に回転糸切り離しの土師器小皿や青磁，白磁があるが，大部分は奈良時代の須恵器，土師器であり，中世の遺物は小穴などからの混入と判断して，古代の遺構として報告することにした。

152は須恵器壺で，復元口径12.6cmである。**153**は須恵器坏で，復元口径12.7cm，器高4.4cm，底部外面はヘラ切り後ナデである。

154は土師器坏で，復元口径12.4cm，器高3.5cm，底部外面は回転ヘラケズリである。**155・156**は土師器甕で，**155**は復元口径26.8cm，**156**は復元口径28.0cmである。

ＳＫ158土坑（Fig. 22）

調査区ほぼ中央に位置する。中世の掘立柱建物が集中する部分に当たり，柱穴との切合が著しく，正確な

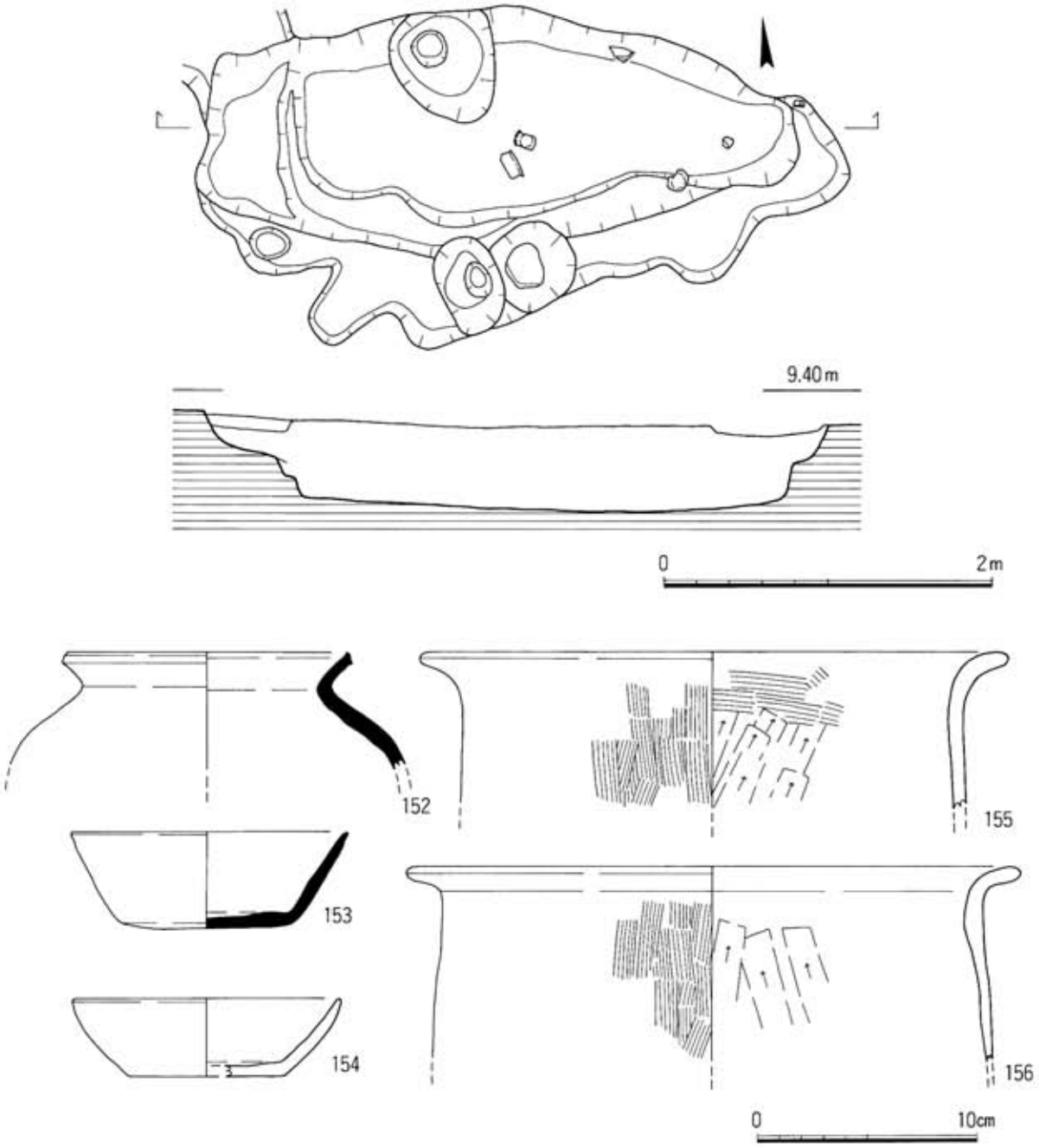


Fig. 21　ＳＫ156土坑（１／40），出土遺物（１／３）

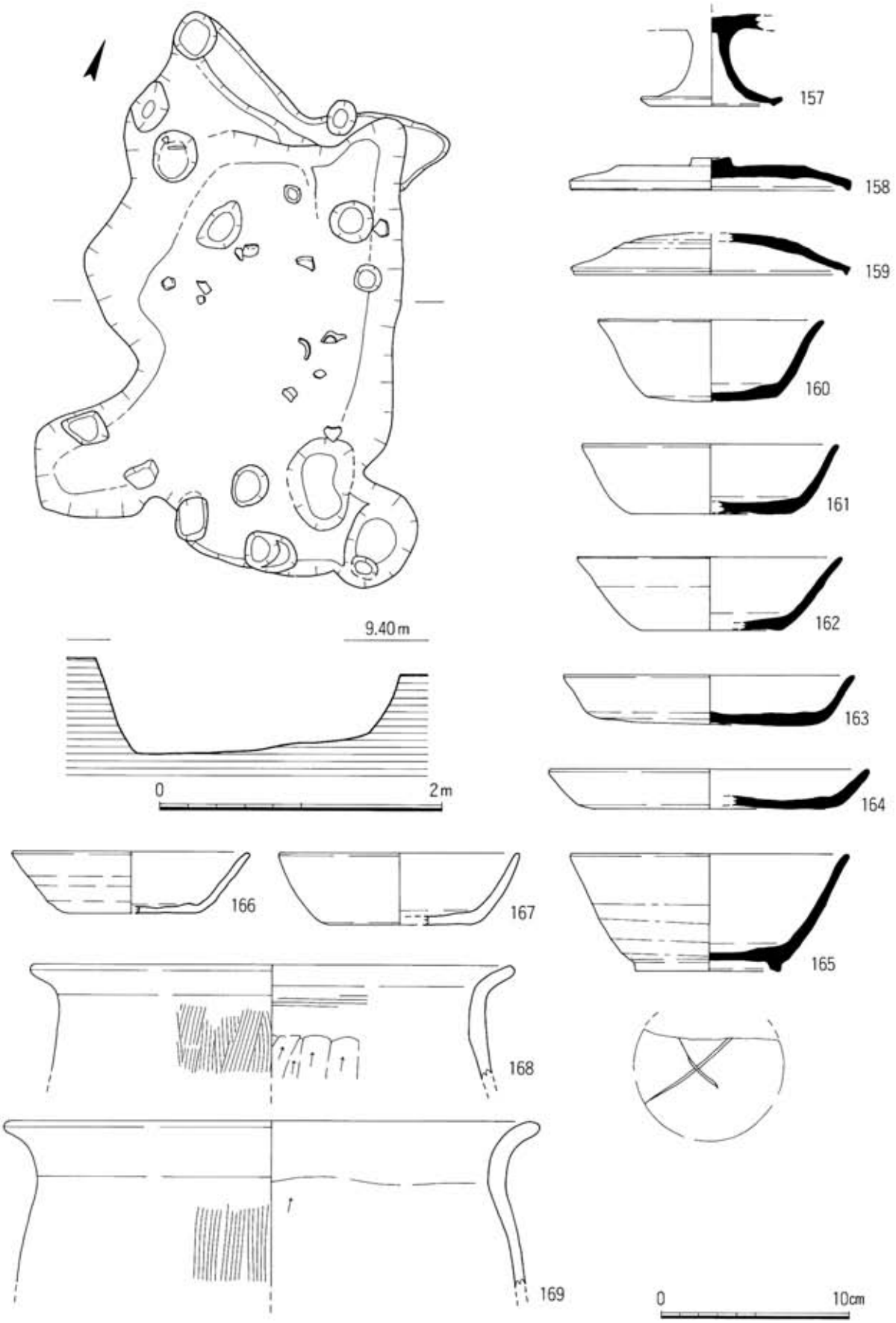


Fig. 22　ＳＫ158土坑（１／40），出土遺物（１／３）

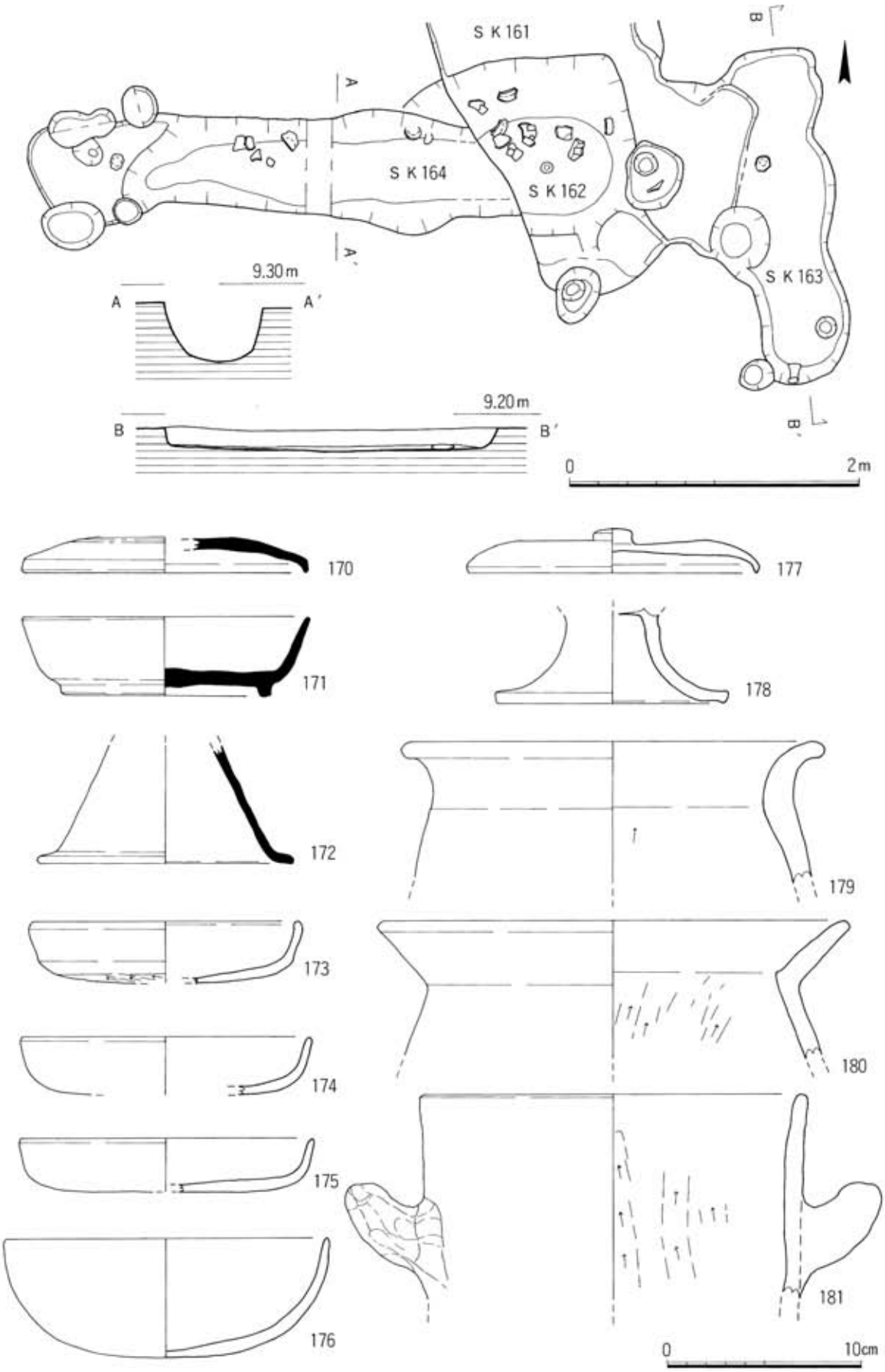


Fig. 23　S K162・163・164土坑（1／40），S K162土坑出土遺物（1／3）

平面形は判断するのが難しいが，不整形な方形になると思われる。1.7m×2.5mほどの規模になると推定され，深さは0.65mである。番号が重複している土坑があるが，取り上げた日付によって区別ができるようである。一方は中世までの遺物を含んでおり，日時に基づき遺物を分け，報告することにした。

157～**165**は須恵器である。**157**は高坏で，復元裾部径7.6cmである。**158**・**159**は蓋である。**158**は扁平なつまみがつき，復元口径14.9cm，器高1.7cmである。天井部はヘラ切り後ナデである。**159**は復元口径14.5cmで，天井部は回転ヘラケズリである。**160**～**162**は坏で，**160**は復元口径12.0cm，器高4.3cmである。体部下半部から底部外面は摩耗のため調整不明である。**161**は復元口径13.6cm，器高3.7cmで，底部外面はヘラ切り後未調整である。**162**は復元口径14.1cm，器高3.8cmで，体部下半部は回転ヘラケズリか。**163**・**164**は皿である。**163**は復元口径15.5cm，器高2.7cmで，底部外面はヘラ切り後ナデである。**164**は復元口径17.0cm，器高2.1cmで，底部外面はナデである。**165**は椀で，復元口径14.8cm，器高6.3cmである。体部下半部から底部外面周縁部にかけては回転ヘラケズリである。底部外面にヘラ記号がみられる。

166～**169**は土師器である。**166**・**167**は坏で，**166**は復元口径12.5cm，器高3.3cm，**167**は復元口径12.7cm，器高3.8cmである。ともに底部外面はヘラ切り離しである。**168**・**169**は甕で，**168**は復元口径25.5cm，**169**は復元口径28.3cmである。

ＳＫ162土坑（Fig. 23）

調査区ほぼ中央に位置する。平面実測図ではやや分かりづらいが，写真などからするとＳＫ164土坑より古いものと判断される。中世のＳＫ161土坑と重複する。平面は長方形になるものと推定され，短軸1.2m，深さ0.5mである。底面はややすり鉢状になるようである。

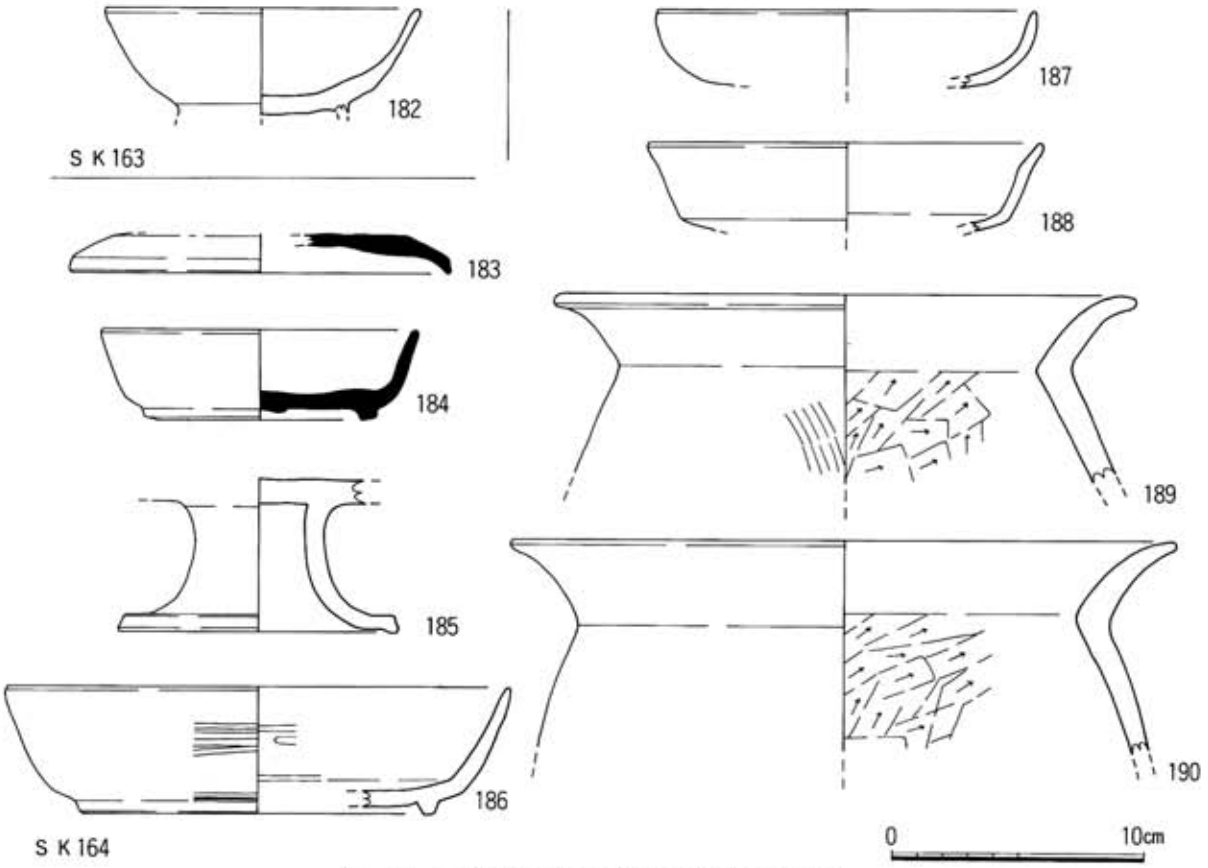


Fig. 24　ＳＫ163・164土坑出土遺物（１／３）

170～172は須恵器である。**170**は蓋で，復元口径14.9cmである。天井部は回転ヘラケズリである。**171**は高台付坏で，口径14.9cm，器高4.1cmである。底部外面はヘラ切り後粗いナデを施す。**172**は高坏で，復元裾部径13.3cmである。

173～181は土師器である。**173～176**は坏である。**173**は復元口径13.7cmで，底部外面は手持ちヘラケズリである。**174**は復元口径15.2cm，**175**は復元口径15.2cm，**176**は復元口径17.0cm，器高6.1cmである。いずれも底部外面は摩耗のため調整不明であるが，手持ちヘラケズリであると思われる。**177**は蓋で，口径14.9cm，器高2.3cmである。摩耗のため天井部などの調整は不明である。**178**は高坏で，復元裾部径11.8cmである。**179・180**は甕で，**179**は復元口径21.7cm，**180**は復元口径24.3cmである。**181**は甑で，復元口径20.0cmである。

ＳＫ163土坑（Fig. 23・24）

調査区ほぼ中央に位置する。深さ0.15mほどの浅い土坑のためか，切合などで正確な平面は不明である。0.6m×2.3mの細長い長方形になるものと推定される。底面はほぼ平坦である。

182は土師器椀で，高台部を欠失する。復元口径12.3cmである。

ＳＫ164土坑（Fig. 23・24）

調査区ほぼ中央に位置する。ＳＫ162土坑より新しいものと推定される。約0.8m×2.55mの細長い平面形で，深さ0.4mである。底面はややすり鉢状になるようである。

183は須恵器蓋で，復元口径15.0cmである。天井部は周辺部が回転ヘラケズリであるが，中央部にはヘラ切り後未調整の部分

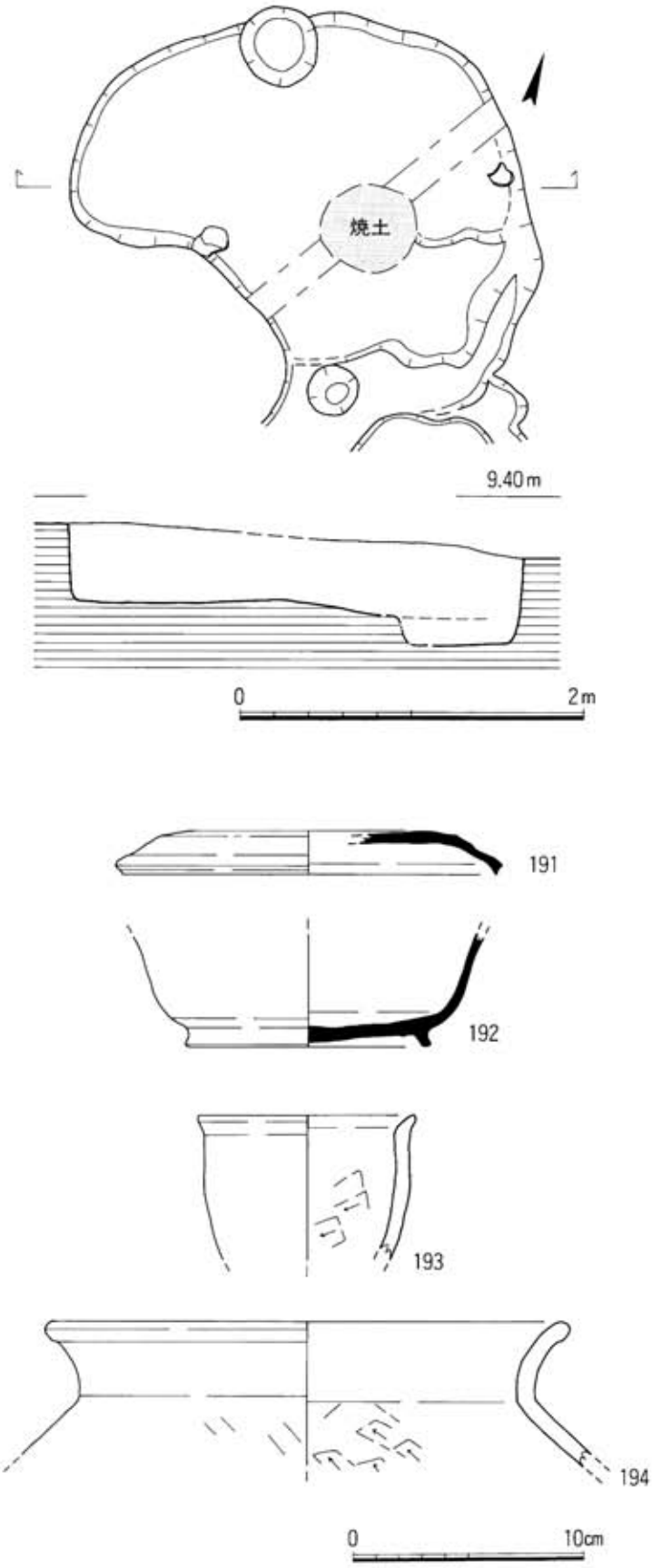


Fig. 25　ＳＫ199土坑（1／40），出土遺物（1／3）

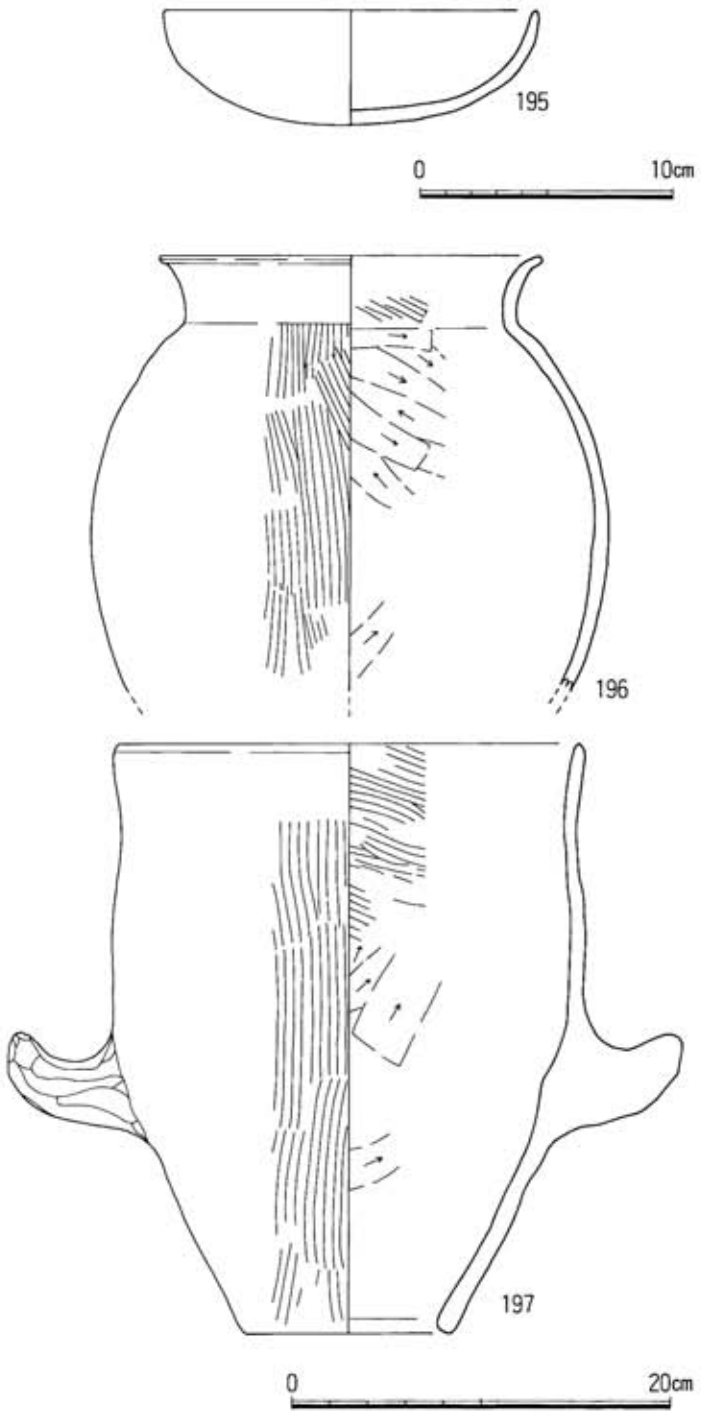


Fig. 26　検出面出土遺物（195：１／３，他：１／４）

が残る。**184**は須恵器高台付坏で，復元口径12.5cm，器高3.6cmである。底部外面はヘラ切り後未調整である。

185は土師器高坏で，復元裾部径11.0cmである。坏部内面はミガキである。**186**は土師器高台付坏で，復元口径19.8cm，器高5.0cmである。底部はナデで，体部内外面は回転ヘラミガキである。**187**・**188**は土師器坏で，**187**は復元口径15.0cm，**188**は復元口径15.6cmである。ともに底部外面は手持ちヘラケズリである。**189**・**190**は土師器甕で，**189**は復元口径23.0cm，**190**は復元口径26.3cmである。

ＳＫ199土坑（Fig. 25）

調査区南側ほぼ中央に位置する。平面は円形を基調とする不整形であり，二つの土坑の切合の可能性もある。長軸2.4ｍ，短軸1.9ｍ，深さは一段深くなっている部分で0.6ｍである。検出面からやや下がった地点で焼土が確認されている。底面は一部深く掘り込まれているようである。

191は須恵器蓋で，復元口径16.1cmである。天井部は回転ヘラケズリである。**192**は須恵器高台付坏で，底部外面周辺部は回転ヘラケズリであるが，中央部はヘラ切り後未調整の部分が残る。**193**は土師器小型甕で，復元口径9.5cmである。**194**は土師器甕で，復元口径22.9cmである。

（２）その他の遺物（Fig. 26）

検出面から出土したものを取り上げる。**195**は土師器坏で，口径14.8cm，器高4.6cmである。全体に摩耗が激しく調整は不明である。**196**は土師器甕で，復元口径19.7cmである。**197**は土師器甑で，復元口径24.9cm，器高31.1cmである。これらの土器はほぼ同一地点から出土しており，残存状況もよいことから，竪穴住居に伴うものの可能性がある。

4．中世の遺構と遺物

（1）区画溝

調査区のほぼ全域で溝が確認されており，その大部分は平面方形の区画を構成する溝と推定される。しかし，掘り直しや切合関係などが複雑なため，区画の状況を正確に捉えることは難しい。また，残存状況は調査区南半部で著しい削平を受けており，規模や形状などを判断することも困難である。

その中で比較的明瞭なものは，ＳＤ104・105・107溝で構成される区画であり，これを方形区画Ｉとする。調査区ほぼ中央に位置しており，北西コーナー部と北辺，西辺の一部が確認できる。ＳＤ104溝とＳＤ107溝の間は意識的に掘り残されており，陸橋の可能性がある。その他の部分は削平されており，ＳＤ105溝の南側の状況も平面実測図などでは不明確である。

また，ＳＤ102溝を基準とする区画があり，方形区画IIとする。ＳＤ102溝は土層図では判断しづらいが，南側にＳＤ102溝より古い溝（ＳＤ133・208・216溝）が確認されており，西端部の形状や切合関係などから判断すると，数回の掘り直しが推定される。ＳＤ102溝と区画を構成するものとして，ＳＤ155･166溝がある。これらの関係については平板図や上空からの写真（PL. 2）などで判断すると，ＳＤ155･166溝が同時期に，あるいは時期差をもって区画として存在した時期（方形区画II－１）と，ＳＤ155・166溝が埋没した後，ＳＤ102溝が東西方向の溝として存在した時期（方形区画II－２）が推定される。

方形区画II－１を構成するものとしては，ＳＤ102・155・166溝とＳＤ155溝に連続する可能性が強いＳＤ222溝がある。畑状遺構などとの切合で明確ではないが，ＳＤ155溝とＳＤ222溝の間は陸橋部の可能性がある。また，削平が著しく，規模や形状の詳細が不明であるが，調査区南端で確認されたＳＤ102溝とほぼ平行のＳＤ211溝も区画を構成する溝の可能性がある。

方形区画II－２については，ＳＤ102溝とＳＤ211溝が考えられ，調査区西側に拡張した部分の西端で確認された溝状の落ち込み（ＳＤ182）が溝であるとすると，調査区外により大きな区画溝が存在していた可能性がある。この内部には，他の溝に比べ，幅が狭いという特徴があるＳＤ152・153・194溝があり，区画内をさらに区画する溝と考えられる。ＳＤ152溝とＳＤ194溝は一連の溝である可能性が高く，方形区画II－２に伴うものと推定される。ＳＤ153溝の西側にも未掘であるが，一連の溝の可能性がある遺構が確認されているようであり，西側拡張区で南北方向に確認されているＳＤ179溝に連続することも考えられる。

なお，方形区画の変遷については切合関係から方形区画II－１→方形区画II－２→方形区画Ｉの順が考えられる。

方形区画Ｉ

ＳＤ104溝（Fig. 27～29）

調査区中央部北側に位置しており，ＳＸ106より古い。東西方向の溝で，直線的であるが，西側でやや南へ屈曲し，ＳＤ105溝に連続するものと考えられる。東端は明瞭な立ち上がりをもって終結しており，ＳＤ107溝との間は陸橋である可能性が高い。確認できる長さは約13.5ｍ，幅0.6～1.0ｍ，深さ約0.2ｍで，断面形はＵ字形である。底面のレベルはほぼ平坦である。北側に１段階古いと考えられるＳＤ103溝が確認されているが，未掘であり，詳細は不明である。

198は白磁皿で，復元口径8.0cm，器高1.9cmである。高台に４ヶ所の抉りを入れているものと推定され，内

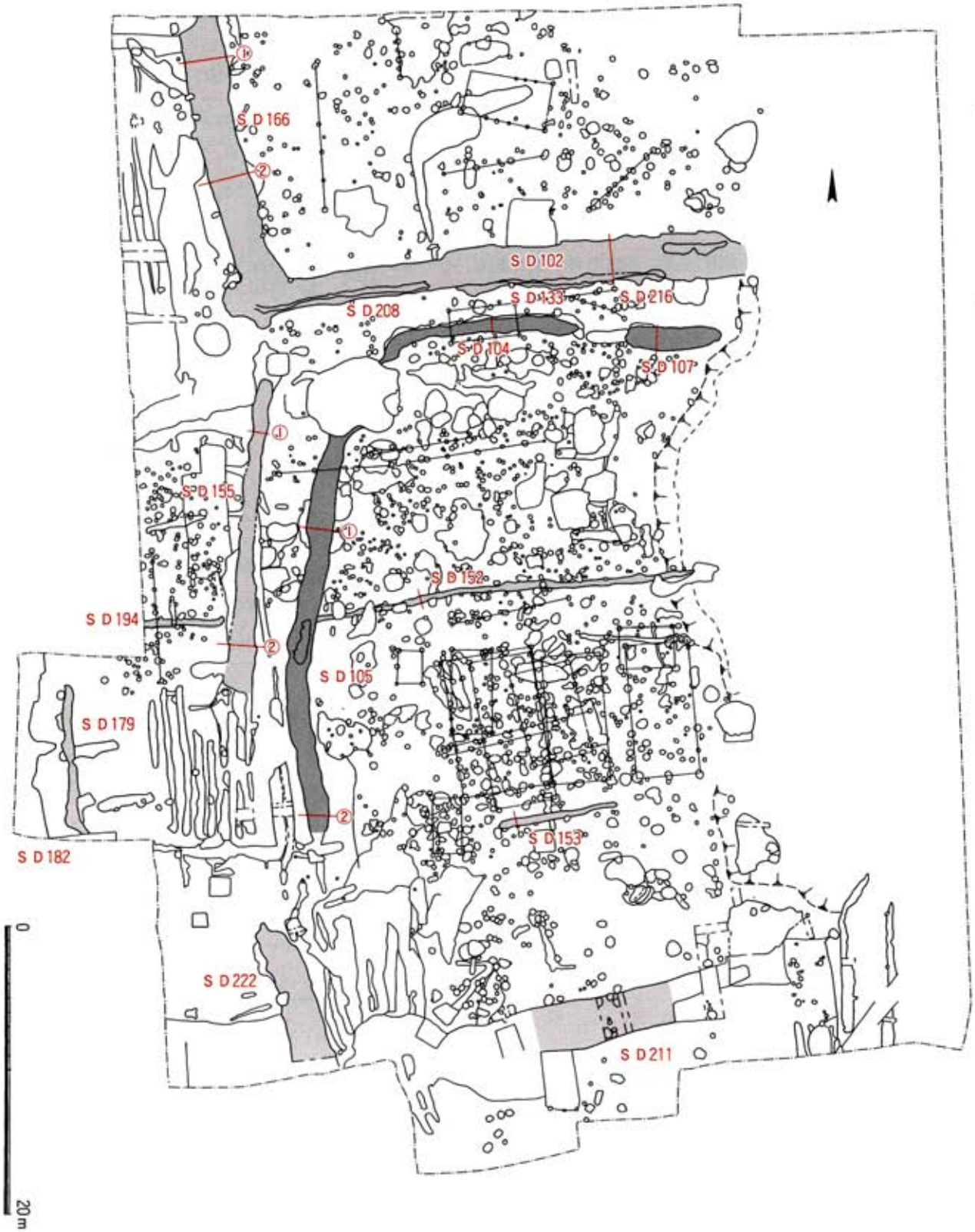


Fig. 27　区画溝（1／400）

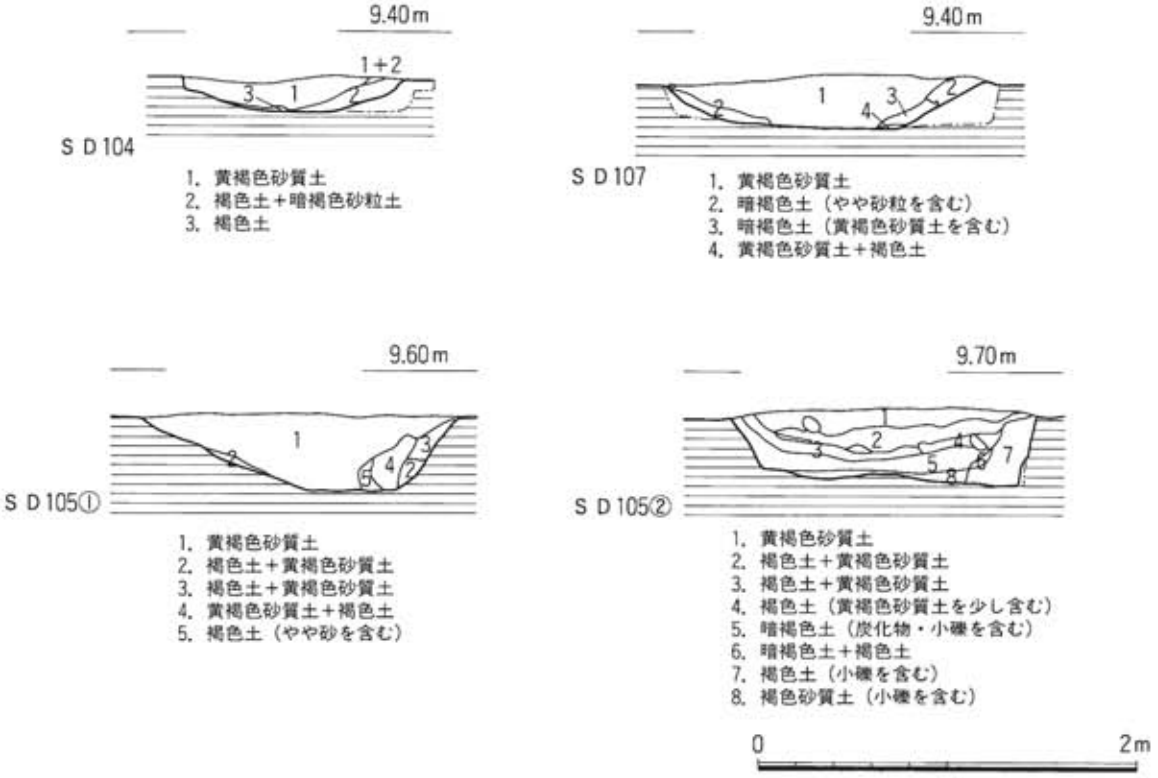


Fig. 28　ＳＤ104・105・107溝土層図（１／40）

面には目跡が残る。外面は露胎のようである。**199**は瓦器火鉢，**200**・**201**は土師器鍋Ⅲａ類である。図示したものの他に内面に段をもつ回転糸切り離しの土師器小皿，瓦質焼成の回転糸切り離しの小皿，滑石製石鍋などが出土している。

ＳＤ105溝（Fig. 27～30）

調査区東側ほぼ中央に位置しており，ＳＤ152溝より新しく，ＳＸ106より古い。南北方向の溝で，やや西側に湾曲している。南側については平面図では不明瞭である。確認できる長さは約28ｍ，幅1.2～1.8ｍ，深さ0.3～0.5ｍで，断面形は逆台形からＵ字形である。底面のレベルは南が低い傾向がある。

204は平面が八角形になると推定される土師器小皿で，口径7.8cm，器高2.1cmである。回転糸切り離しで，焼成は瓦質である。**205**～**212**は回転糸切り離しの土師器小皿で，**205**は口径7.5cm，器高2.0cm，**206**は復元口径8.9cm，器高1.9cm，**207**は復元口径9.0cm，器高2.0cm，**208**は復元口径7.0cm，器高1.3cm，**209**は復元口径7.4cm，器高1.6cm，**210**は復元口径7.3cm，器高2.0cm，**211**は復元口径8.0cm，器高2.2cm，**212**は復元口径8.8cm，器高1.7cmである。**209**・**212**は口縁部の一部に煤が付着している。**213**は回転糸切り離しの土師器坏で，復元口径12.0cm，器高2.3cmである。**214**～**216**は内面に段をもつ回転糸切り離しの土師器坏で，**214**は復元口径13.1cm，**215**は底径4.2cm，**216**は復元底径4.4cmである。**217**・**218**は土師器鍋Ⅲａ類である。**219**～**225**は瓦器火鉢で，**219**～**221**・**223**は平面円形のものである。**219**は復元口径19.6cmで，焼成は土師質に近い。**221**は土師質の焼成であるが，器面は燻されている。**222**・**225**は平面方形のもので，同一個体の可能性がある。**222**は外面にミガキが施される。**226**は備前焼大甕である。**227**は備前焼擂鉢と思われるが，擂目は確認できない。**228**は備前焼擂鉢で，使用による摩滅のため擂目がほとんど消失している。**229**は龍泉窯系青磁皿で，復元口径12.2cm，器高3.2cmである。高台部畳付からその内部にかけて露胎である。**230**は白磁水注と推定される。**231**・**232**は

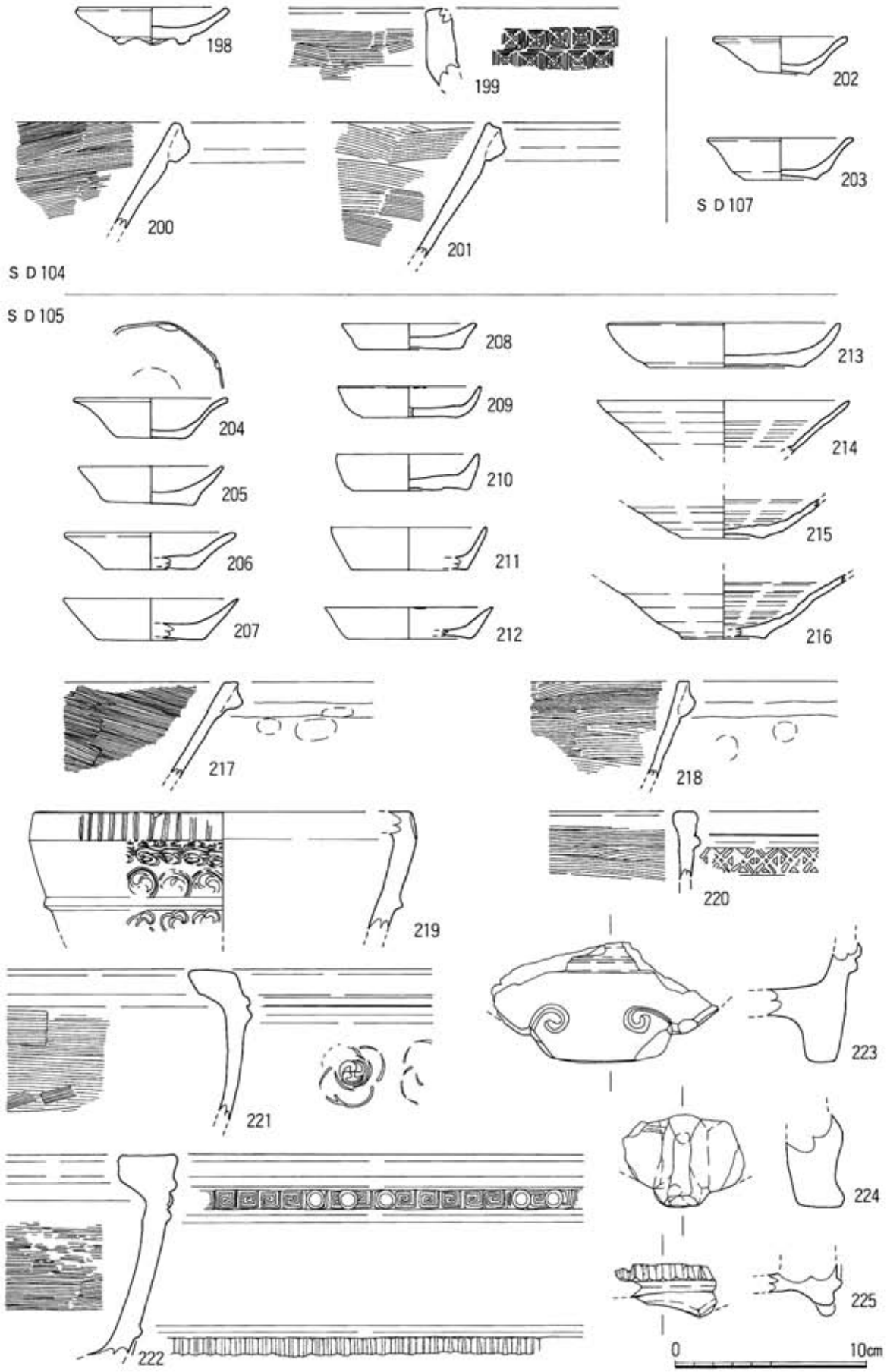


Fig. 29　ＳＤ104・107溝出土遺物，ＳＤ105溝出土遺物①（１／３）

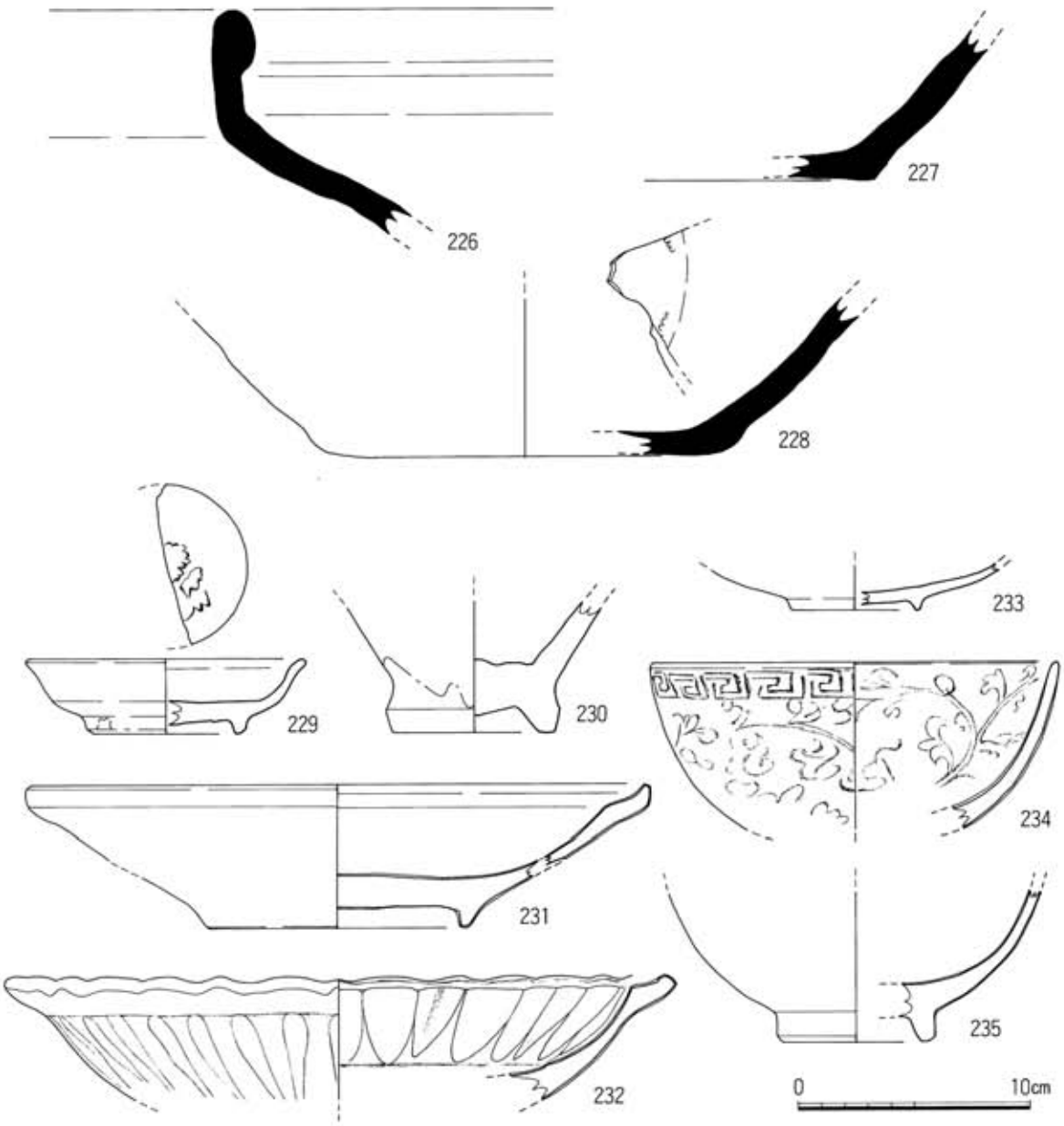


Fig. 30　ＳＤ105溝出土遺物②（１／３）

龍泉窯系青磁盤である。**231**は無文のタイプで，同一個体と考えられる数個体分を図上で復元した。復元口径27.1cm，復元器高6.2cmで，高台内部の釉を輪状に掻き取る。**232**は内外面に蓮弁文が施されるタイプで，復元口径29.2cmである。**233**は青白磁皿で，高台部畳付からその内部にかけて一部露胎である。**234**・**235**は龍泉窯系青磁椀で，**234**は復元口径17.6cmである。**235**は高台部にも施釉されている。

ＳＤ107溝（Fig. 27～29）

調査区中央部北東寄りに位置しており，ＳＫ134土坑より新しい。西端は明瞭な立ち上がりがあり，東端もレベルからみると終結するようである。長さ6.6m，幅1.6m，深さ0.15～0.25m，断面形はほぼ逆台形で，底面のレベルはほぼ平坦である。遺構番号に混乱があり，遺物はＳＤ103として取り上げられている。

202・**203**は土師器小皿で，**202**は復元口径7.0cm，器高2.0cm，**203**は復元口径7.6cm，器高2.2cmである。図示したものの他に土師器鍋Ⅲａ類などが出土している。

方形区画II

ＳＤ102溝（Fig. 27・31・32）

調査区北側に位置している東西方向の溝である。直線的で，西側は終結しているが，西南部にＳＤ155溝に連続するような突出が確認される。ＳＤ102溝とＳＤ155溝が一連の区画溝を構成していた時期（方形区画II－1）には，陸橋部があった可能性が高い。ＳＤ166溝とは形状から一連の区画溝を構成する時期（方形区画II－1）があると推定されるが，平板図や写真から判断すると切合関係が認められ，ＳＤ166溝埋没後の掘り直しの結果と考えられる。東側は削平され，さらに東へのびていたものと推定される。確認できる長さは約36ｍ，幅2.0～3.2ｍ，深さ0.1～0.2ｍで，断面形はＵ字形である。底面のレベルはほぼ平坦である。土層図では明確ではないが，南側に１段階古い溝と推定される一連の溝の痕跡（ＳＤ133･208･216溝）が確認されており，

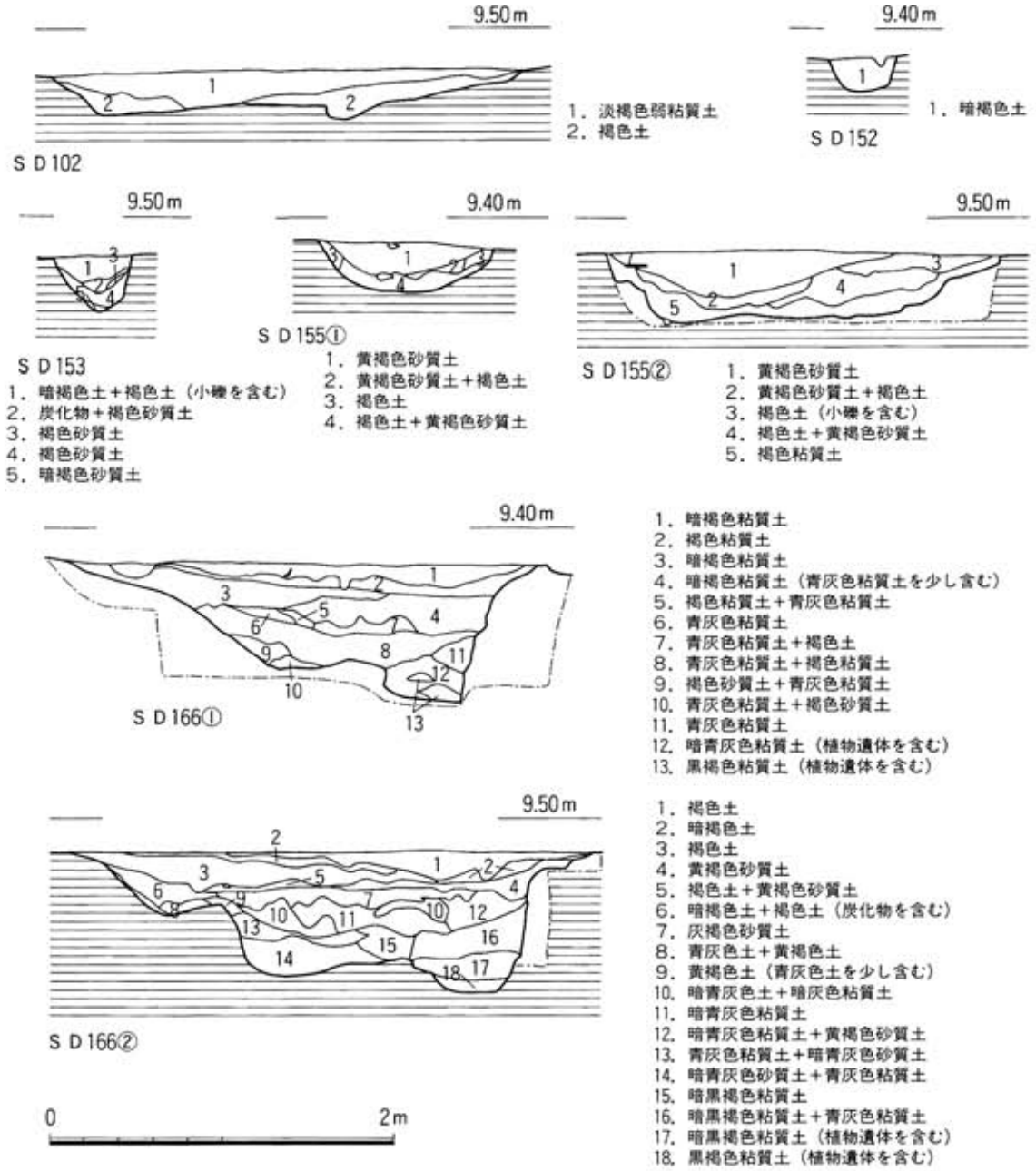


Fig. 31　ＳＤ102・152・153・155・166溝土層図（１／40）

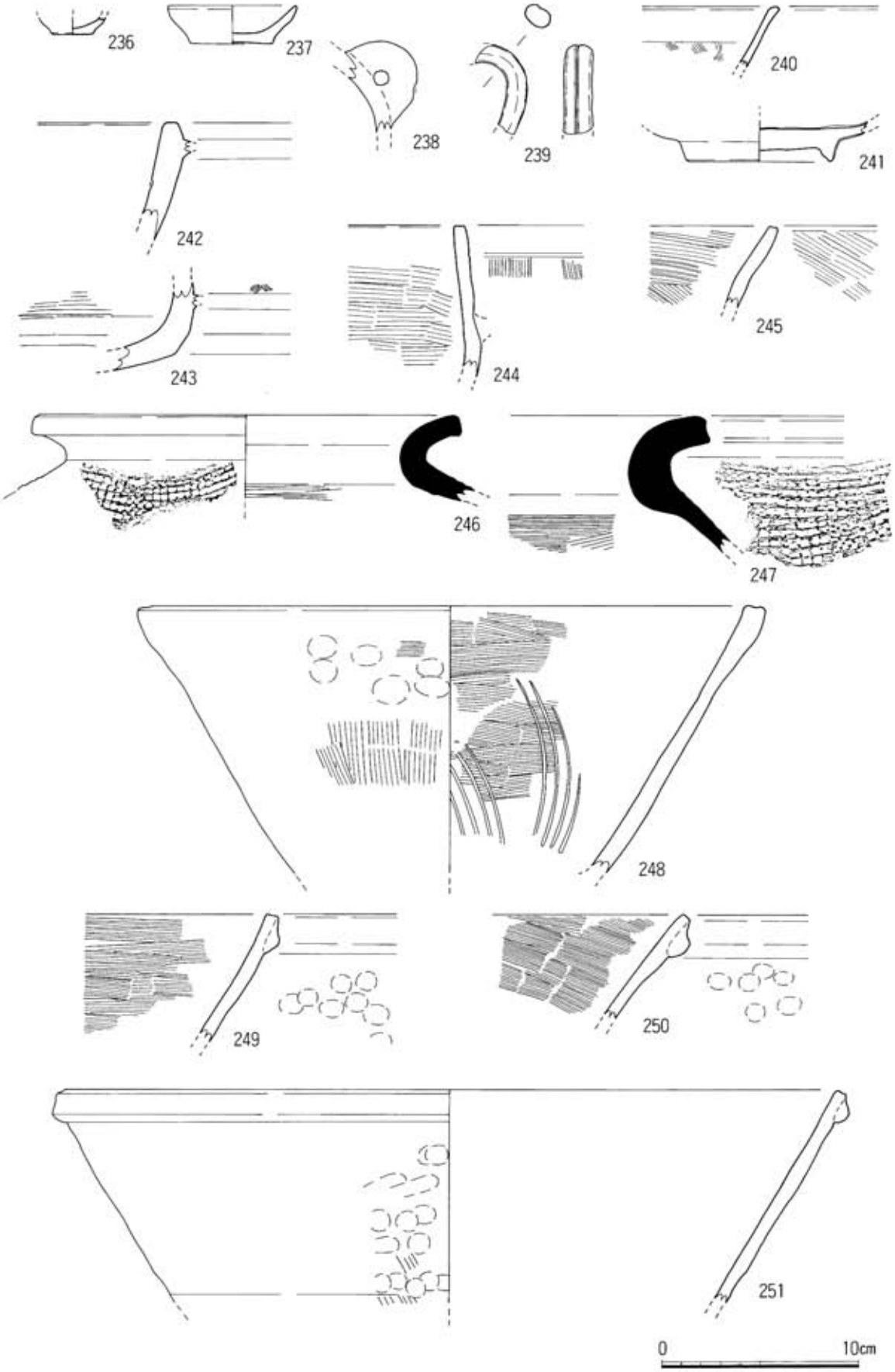


Fig. 32　ＳＤ102溝出土遺物（１／３）

数回の掘り直しが考えられる。

236は内面に段をもつ土師器小皿で，回転糸切り離しである。底径2.2cmで，内面に赤色顔料が付着している。**237**は回転糸切り離しの土師器小皿で，復元口径6.5cm，器高1.9cmである。**238**は茶釜の把手部で，土師質の焼成であるが，器面は燻されている。**239**は越州窯系青磁水注，**240**は白磁椀である。**241**は龍泉窯系青磁皿で，高台内部のみ露胎である。**242**は滑石製石鍋で，外面には煤が付着している。**243**は平面円形の瓦器火鉢である。**244**は瓦器羽釜で，鍔部が欠失している。**245**は瓦器の鉢か擂鉢である。**246・247**は須恵器壺で，**246**は復元口径22.0cmである。**248**は土師器擂鉢で，４本１単位の擂目が施される。**249～251**は土師器鍋Ⅲａ類で，**251**は復元口径40.2cmである。

ＳＤ152溝（Fig. 27・31・37）

調査区中央部に位置しており，ＳＤ105溝より古い。直線的な東西方向の溝で，西側はＳＤ105溝との切合により明確ではないが，その西側に連続していないことから重複している部分で終結しているものと考えられる。東側は削平され，さらに東にのびていたものと推定される。確認される長さは約26.4ｍ，幅0.4～0.6ｍ，深さ約0.2ｍで，断面形は逆台形である。底面のレベルは東が低い。

295は瓦器椀で，復元口径13.8cmである。器面が摩耗しているため調整は不明である。**296**は白磁椀Ⅳ－１類である。**297**は滑石製石鍋のミニチュアとすべきであろうか。復元口径7.6cm，器高4.0cmで，口縁部外面に長方形の突起がつくり出される。

ＳＤ153溝（Fig. 27・31・37）

調査区南側中央に位置している東西方向の溝である。西端，東端とも明瞭な立ち上がりをもって終結する。長さ8.4ｍ，幅0.3～0.5ｍ，深さ0.1～0.3ｍで，断面形はＵ字形である。底面のレベルはほぼ平坦である。

298は回転糸切り離しの土師器小皿で，復元口径7.4cm，器高2.3cmである。**299**は回転糸切り離しの土師器坏で，復元口径12.3cm，器高2.6cmである。ともに検出時の出土であり，ＳＤ153溝に伴うかどうかは明確ではない。

ＳＤ155溝（Fig. 27・31・33～36）

調査区東側中央に位置している南北方向の溝である。畑状遺構より古いと考えられる。直線的であるが，本来はＳＤ105溝と同様に西側に湾曲していた可能性がある。北端は明瞭な立ち上がりをもって終結しているが，南側は畑状遺構などとの重複で不明確である。ＳＤ222溝と一連のものとすると，陸橋部があった可能性がある。確認できる長さ約26ｍ，幅1.1～1.8ｍ，深さ0.3～0.5ｍで，断面形はＵ字形から逆台形である。底面のレベルは中央部がやや深い。ＳＤ102溝との関係は前述したとおりである。

252～260は回転糸切り離しの土師器小皿である。**252**は復元口径6.8cm，器高1.5cm，**253**は復元口径7.0cm，器高1.7cmで，口縁部の一部に煤が付着している。**254**は復元口径8.2cm，器高1.5cm，**255**は復元口径8.2cm，器高2.2cm，**256**は復元口径8.0cm，器高2.1cm，**257**は復元口径8.4cm，器高2.0cm，**258**は復元口径9.2cm，器高2.2cm，**259**は口径7.6cm，器高2.1cm，**260**は口径7.8cm，器高2.1cmである。**259**は底部外面に板状圧痕がみられる。**261**は平面八角形の土師器小皿で，最大口径7.7cm，器高2.3cmである。**262～267**は内面に段をもつ回転糸切り離しの土師器坏である。**262**は復元口径13.6cm，器高3.2cm，**263**は復元口径13.7cm，器高3.3cm，**264**は復元口径14.1cm，器高3.4cm，**265**は復元口径14.2cm，器高3.4cm，**266**は口径14.5cm，器高3.2cm，**267**は復元

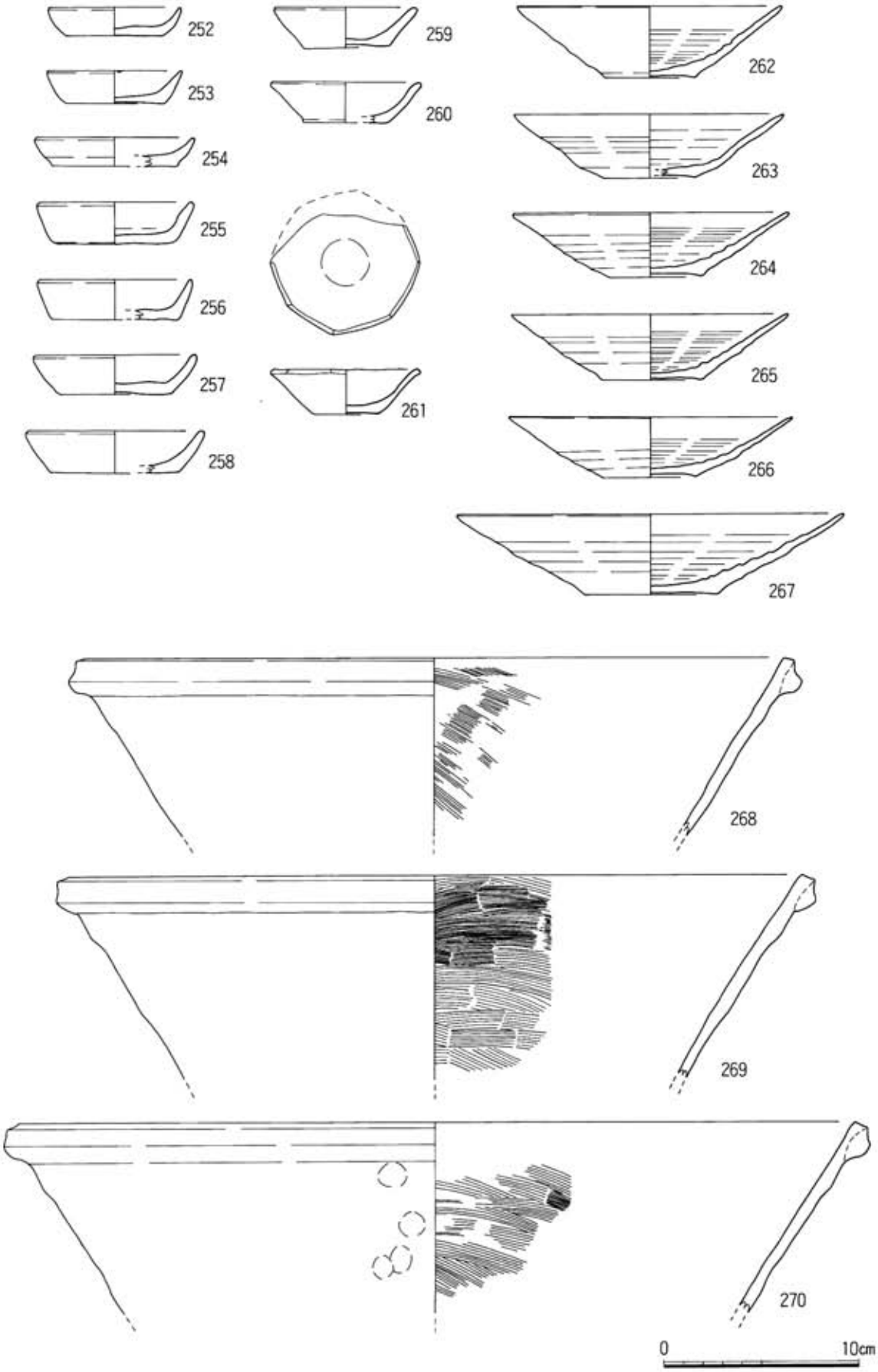


Fig. 33　ＳＤ155溝出土遺物①（１／３）

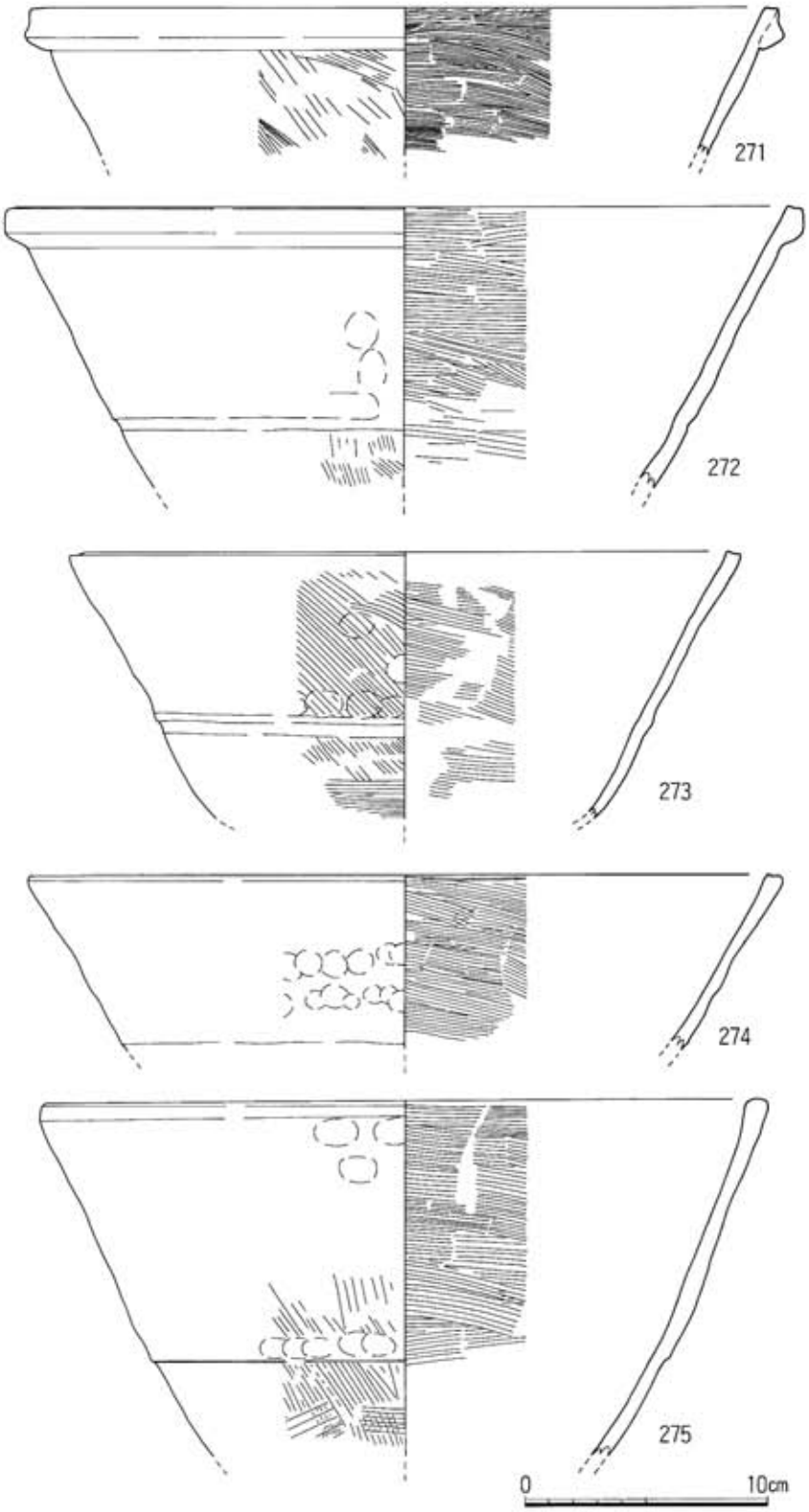


Fig. 34　ＳＤ155溝出土遺物②（１／３）

口径19.8cm，器高4.2cmである。**268**～**272**は土師器鍋Ⅲａ類で，**268**は復元口径37.0cm，**269**は復元口径38.0cm，**370**は復元口径44.4cm，**271**は復元口径30.9cm，**272**は復元口径32.6cmである。**273**～**276**は土師器鍋Ⅲｂ類で，**273**は口径27.7cm，**274**は復元口径31.2cm，**275**は口径30.0cm，**276**は口径28.6cmで，器高約12cmに復元される。**277**～**281**は瓦器茶釜である。**277**は復元口径15.8cmで，穿孔がわずかに確認される。**278**は口径16.9cmである。把手の上部両側に穿孔があるが，反対側には穿孔がなく，把手は欠失しており，本来あったかどうかは不明である。印刻文は巴文で，横に２個並置したセットが把手両側とその対になる位置に，逆三角形に３個並べたセットがその中間に２ヶ所みられる。**279**は復元口径15.3cmで，菱形文が印刻される。鍔部下半部に煤が付着している。**280**・**281**は胎土が土師器に近い焼成で，鍔部から上部が煙されている。**281**は鍔部以下に煤が付着している。**282**は平面八角形の白磁坏で，復元口径7.6cm，器高2.8cmである。高台に４ヶ所の抉りを入れており，その内部に墨書がみられるが，判読はできて

いない。**283**は龍泉窯系青磁皿で，復元口径14.6cmである。**284**～**286**は龍泉窯系青磁椀で，**284**は復元口径16.1cmである。**285**は高台部にも施釉され，高台内面には窯道具の一部が付着している。**286**も高台部に施釉され，その内部は釉が掻き取られている。**287**～**289**は龍泉窯系青磁盤で，**287**・**288**は無文のタイプ，**289**は内外面に蓮弁文が施されるタイプである。いずれも高台内部の釉を輪状に掻き取っている。**290**は越州窯系青磁椀で，復元口径17.0cm，器高6.8cmである。全面に施釉され，高台部畳付と見込みの部分に目跡がみられる。全体の２／３が残存しており，伝世品と思われる。**292**・**293**は瓦器擂鉢である。**294**は土師器擂鉢で，４本１単位の擂目を施す。**291**は軒丸瓦で，外縁幅1.5～1.9cm，外縁高1.4cmである。

ＳＤ166溝（Fig. 27・31・37）

調査区北西隅に位置する南北方向の溝である。直線的で，北側は調査区外にのびる。確認できる長さは約18.5m，幅2.4～3.0m，深さ0.4～0.65mである。土層図からは断面形がわかりづらいが，逆台形のようである。底面のレベルは北側が低い傾向がある。ＳＤ102溝との関係は前述したとおりである。

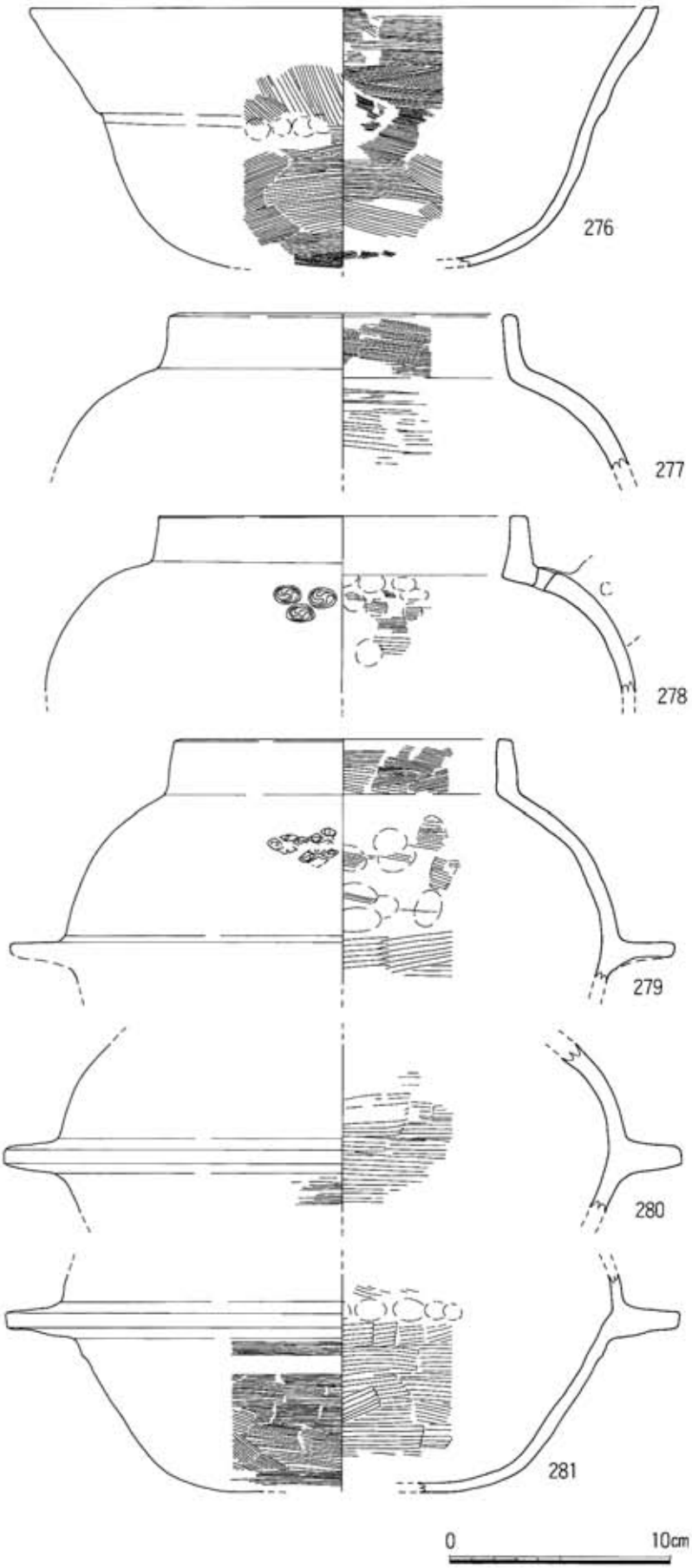


Fig. 35　ＳＤ155溝出土遺物③（１／３）

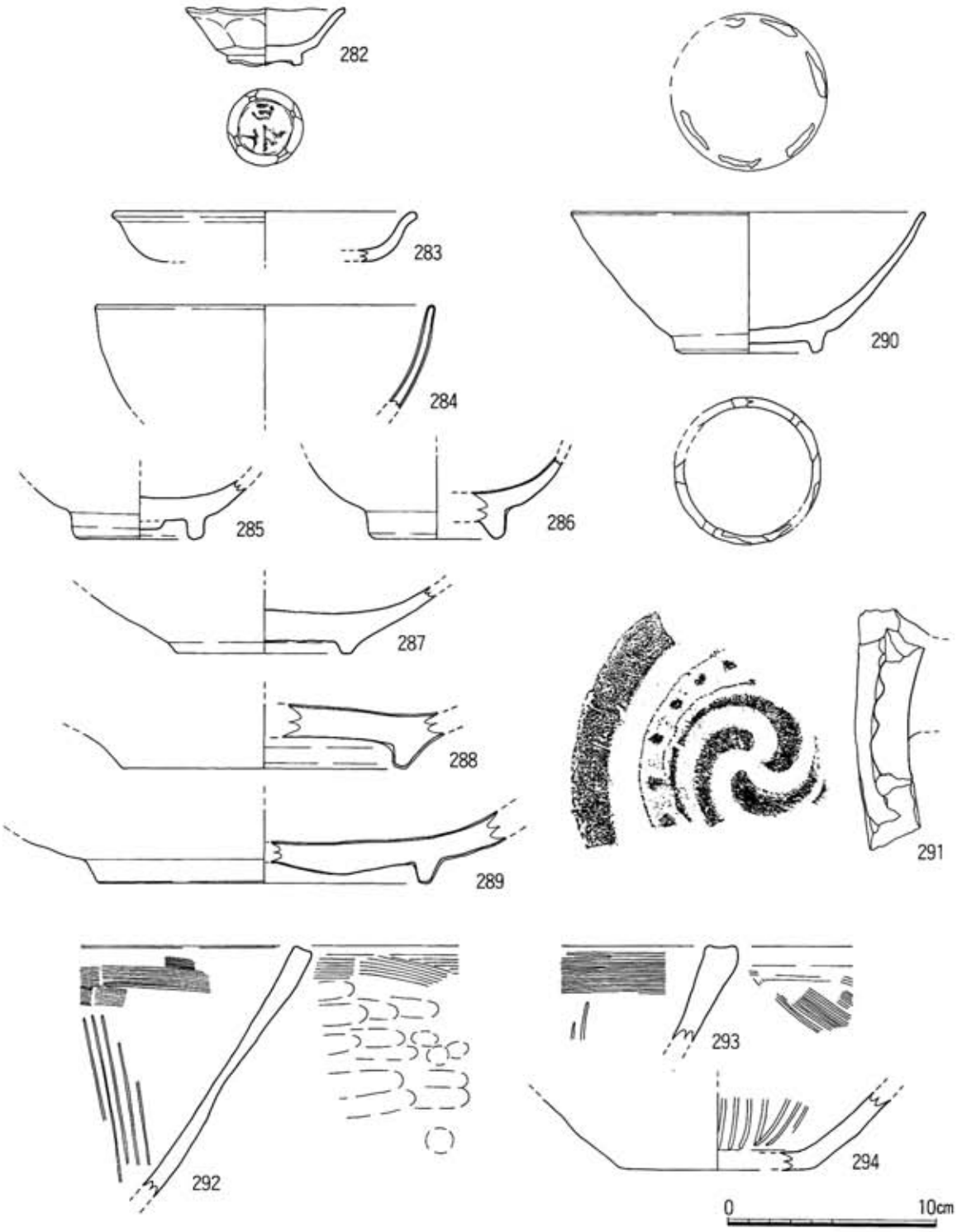


Fig. 36　ＳＤ155溝出土遺物④（１／３）

307は瓦器擂鉢で，焼成は土師器に近い。**308**は土師器鍋Ⅲａ類である。**309**は回転糸切り離しの土師器小皿で，復元口径6.7cm，器高1.5cmである。**310**は回転糸切り離しの土師器小皿か坏である。**309**・**310**はともに瓦器に近い焼成である。**311**は白磁で小椀とすべきか。復元口径9.0cmで，外面下半部は露胎である。**312**は龍泉窯系青磁椀で，高台内部の釉が粗雑に掻き取られており，目跡が残る。**313**は龍泉窯系青磁盤で，無文のタイプである。高台部畳付とその内面の釉が輪状に掻き取られている。**314**は曲物である。図示したものの他に木製櫛が出土している。

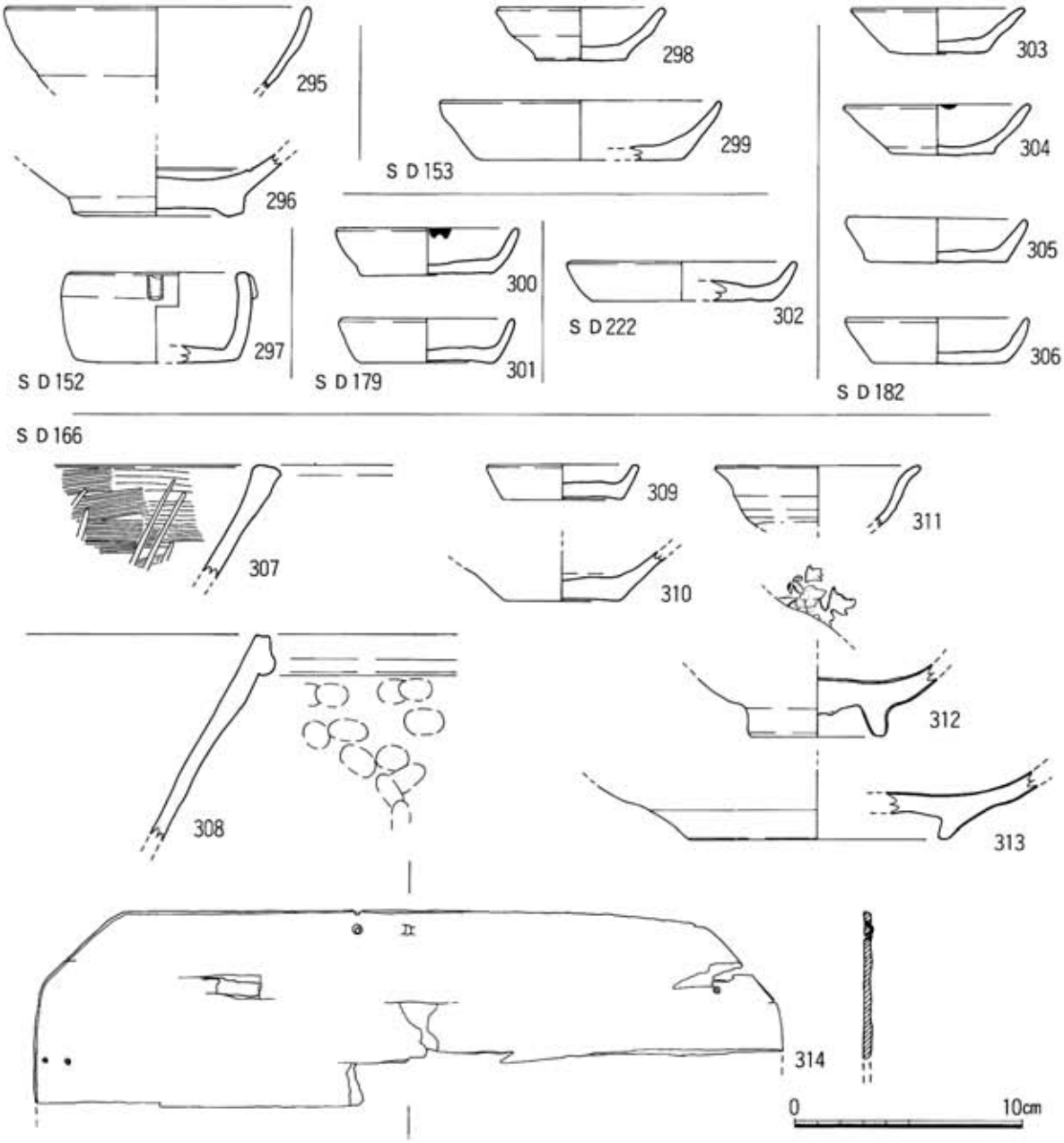


Fig. 37　S D152・153・166・179・182・222溝出土遺物（1／3）

S D179溝（Fig. 27・37）

調査区西側拡張区に位置しており，S K180・181土坑より新しい。南北方向の溝で，直線的であるが，南側は東に屈曲するようである。北端はレベルからみると，削平されている可能性がある。確認できる長さ約10.4m，幅約1.6m，深さ0.05～0.1mである。底面のレベルは南が低い傾向にある。

300・301は回転糸切り離しの土師器小皿である。**300**は口径7.8cm，器高2.1cmで，口縁部の一部に煤が付着している。**301**は口径7.7cm，器高2.0cmである。図示したものの他に土師器鍋Ⅲa類，龍泉窯系青磁皿が出土している。

S D182溝（Fig. 27・37）

調査区西側拡張区西端で確認された。一部が調査されただけであり，溝であったかどうかは不明確である。

確認できる長さ約12.6ｍ，深さ0.5～0.9ｍである。他の区画溝より深く，性格が異なる可能性がある。

303～**306**は回転糸切り離しの土師器小皿である。**303**は口径7.6cm，器高2.0cm，**304**は口径8.2cm，器高2.2cmで，ともに口縁部に煤が付着している。**305**は口径7.9cm，器高2.0cmで，**306**は口径８cm，器高２cmで図示しているが，ゆがみが大きい。いずれも「ＳＤ181」と注記があるが，ＳＫ181土坑は未掘であるため，ＳＤ182溝出土品と考えられる。

ＳＤ194溝（Fig. 27）

調査区西側中央に位置する東西方向の溝である。東側は明瞭な立ち上がりをもって終結しており，西側は調査区外にのびる。確認できる長さ約5.5ｍ，幅0.4～0.5ｍ，深さ0.2～0.4ｍである。底面のレベルは西が低い傾向にある。ＳＤ152溝と一連の区画溝になり，陸橋部があるものと推定される。

細片が多く図示していないが，土師器捏鉢，瓦器椀，玉縁白磁椀，滑石製石鍋などが出土している。

ＳＤ211溝（Fig. 27）

調査区南端に位置している東西方向の溝と推定される。ＳＤ102溝とほぼ平行であり，方形区画Ⅱに関連する可能性がある。しかし，約7.4ｍの長さで，幅３ｍほどの溝状の遺構が確認できるだけで，削平が著しく，土層図もないため詳細は不明である。出土遺物には土師器小皿の小片が１点あるのみである。

ＳＤ222溝（Fig. 27・37）

調査区南西隅に位置する南北方向の溝である。南側は調査区外にのびており，北端の状況は未掘のため明確ではないが，終結する可能性がある。確認できる長さ約11.4ｍ，幅2.4～3.0ｍ，深さ約0.2ｍである。

302は回転糸切り離しの土師器坏で，復元口径10.0cm，器高1.7cmである。図示したものの他に土師器鍋Ⅲａ類が出土している。

（２）掘立柱建物・柵列

掘立柱建物と柵列については，現地で確実に確認されたものは数基で，ほとんどが報告書作成段階で平面図をもとに判断したものである。この他にも多数の柱穴と考えられる小穴が検出されており，本来はより多くの建物などが存在していた可能性が高い。

掘立柱建物はそのほとんどが調査区中央，ＳＤ152溝とＳＤ153溝の間に位置しており，それ以外では北部に２棟確認されるだけである。柱穴もこの部分に多数確認されており（Fig. 43），確認した掘立柱建物以外にも建物などの施設があった可能性が高く，この区域を区画溝内の主要な居住空間としてとらえることができよう。柵列はほとんどが南北か東西方向のものであり，区画溝や掘立柱建物に関連するものと考えられる。

報告に当たって，掘立柱建物はなるべく長方形になるように復元しているが，ゆがんだ建物もかなり存在したものと思われる。また，本来は区画ごとに記述していくべきであるが，どの建物が区画のどの段階に属しているのか把握できなかったため，北側から順次各遺構の説明を加えていくことにする。なお，ＳＢ172掘立柱建物以降の掘立柱建物・柵列についてはそれぞれを構成すると判断した柱穴のみを図示しており，検討を可能にするためFig. 43を掲載した。

ＳＢ225掘立柱建物（Fig. 38）

調査区北側中央に位置する。南辺と東辺では確実に柱穴列があるが，北辺西側は現地で柱穴が確認されていない。柵列の可能性もあるが，一応掘立柱建物として報告することにした。梁行２間（3.38ｍ），桁行４間（6.0ｍ）の東西棟の建物で，主軸はＮ78°Ｗである。梁行柱間は1.62～1.75ｍ，桁行柱間は1.24～1.8ｍで，やや不規則である。柱掘形は径0.2～0.4ｍのほぼ円形である。ＳＫ100土坑より新しい。細片のため図示しなかったが，土師器鍋Ⅲａ類，瓦器椀などが出土している。

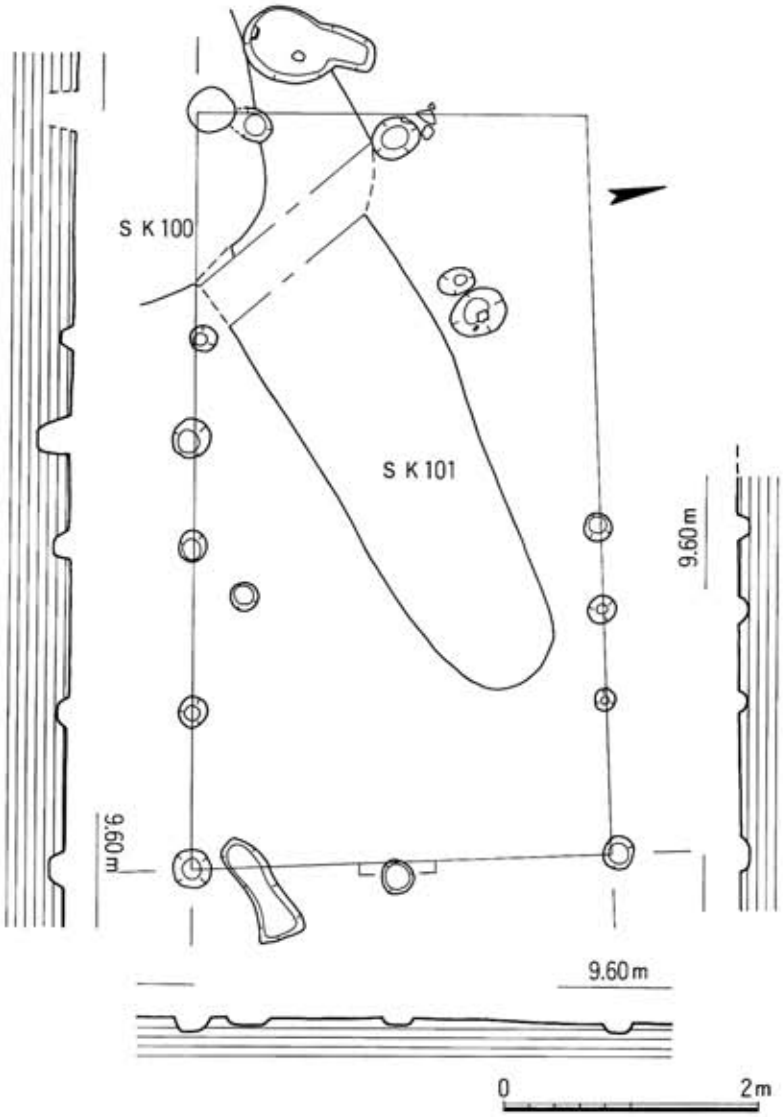


Fig. 38　ＳＢ225掘立柱建物（１／60）

ＳＡ171柵列（Fig. 39）

調査区北西部に位置する。現地では掘立柱建物の可能性があるとしていたが(PL. 6)，平面図を見る限り東辺の柱穴列があまり明確ではないため，柵列として報告することにした。５間の柵列で，柱間はほぼ2.0ｍであるが，一番北側が2.2ｍとやや広い。南北方向で，主軸はＮ４°Ｗである。柱掘形は0.2～0.5ｍのほぼ円形から楕円形を基調とする。

ＳＡ226柵列（Fig. 40）

調査区北側中央に位置する。南側の柱穴をこの柱列に対応するものとみて，掘立柱建物とすることも可能なようだが，ここでは柵列として報告することにした。４間の柵列で，柱間は2.35～2.44ｍである。東西方向で，主軸はＮ80°Ｅである。柱掘形は0.2～0.4ｍのほぼ円形である。ＳＫ109土坑より新しい。

ＳＡ224柵列（Fig. 41）

調査区北端中央に位置する。５間の柵列で，柱間は0.6～0.8ｍとかなり狭い。南北方向で，主軸はＮ５°Ｗである。柱掘形は0.2～0.6ｍのほぼ円形である。瓦器椀片などが出土している。

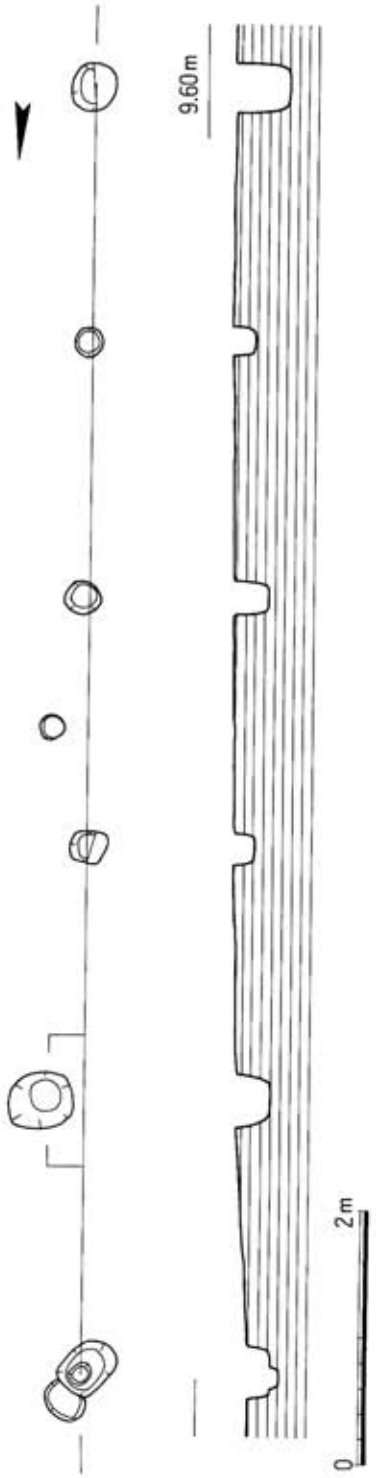


Fig. 39　ＳＡ171柵列（１／60）

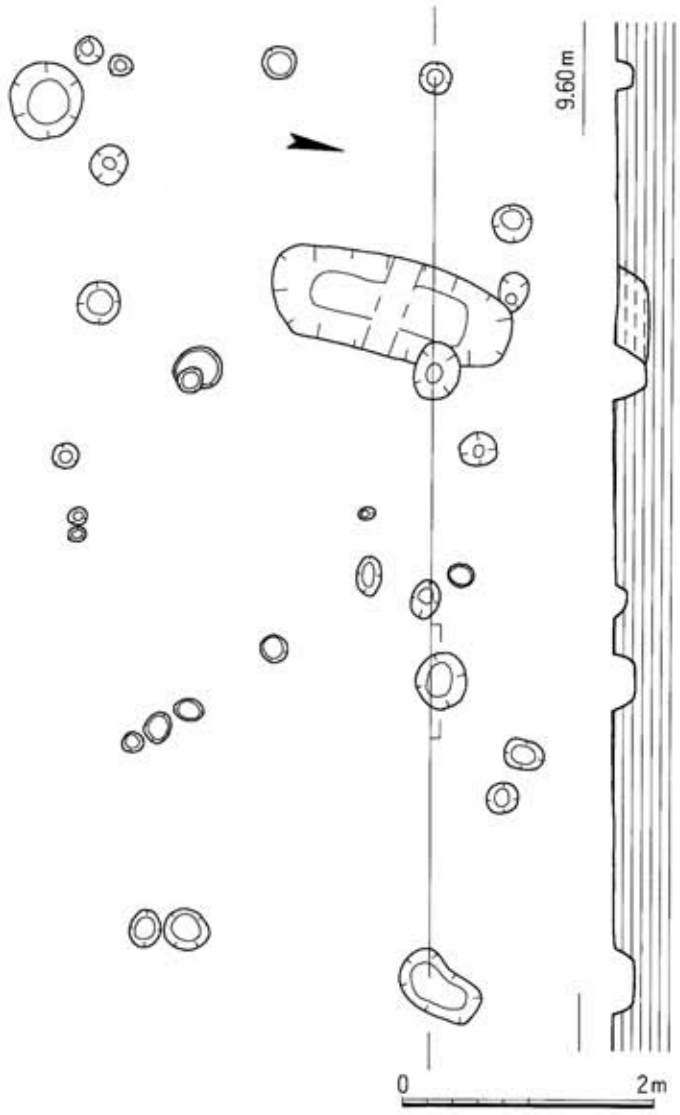


Fig. 40　ＳＡ226柵列（１／60）

ＳＡ227柵列（Fig. 41）

調査区北側東寄りに位置する。柱穴が密集しているが，３間の柵列と判断した。柱間は1.96～2.1ｍで，主軸はＮ48°Ｅである。柱掘形は0.3～0.4ｍのほぼ円形である。

ＳＢ228掘立柱建物（Fig. 41・50）

調査区北側中央に位置する。梁行１間(2.32ｍ)，桁行３間(4.7ｍ)の東西棟の掘立柱建物と判断したが，北辺西から２番目の柱穴は確認できていない。主軸はＮ82°Ｅである。桁行柱間は1.4～1.66ｍで，柱掘形は径0.3～0.4ｍの円形から楕円形を基調とする。

326は土師器鍋Ⅲａ類である。図示したものの他に瓦器椀片などが出土している。

ＳＡ229柵列（Fig. 41）

調査区北側中央に位置する。ＳＢ228掘立柱建物の北柱列東側に連続するようにあり，相互に関連が深いも

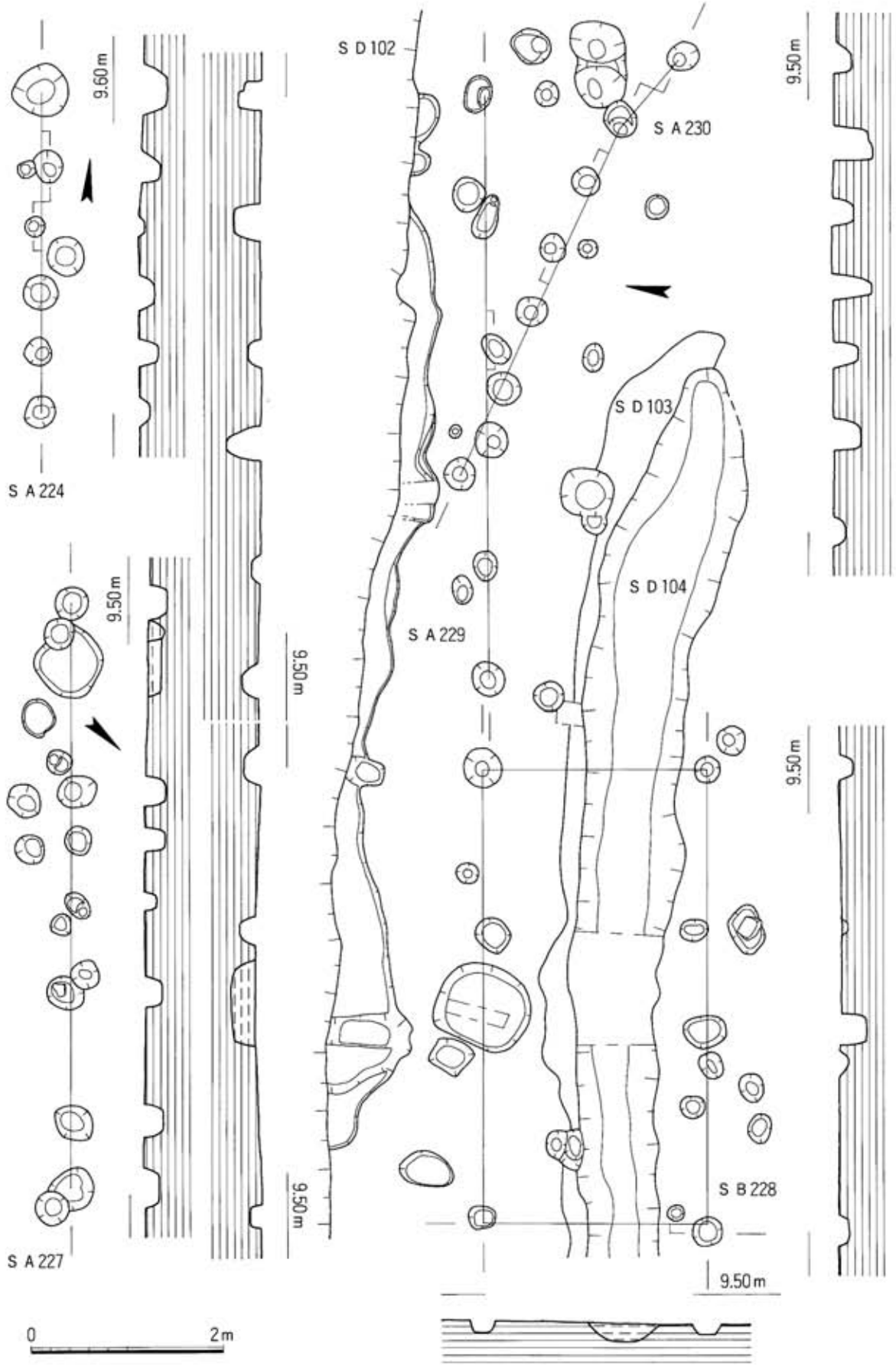


Fig. 41　S A224・227・229・230柵列，S B228掘立柱建物（1／60）

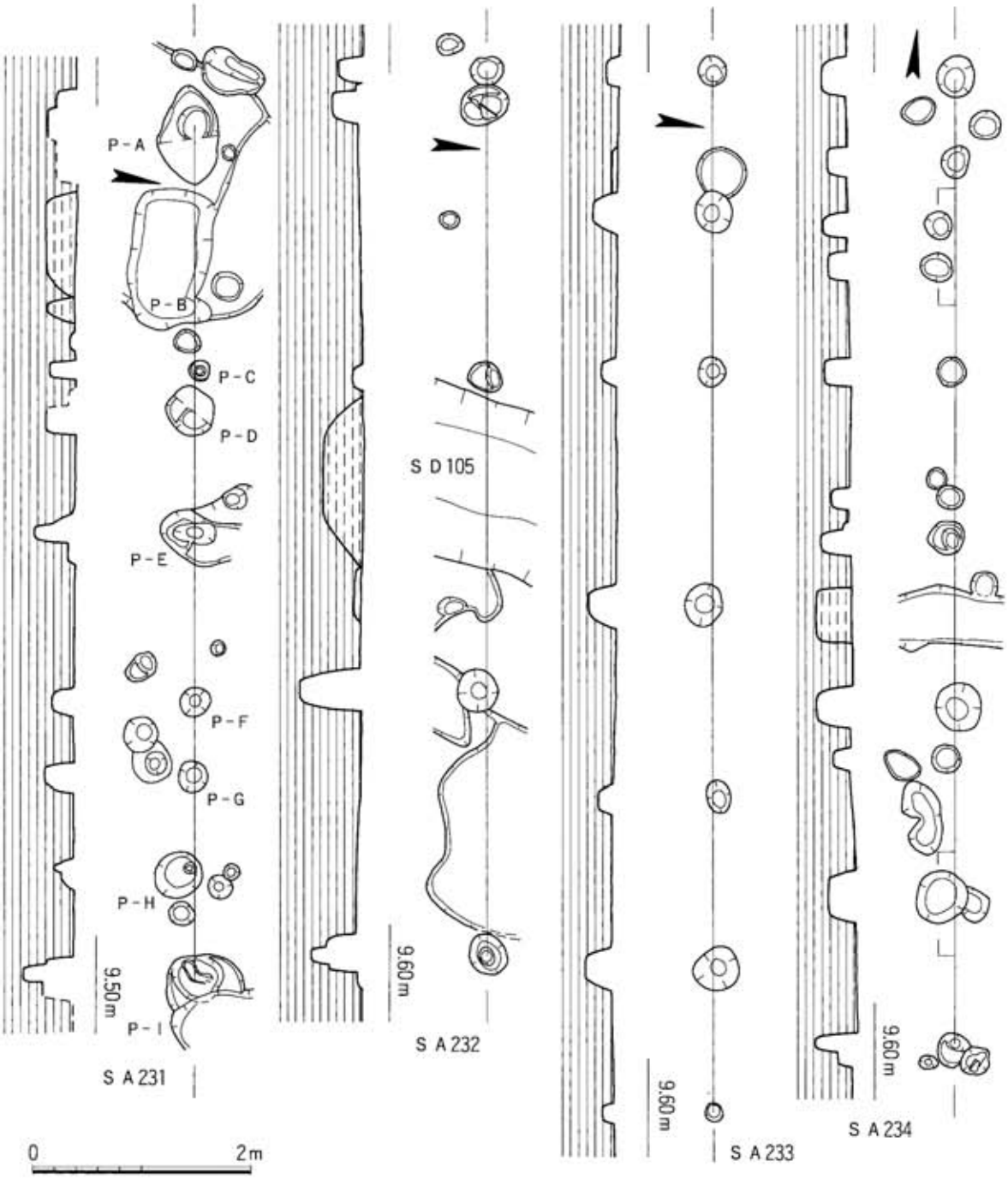


Fig. 42　S A231・232・233・234柵列（1／60）

のと考えられる。5間の柵列で，柱間は中央が0.98mと狭く，その両側は1.18～1.3mである。東西方向で，主軸はN82°Eである。柱掘形は径0.3～0.4mの円形から楕円形を基調とする。内面に段がつく土師器坏，青磁などが出土している。

S A 230柵列（Fig. 41・50）

調査区北側中央に位置する。6間の柵列で，東側の1間は南に開く。柱間は0.64～1.0mで，主軸はN73°Wである。柱掘形は径約0.3mのほぼ円形である。

320は土師器鍋Ⅲa類である。**321**は回転糸切り離しの土師器小皿で，口径8.9cm，器高1.4cmである。底部

外面に板状圧痕がみられる。**322**は龍泉窯系青磁椀で，高台部畳付からその内部にかけて露胎である。図示したものの他に土師器坏などが出土している。

ＳＡ231柵列（Fig. 42）

調査区中央部北寄りに位置する。直線上に小穴が並んでいるが，どの柱穴で柵列を構成したのか判別は難しい。製図段階までは気づかなかったが，Ｐ－Ｂ・ＣとＰ－Ｆ・ＧがＰ－Ｅを中心にほぼ対照的な位置にあり，Ｐ－Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｉで構成される柵列とするのが妥当なのであろうか。この場合，柱間は1.5～1.9ｍで，Ｐ－Ｂ・Ｃ間が0.56ｍ，Ｐ－Ｆ・Ｇ間が0.68ｍとなる。東西方向で，主軸はＮ80°Ｅである。柱掘形は径0.2～0.9ｍの円形から楕円形を基調とする。

ＳＡ232柵列（Fig. 42）

調査区中央部北寄りに位置する。主軸がやや異なるが，ＳＡ233柵列と連続するような配置であり，同時期に建てられていた可能性がある。３間の柵列で，柱間は2.4～2.9ｍである。東西方向で，主軸はＮ85°Ｅである。柱掘形は径0.3～0.4ｍのほぼ円形である。

ＳＡ233柵列（Fig. 42）

調査区中央部北寄りに位置する。ＳＡ232柵列と連続するような配置である。６間の柵列としているが，東側の１間は柱間が1.35ｍと短く，一番東側の柱穴がやや小さいことから伴わない可能性もある。東西方向で，主軸はＮ81°Ｅである。柱掘形は0.15～0.4ｍのほぼ円形である。

ＳＡ234柵列（Fig. 42）

調査区西端中央に位置する。６間の柵列で，柱間は1.36～1.74ｍである。南北方向で，主軸はＮ４°Ｗである。柱掘形は0.25～0.5ｍのほぼ円形である。土師器鍋などが出土している。

ＳＢ172掘立柱建物（Fig. 44・50）

調査区中央部南寄りの掘立柱建物集中部に位置する。ＳＢ236・237と重複してしまった柱穴があるが，ＳＢ173掘立柱建物と棟を並べる建物として，梁行２間（4.2ｍ），桁行３間（9.0ｍ）の南北棟の建物と判断した。主軸はＮ５°Ｗである。梁行柱間1.95～2.25ｍ，桁行柱間2.72～3.36ｍで，柱間がやや長くなりすぎており，もう少し別の構造を考えた方がよいのかもしれない。柱掘形は0.4～0.8ｍの円形を基調とする。

315～**318**は回転糸切り離しの土師器小皿である。**315**は口径7.4cm，器高2.2cm，**316**は復元口径7.8cm，器高1.7cm，**317**は復元底径6.3cm，**318**は復元口径8.2cm，器高2.3cmである。**319**は回転糸切り離しの土師器坏で，復元口径11.4cm，器高2.8cmである。図示したものの他に瓦器椀片が出土している。

ＳＢ173掘立柱建物（Fig. 45）

調査区中央部南東寄りに位置する。現地で確認されているが，北辺中央の柱穴は切合のためか検出されていない。梁行２間(4.4ｍ)，桁行３間(9.42ｍ)の南北棟の建物で，主軸はＮ５°Ｗである。梁行柱間2.12～2.28ｍ，桁行柱間3.0～3.24ｍである。柱掘形は径0.3～0.8ｍの円形から楕円形を基調とする。

Fig. 43　掘立柱建物集中部（１／100）

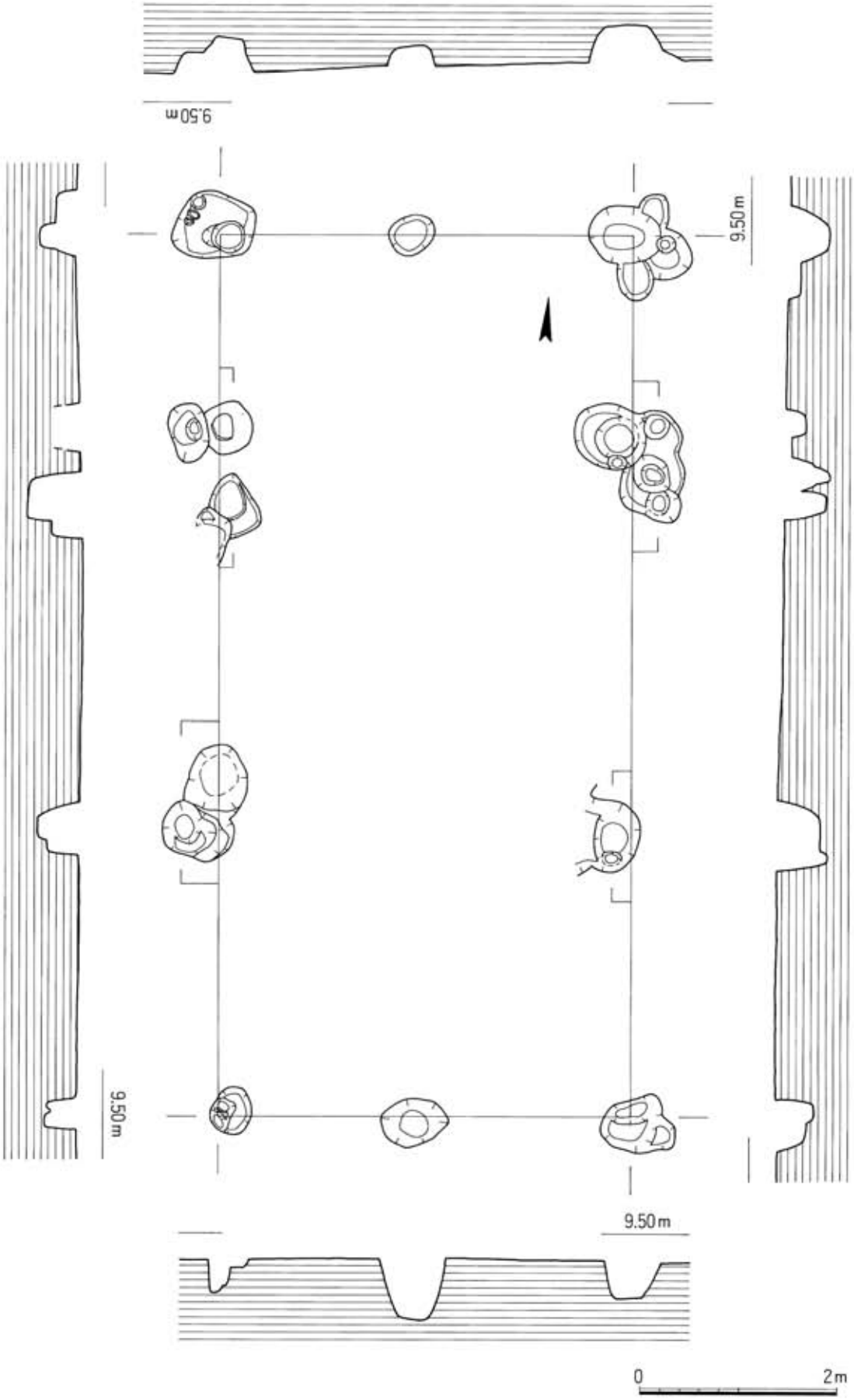


Fig. 44　ＳＢ172掘立柱建物（１／60）

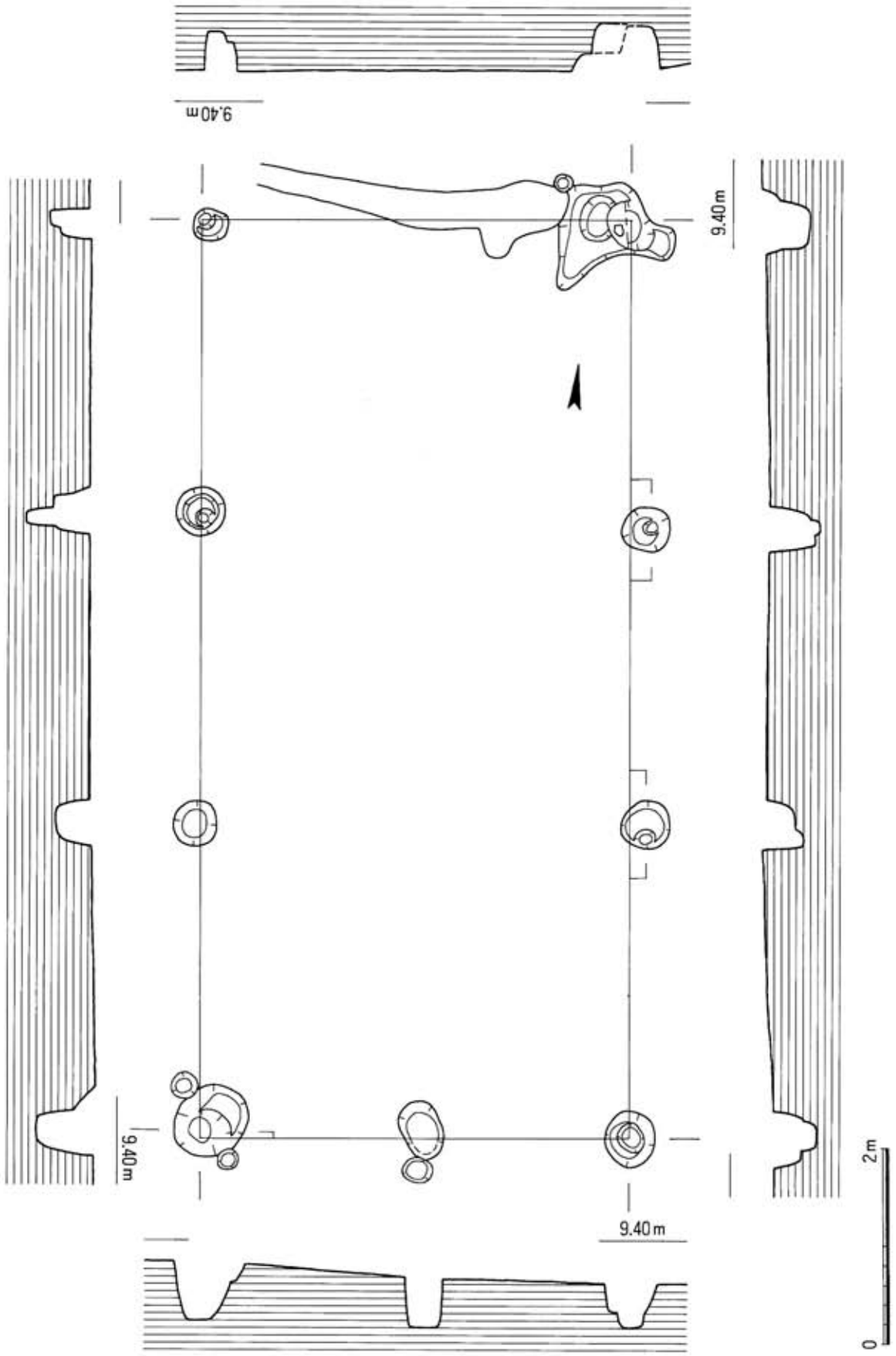


Fig. 45　ＳＢ173掘立柱建物（１／60）

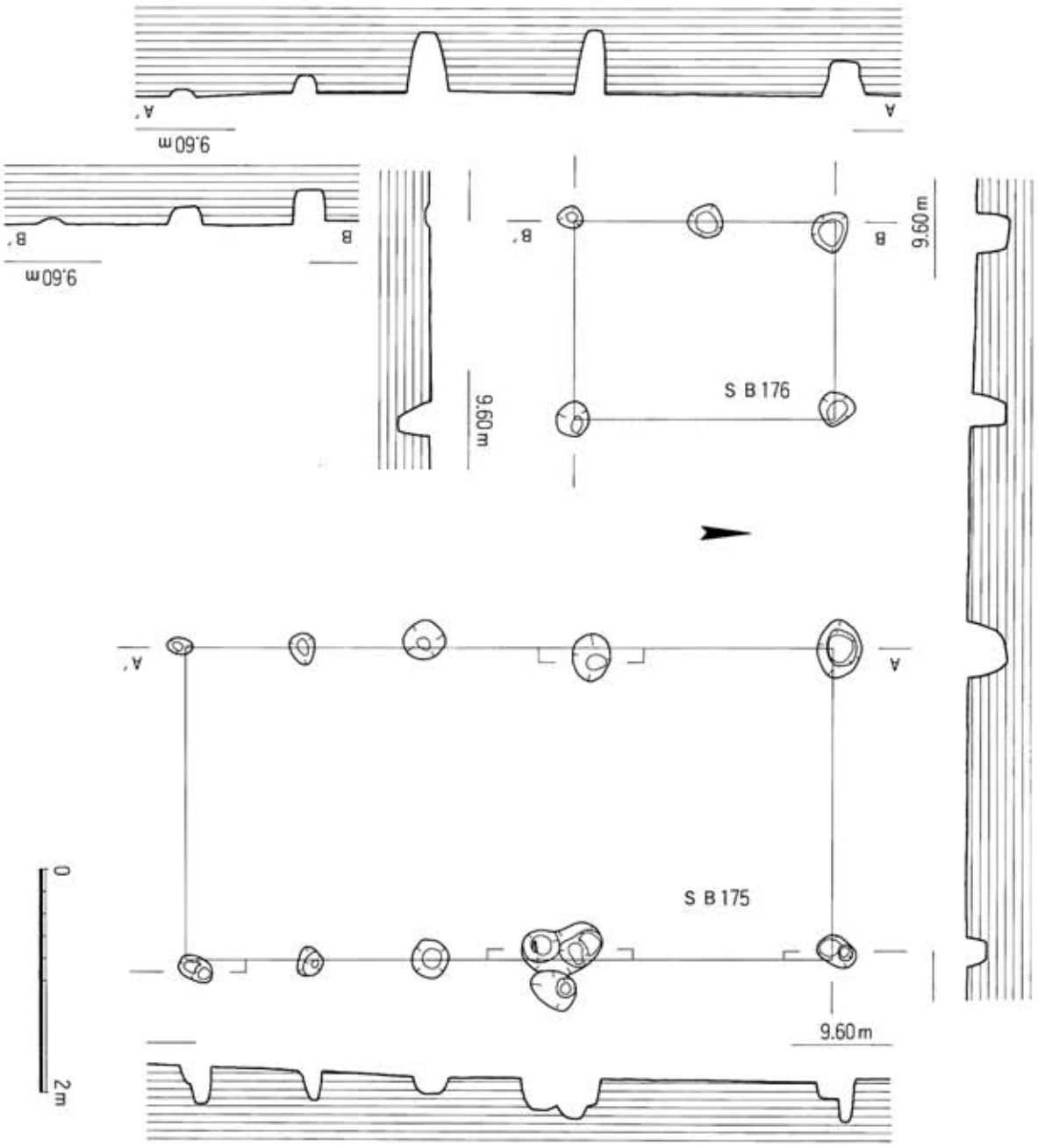


Fig. 46　S B175・176掘立柱建物（1／60）

S B175・176掘立柱建物（Fig. 46）

調査区中央部南寄りの掘立柱建物集中部に位置する。ここでは別々の建物として報告するが，北辺がそろっており，位置的には関連が深く，あるいは連続する建物になる可能性がある。S B175掘立柱建物は梁行1間（2.8m），桁行4間（5.85m）の南北棟の建物と判断した。しかし，桁行方向では南側2間が柱間1.06～1.2mと短く，柱穴も小さくなることから庇の可能性もある。主軸はやや東にふれるもののほぼ正方位である。桁行柱間1.32～2.3mで，柱掘形は径0.2～0.5mの円形から楕円形である。

S B176掘立柱建物は，梁行1間（1.78m），桁行2間（2.36m）の建物としたが，東辺中央の柱穴は確認されておらず，S B175掘立柱建物の関連の施設とする方がよいものと考えられる。主軸はやや東にふれるもののほぼ正方位である。梁行柱間は1.18mで，柱掘形は径0.2～0.3mのほぼ円形である。

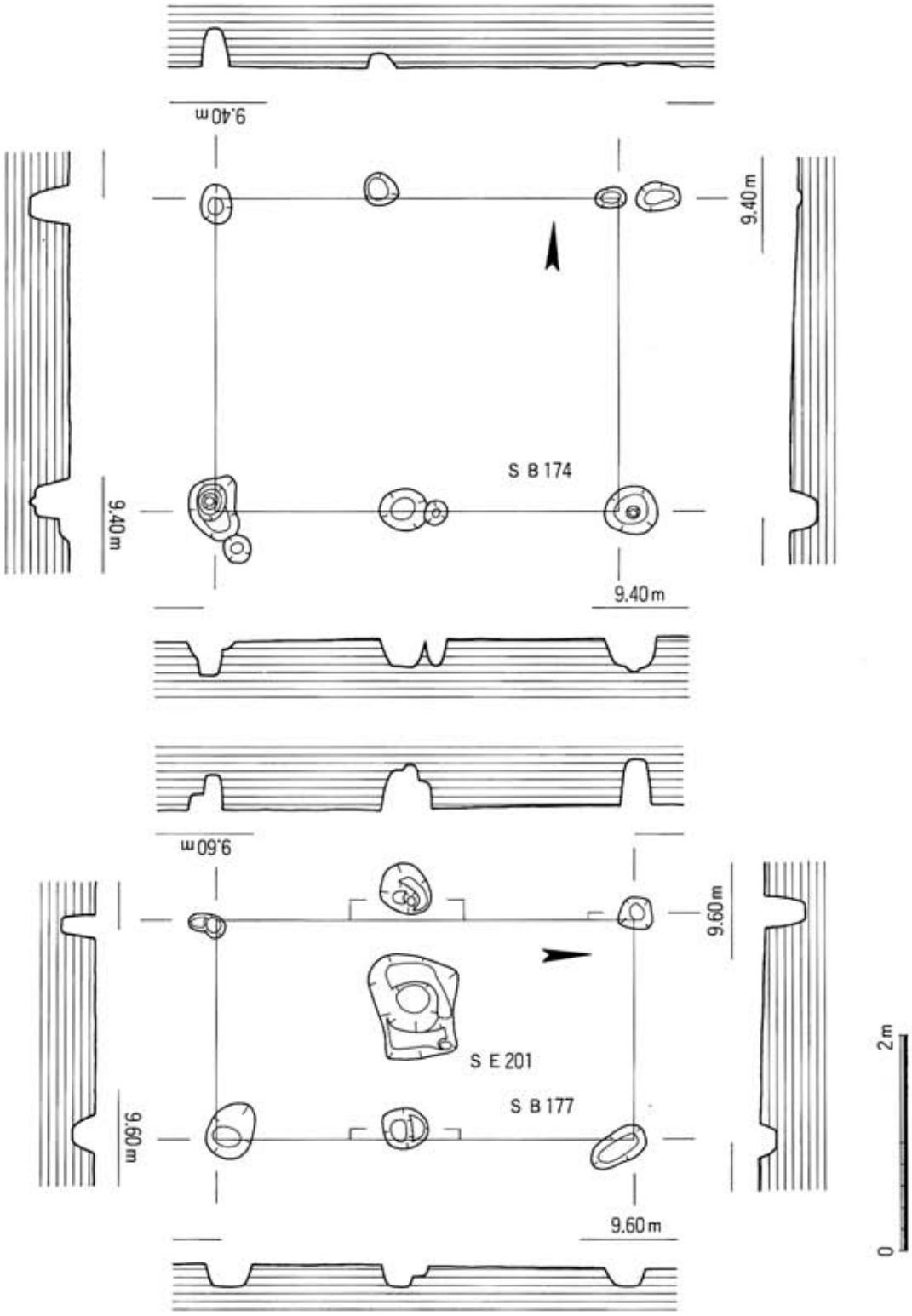


Fig. 47　ＳＢ174・177掘立柱建物（１／60）

ＳＢ174掘立柱建物（Fig. 47）

調査区中央部東寄りに位置する。梁行１間（2.92ｍ），桁行２間（3.25ｍ）の建物と判断したが，北辺中央の柱穴が西に偏っており，また北東隅の柱穴が浅く，確実ではない。東西棟の建物で，主軸はN88°Eである。桁行柱間1.5～1.75ｍで，柱掘形は径0.3～0.5ｍの円形から楕円形を基調とする。

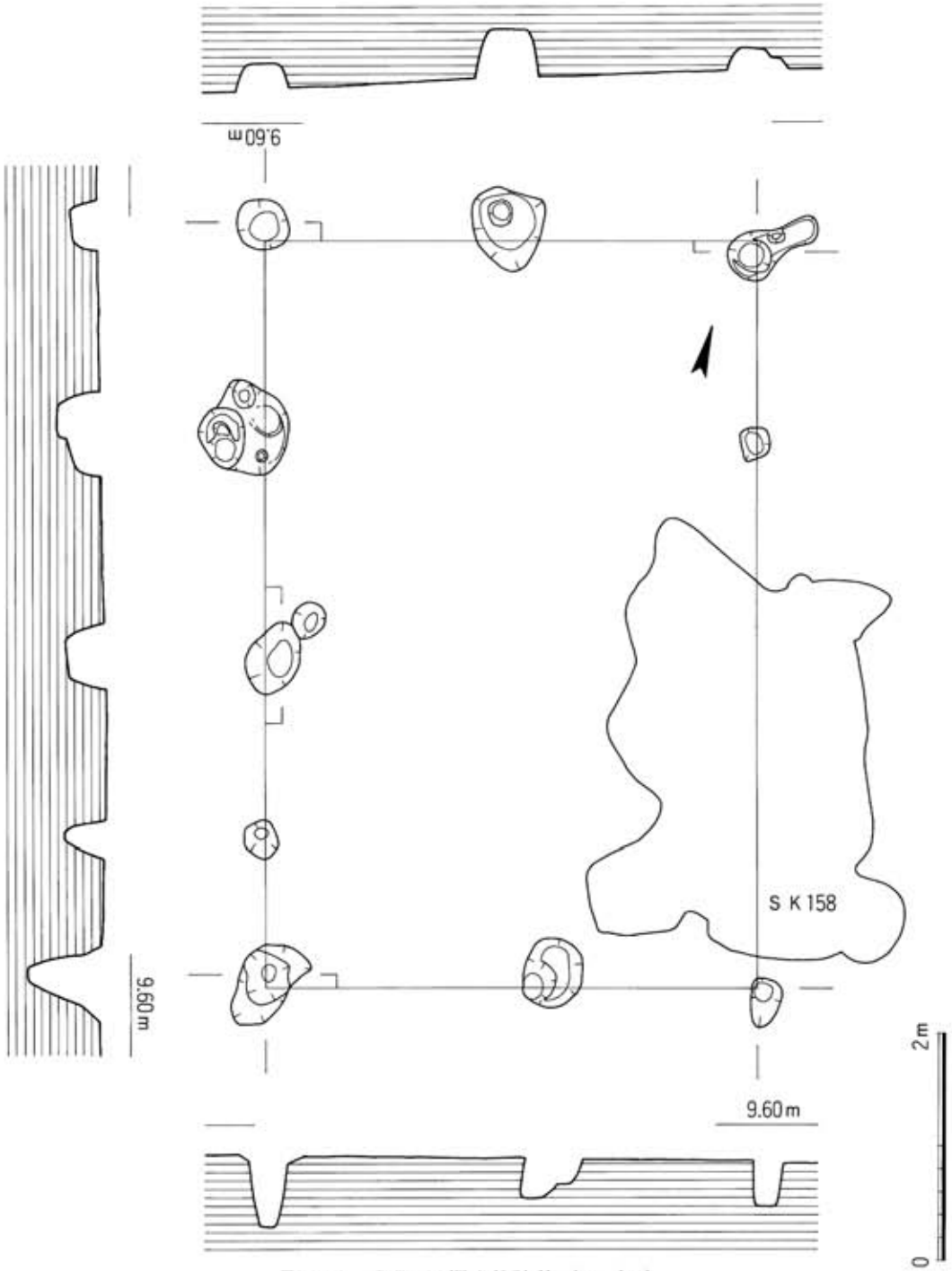


Fig. 48　SB238掘立柱建物（1／60）

SB177掘立柱建物（Fig. 47）

調査区中央部南西寄りに位置する。梁行1間（2.04m），桁行2間（3.88m）で，ほぼ正方位の南北棟の建物である。桁行柱間1.7～2.18mで，柱掘形は0.2～0.5mの円形から楕円形を基調とする。建物ほぼ中央にSE201井戸が位置しており，関連するものと推定される。

SB238掘立柱建物（Fig. 48）

調査区中央部南寄りの掘立柱建物集中部に位置する。梁行2間（4.34m），桁行4間（6.58m）の南北棟の建物である。主軸はN15°Wである。梁行柱間1.98～2.36m，桁行柱間1.34～2.1mである。柱掘形は径

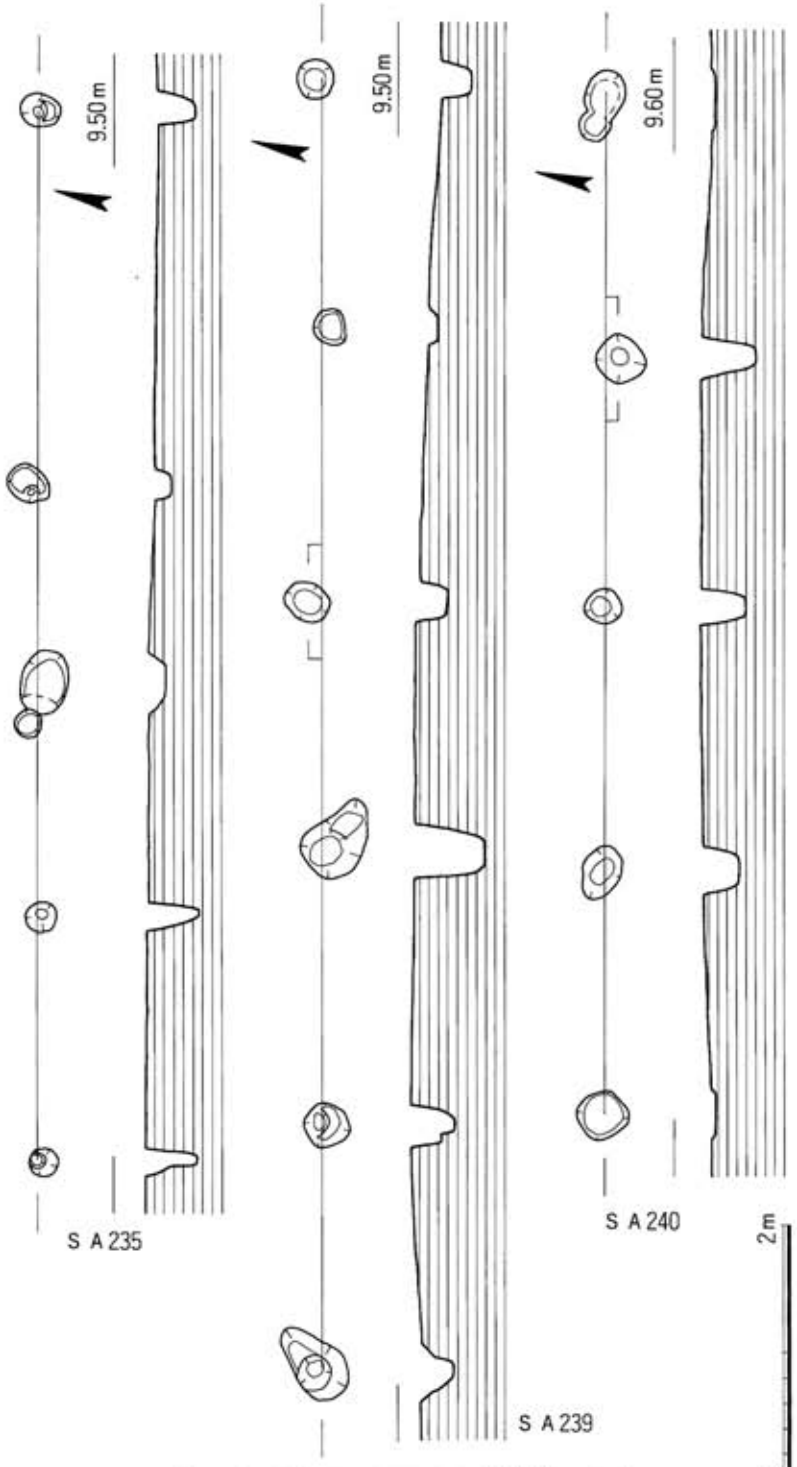


Fig. 49　S A235・239・240柵列（1／60）

0.25～0.7mの円形から楕円形を基調とする。

S B236・237掘立柱建物

(Fig. 43・50)

調査区中央部南寄りの掘立柱建物集中部に位置する。現地ないしは発掘作業終了直後の検討で判断されたものではあるが，柱穴の対応関係が確実ではなく，S B172掘立柱建物と重複した柱穴があり，やや疑問点がある。柵列などの可能性もある。

S B236掘立柱建物は梁行4間（12.5m），桁行8間（19.0m）の南北棟の建物で，主軸はN10°Wである。S B237掘立柱建物は梁行2間（8.5m），桁行5～6間（20.6m）の南北棟の建物で，主軸はN10°Wである。

323～325は回転糸切り離しの土師器で，**323・324**は小皿，**325**は坏か。いずれもS B237掘立柱建物出土である。

S A235柵列（Fig. 49）

調査区中央部に位置する。4間の東西方向の柵列で，主軸はN78°Eである。柱間は1.5～3.0mであるが，東側の3.0mの部分には柱穴が検出できなかった可能性がある。柱掘形は径0.3～0.5mの円形から楕円形を基調とする。方位からすると，S B236・237掘立柱建物かS B238掘立柱建物に関連する可能性がある。土師器鍋Ⅲb類が出土している。

S A239柵列（Fig. 49）

調査区中央部南寄りの掘立柱建物集中部に位置する。5間の東西方向の柵列で，主軸はN75°Eである。柱間は1.96～2.18mで，柱掘形は径0.3～0.6mの円形から楕円形を基調とする。

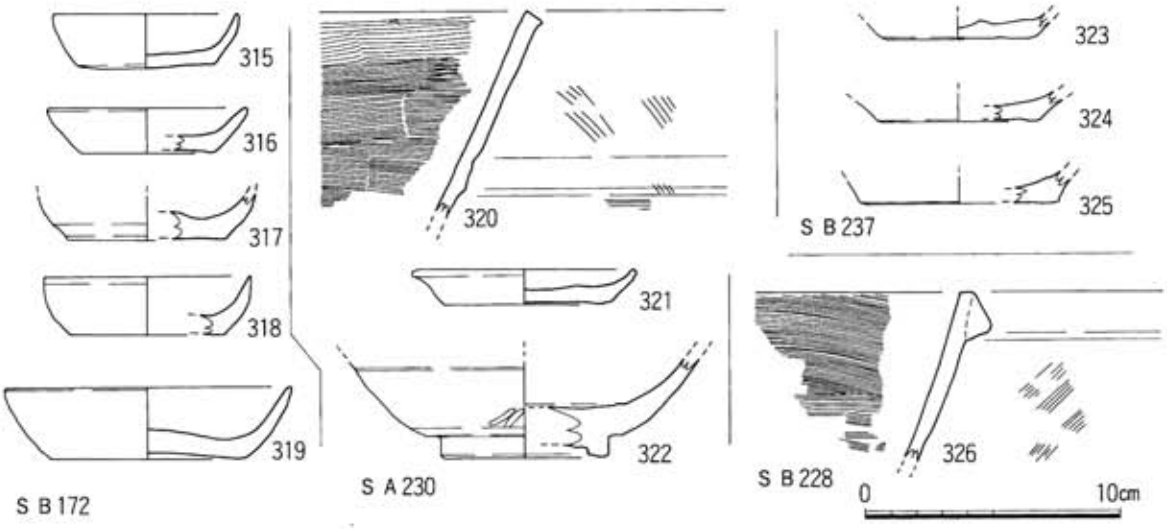


Fig. 50　S B172・228・237掘立柱建物，S A230柵列出土遺物（1／3）

S A 240柵列（Fig. 49）

調査区中央部南寄りの掘立柱建物集中部に位置する。4間の東西方向の柵列で，主軸はN76°Eである。柱間は1.92～2.1mで，柱掘形は径0.3～0.4mの円形から楕円形を基調とする。

（3）土坑

S K 100土坑（Fig. 51・52）

調査区北側ほぼ中央に位置する。S B225掘立柱建物より古く，S K101土坑とS D242溝より新しい。平面はやや不整形な楕円形で，長軸約5.4m，短軸2.6m，深さ0.7mである。

327は瓦器羽釜で，鍔部が欠失する。口径25.0cmで，口縁下に1条沈線がめぐる。鍔部以下には煤が付着している。**339**（S K101土坑出土）と同一個体の可能性がある。**328・329**は土師器鍋Ⅲa類で，**328**は復元口径40.8cmである。

S K 101土坑（Fig. 51～53）

調査区北側ほぼ中央に位置する。調査時はS D101溝として直角に近い角度で曲がる溝を推定していたが，角度が直角ではなく，幅が違うこと，S K100土坑北側の形状が平面図では不自然なことなどから，S K100土坑の東側をS K101土坑，南側をS D242溝として報告することにした。

平面は細長い形態になるものと推定され，幅0.7m，深さ0.25mである。埋土中位で焼土が4ヶ所で確認されている。

330～332・334は土師器鍋Ⅲa類で，**334**は復元口径40.6cmである。**330・331**は瓦質の焼成で，瓦器に区分した方がよいのかもしれない。**333**は土師器鍋Ⅲb類で，復元口径29.7cmである。**335**は本来土師器と思われる瓦質焼成の回転糸切り離しの小皿で，復元口径7.6cm，器高2.1cmである。**336**は白磁皿で，体部下半以下は露胎である。**337**は龍泉窯系青磁椀で，かなり厚く施釉される。**338・339**は瓦器羽釜で，ともに鍔部以下には煤が付着している。**339**は復元口径25.4cmで，口縁部下に1条沈線がめぐる。図示したものの他に瓦器擂鉢が出土している。

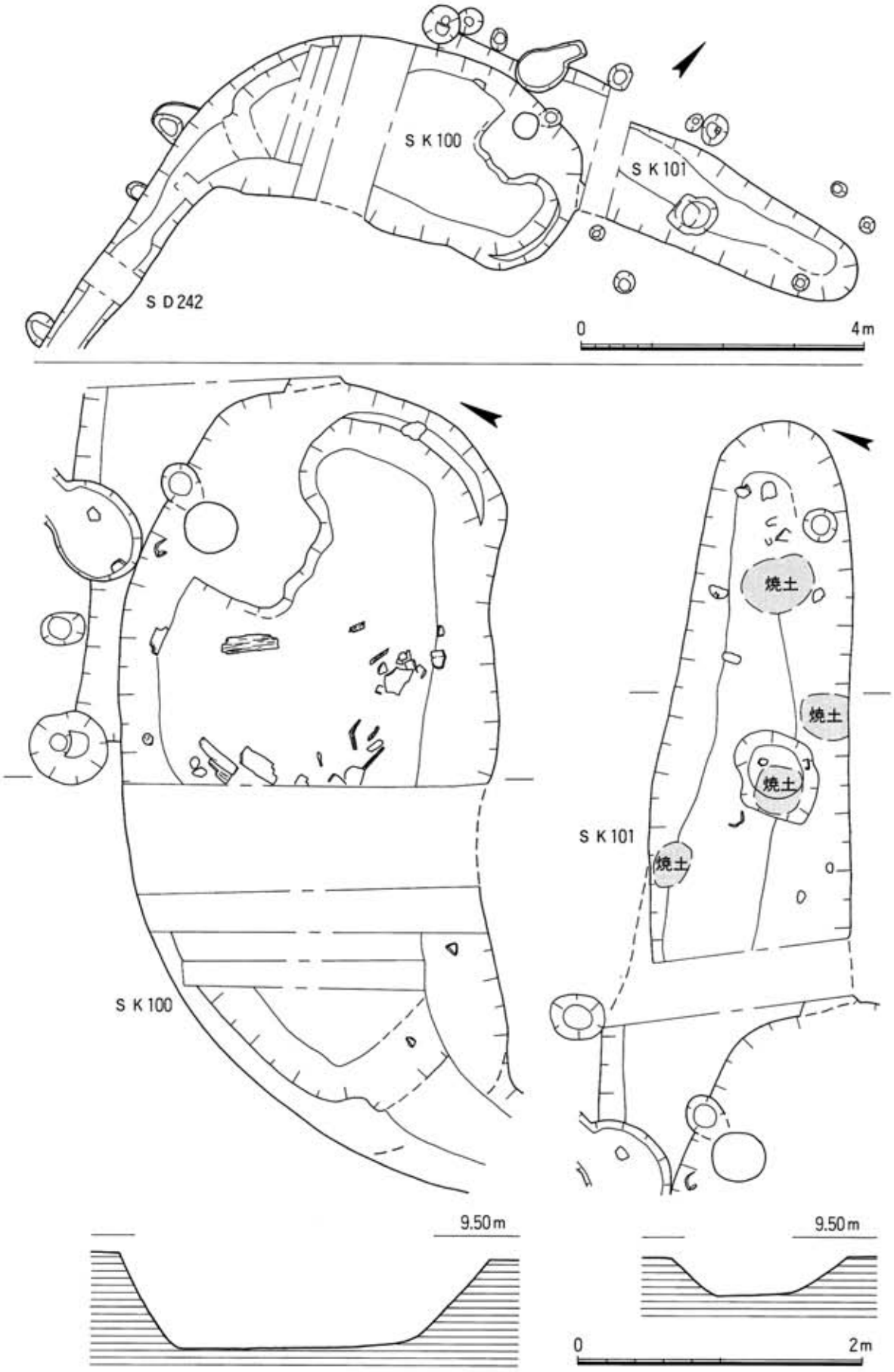


Fig. 51　S K100・101土坑周辺平面図（1／80），S K100・101土坑（1／40）

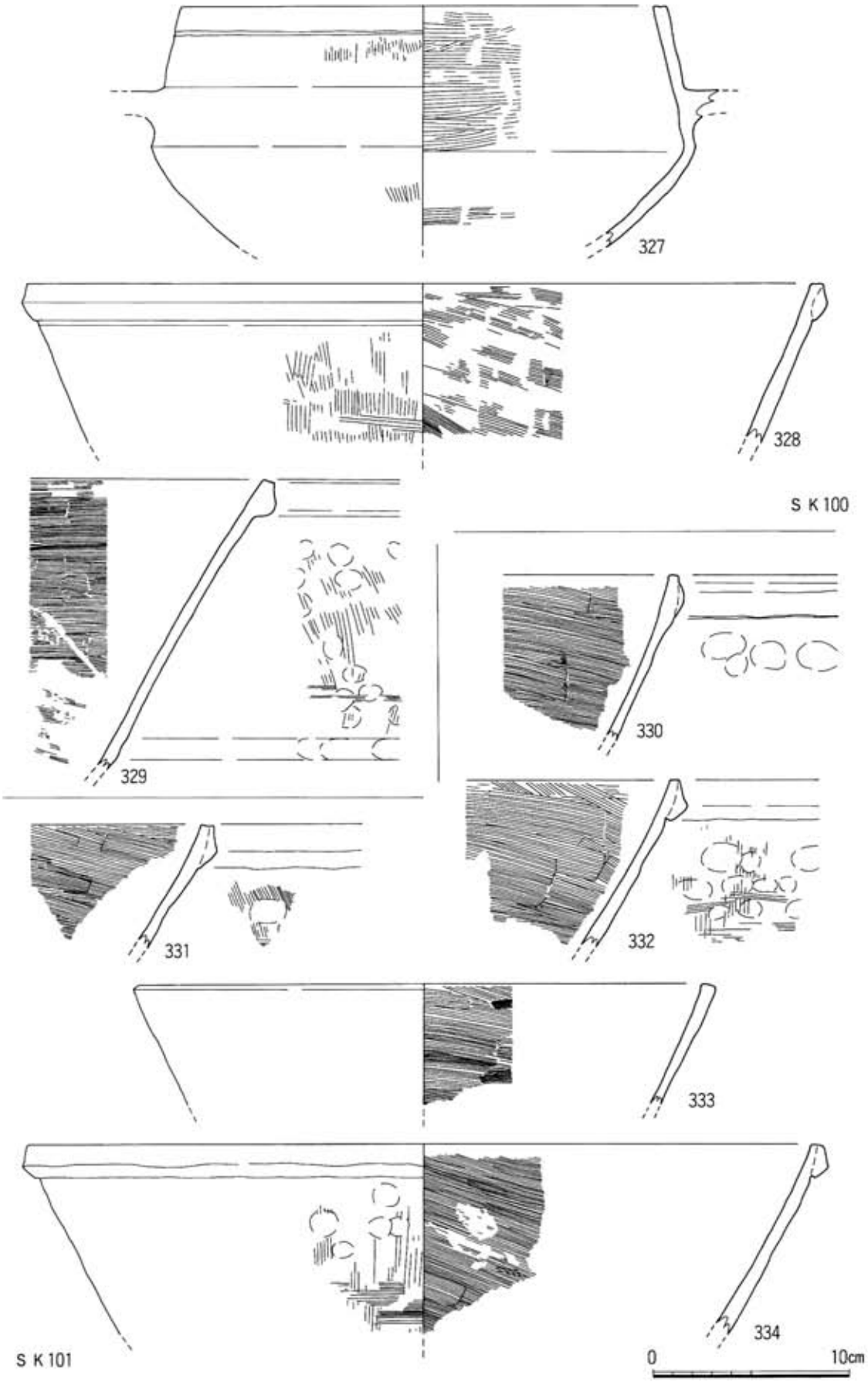


Fig. 52　S K100土坑出土遺物，S K101土坑出土遺物①（1／3）

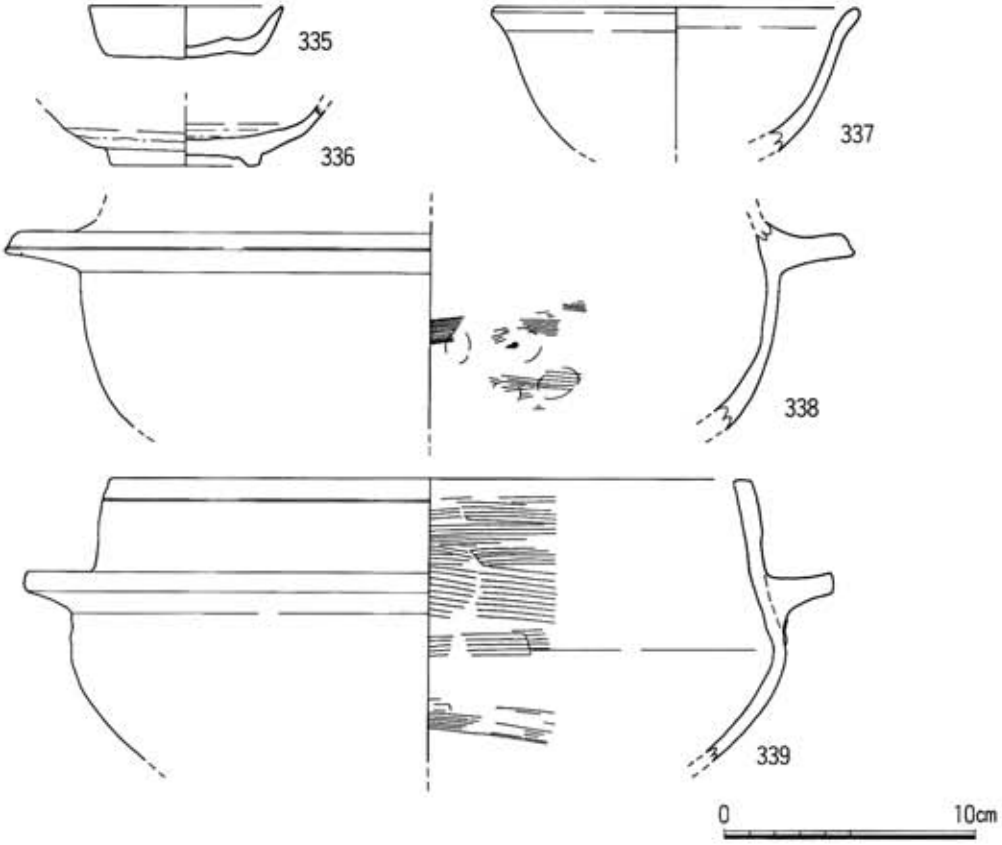


Fig. 53　ＳＫ101土坑出土遺物②（１／３）

ＳＫ109土坑（Fig. 54）

調査区北側ほぼ中央に位置する。ＳＡ226柵列より古い。平面は細長い長方形で，長軸1.95ｍ，幅0.8ｍ，深さ0.4ｍである。底面は南側が低くなっている。

340は回転糸切り離しの土師器小皿で，口径7.6cm，器高1.6cmである。図示したものの他に土師器鍋Ⅲａ類が出土している。

ＳＫ131土坑（Fig. 54）

調査区北西部に位置する。平面はやや不整形な円形で，径約2.3ｍ，深さ0.8ｍである。底面はすり鉢状になる。遺物は古代の須恵器，土師器が多いが，すべて破片であることや，瓦器椀片が下層から出土しているため，中世の遺構として報告することにした。

341は瓦器椀で，内面にはかなり細かいミガキが施される。

ＳＫ134土坑（Fig. 55）

調査区中央部北東寄りに位置する。ＳＤ107溝より古い。平面は細長い形態で，幅8.5ｍ，深さ5.5ｍである。形態や位置から区画溝を構成する遺構の可能性もあるが，ここでは土坑として報告することにした。底面はほぼ平坦である。

342は片口のつく土師器擂鉢である。**343**は土師器鍋Ⅱｂ類，**344**は土師器鍋Ⅲａ類である。**345**は龍泉窯系青磁椀である。**346**は龍泉窯系青磁盤で，内外面に蓮弁文が施されるタイプである。高台内部は釉を掻き取っている。図示したものの他に土師器小皿，白磁片が出土している。

ＳＫ135土坑（Fig. 55）

調査区中央部北寄りに位置する。平面は不整形な長方形になると推定される。長軸2.6m，幅1.55m，深さ0.25mである。底面はほぼ平坦である。

347は小さな鍔がつくタイプの滑石製石鍋である。外面には煤が付着している。**348**は回転糸切り離しの土師器小皿で，復元口径8.1cm，器高1.2cmである。図示したものの他に土師器鍋Ⅲａ類，龍泉窯系青磁，白磁壺が出土している。

ＳＫ137土坑（Fig. 56）

調査区中央部北寄りに位置する。平面は不整形な円形になるものと推定され，径約2.1m，深さ0.3mである。底面はほぼ平坦であるものと思われる。

349・350は回転糸切り離しの土師器小皿で，**349**は復元口径7.7cm，器高2.1cmである。**350**は復元口径9.0cm，器高1.3cmで，底部外面に板状圧痕がみられる。**351**は須恵器捏鉢で，復元口径9.7cmである。図示したもの他に瓦器椀が出土している。

ＳＫ139土坑（Fig. 56）

調査区中央部北寄りに位置する。切合で正確な平面形は不明であるが，長軸1.3m，短軸1.0mの長方形か，大きくとらえて長軸2.15m，短軸約1.7mのやや不整形な長方形であろう。深さは0.4mである。

352は土師器鍋Ⅲｂ類である。**353**は回転糸切り離しの土師器小皿で，復元口径9.4cm，器高1.8cmである。**354**は同安窯系青磁皿Ｉ－１類で，復元口径10.0cmである。**355**は平面円形の瓦器火鉢である。**356**は龍泉窯系青磁盤である。

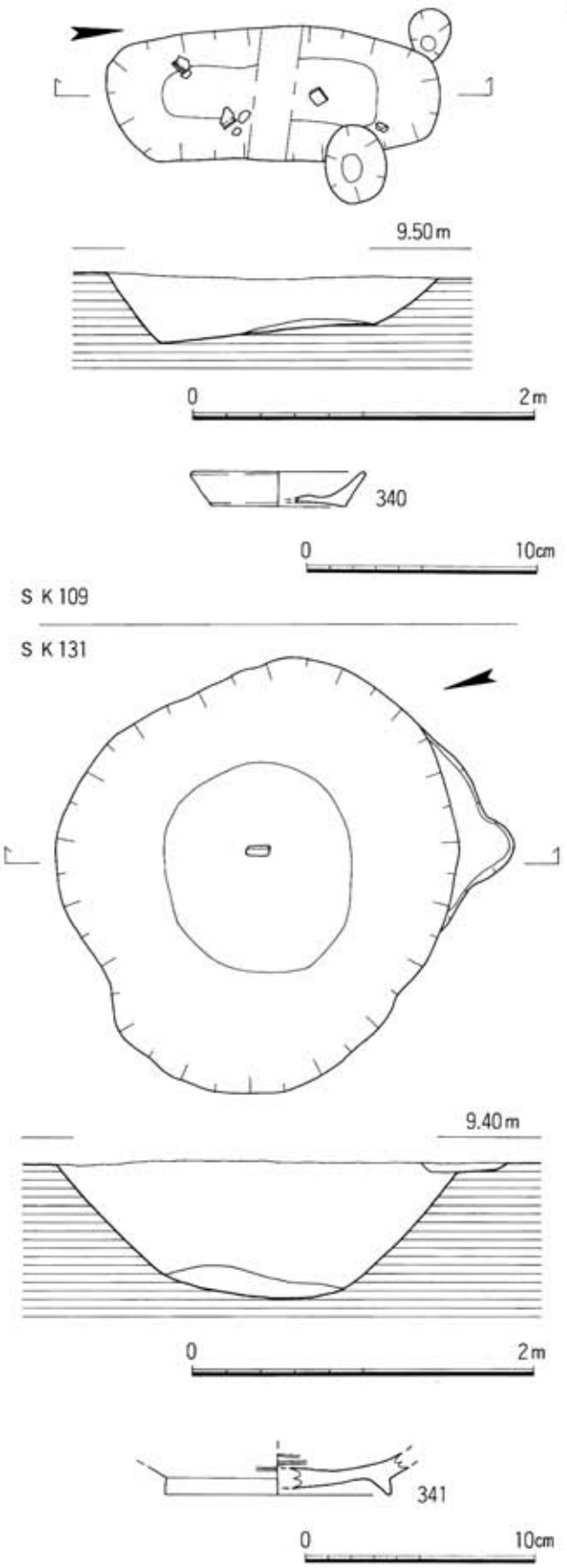


Fig. 54　ＳＫ109・131土坑（1／40），出土遺物（1／3）

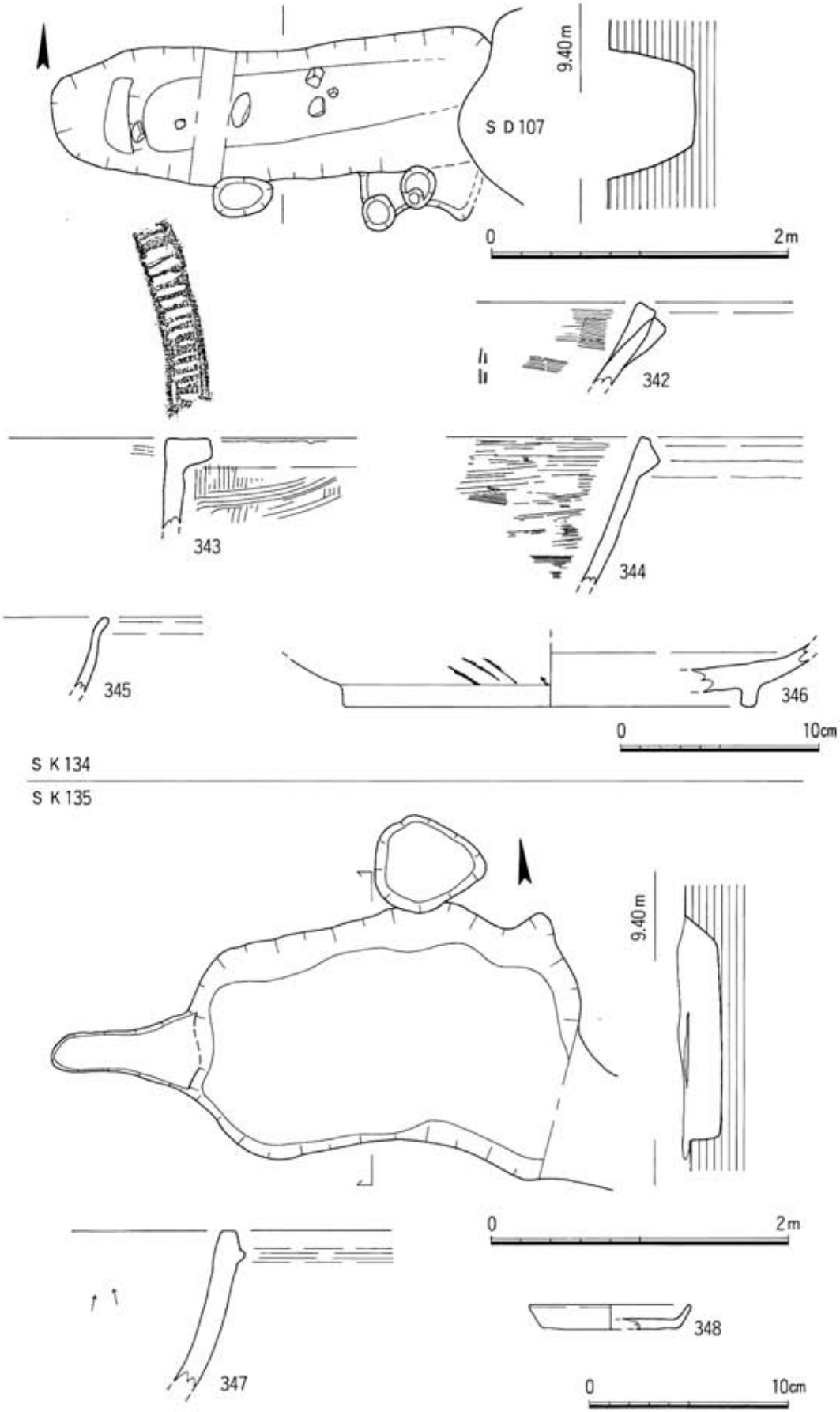


Fig. 55　ＳＫ134・135土坑（１／40），出土遺物（１／３）

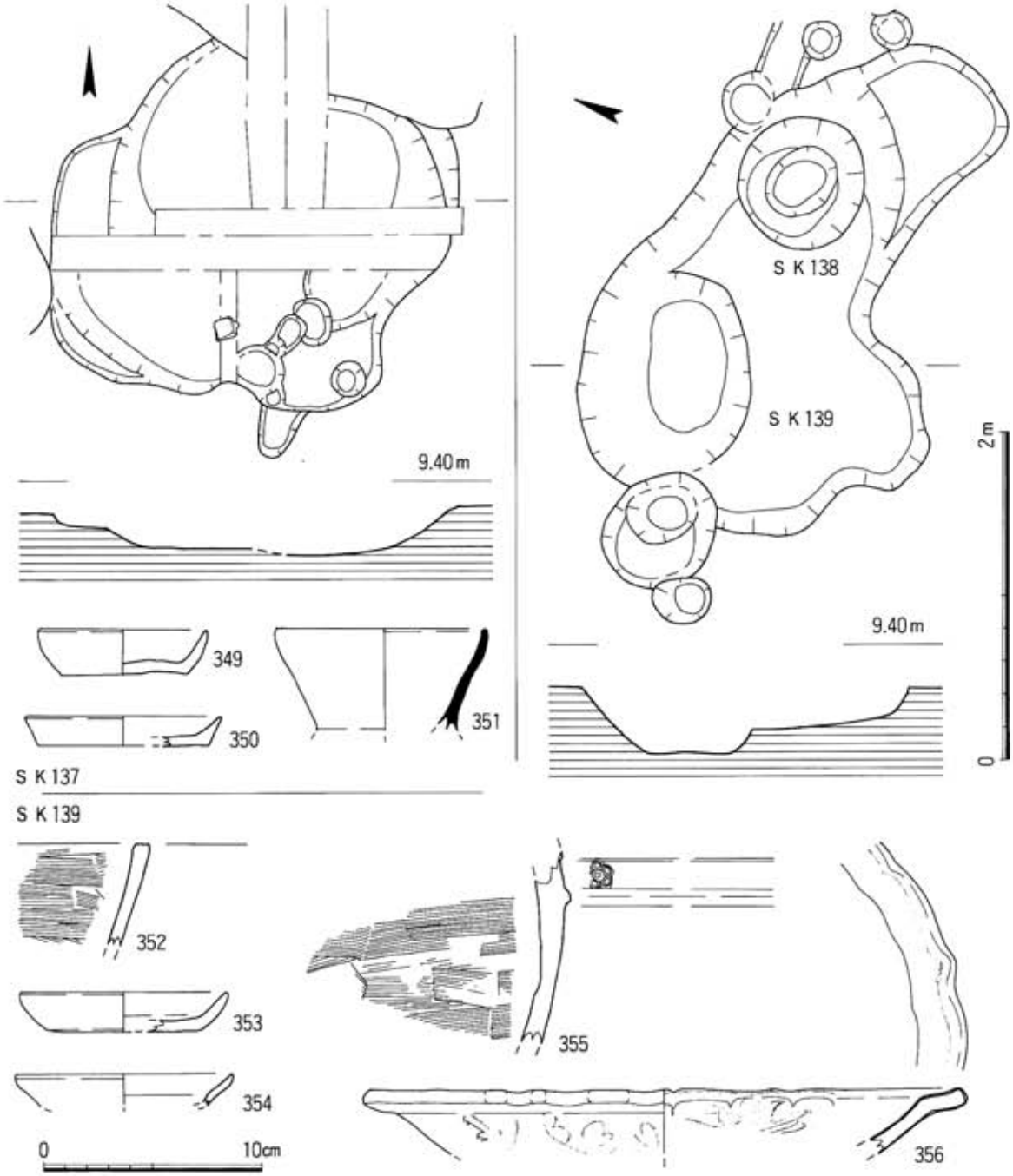


Fig. 56　S K137・139土坑（1／40），出土遺物（1／3）

S K142土坑（Fig. 57）

調査区中央部北東寄りに位置する。平面はやや不整形な長方形で，長軸3.2m，短軸2.1m，深さ0.3mである。底面は北側が一段深く掘り下げられている。中央部検出面で焼土が確認されている。

357は東播系須恵器捏鉢である。**358**～**361**は回転糸切り離しの土師器小皿で，いずれも底部外面に板状圧痕がみられる。**358**は口径8.7cm，器高1.1cm，**359**は口径8.9cm，器高1.5cm，**360**は口径8.9cm，器高1.5cm，**361**は口径9.5cm，器高1.9cmである。**362**は回転糸切り離しの土師器坏で，底部外面に板状圧痕がみられる。口径13.5cm，器高3.0cmである。**363**は瓦器椀で，復元口径16.2cmである。全体にミガキは粗い。**364**は白磁椀Ⅳ類で，復元口径16.3cmである。体部下半部は露胎である。**365**は土師器Ⅱｂ類である。図示したものの他に龍泉窯系青磁椀Ⅰ類が出土している。

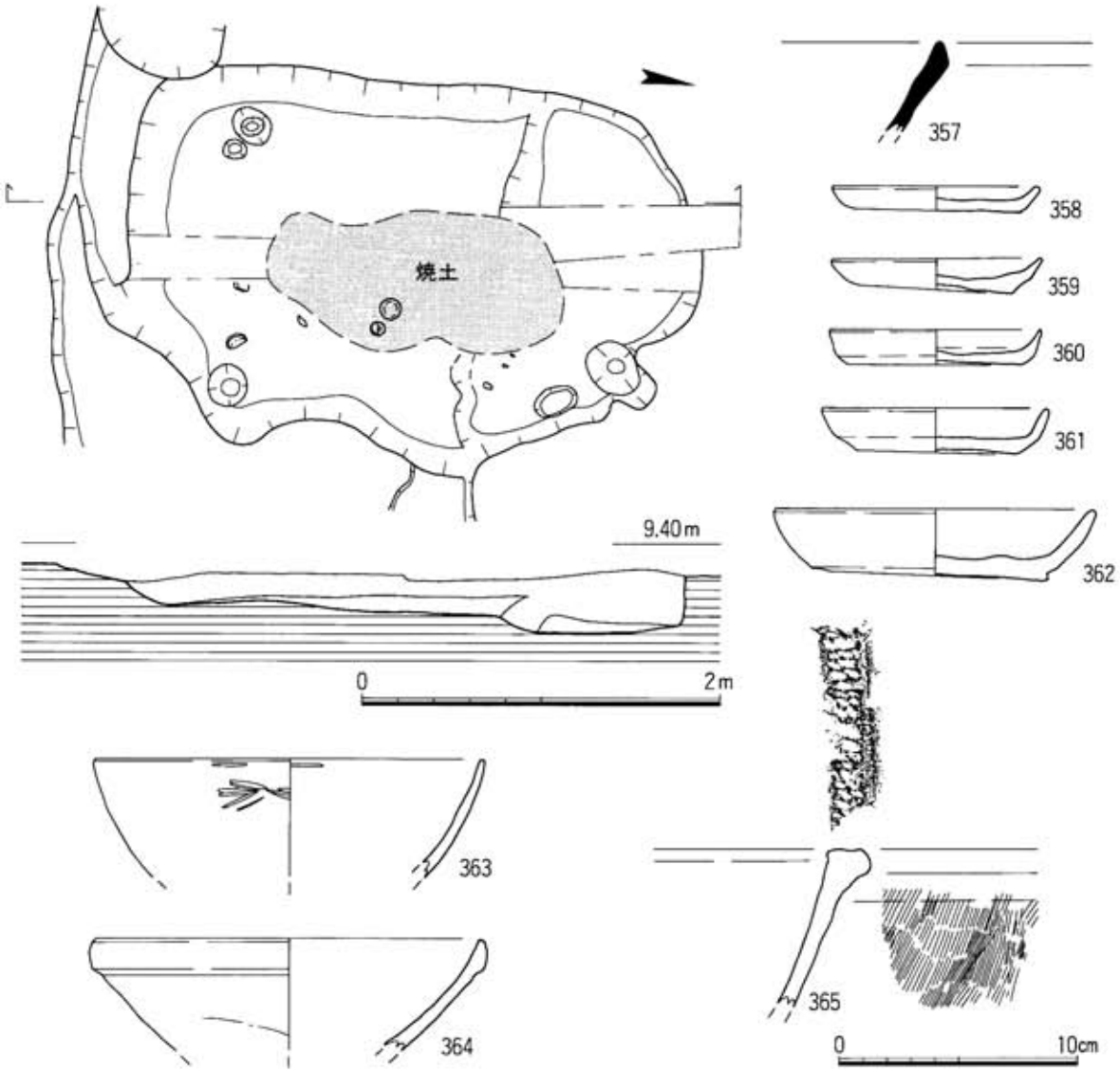


Fig. 57　ＳＫ142土坑（１／40），出土遺物（１／３）

ＳＫ143土坑（Fig. 58）

調査区中央部北寄りに位置する。平面は楕円形で，長軸1.35ｍ，短軸0.95ｍ，深さ0.35ｍである。底面は西側が深くなっている。

366は回転糸切り離しの土師器小皿である。復元口径8.7cm，器高1.5cmで，底部外面に板状圧痕がみられる。**367**は瓦器椀で，内面はミガキである。**368**は白磁椀Ⅷ類で，内面見込みの釉を輪状に掻き取っている。**369**は龍泉窯系青磁皿Ⅰ－２類で，口径9.5cm，器高2.2cmである。図示したものの他に土師器鍋Ⅱｂ・Ⅲａ類，龍泉窯系青磁椀Ⅰ－６類が出土している。

ＳＫ151土坑（Fig. 58）

調査区中央部北東寄りに位置する。平面はほぼ方形で，長軸2.7ｍ，短軸2.2ｍ，深さ0.3ｍである。底面はほぼ平坦である。北側の検出面で焼土が確認されている。南西隅の底面付近から完形に近い瓦器椀１点が出土している。

370は回転糸切り離しの土師器坏で，復元口径14.0cm，器高2.8cmである。**371**は土師器椀で，底部内面に指

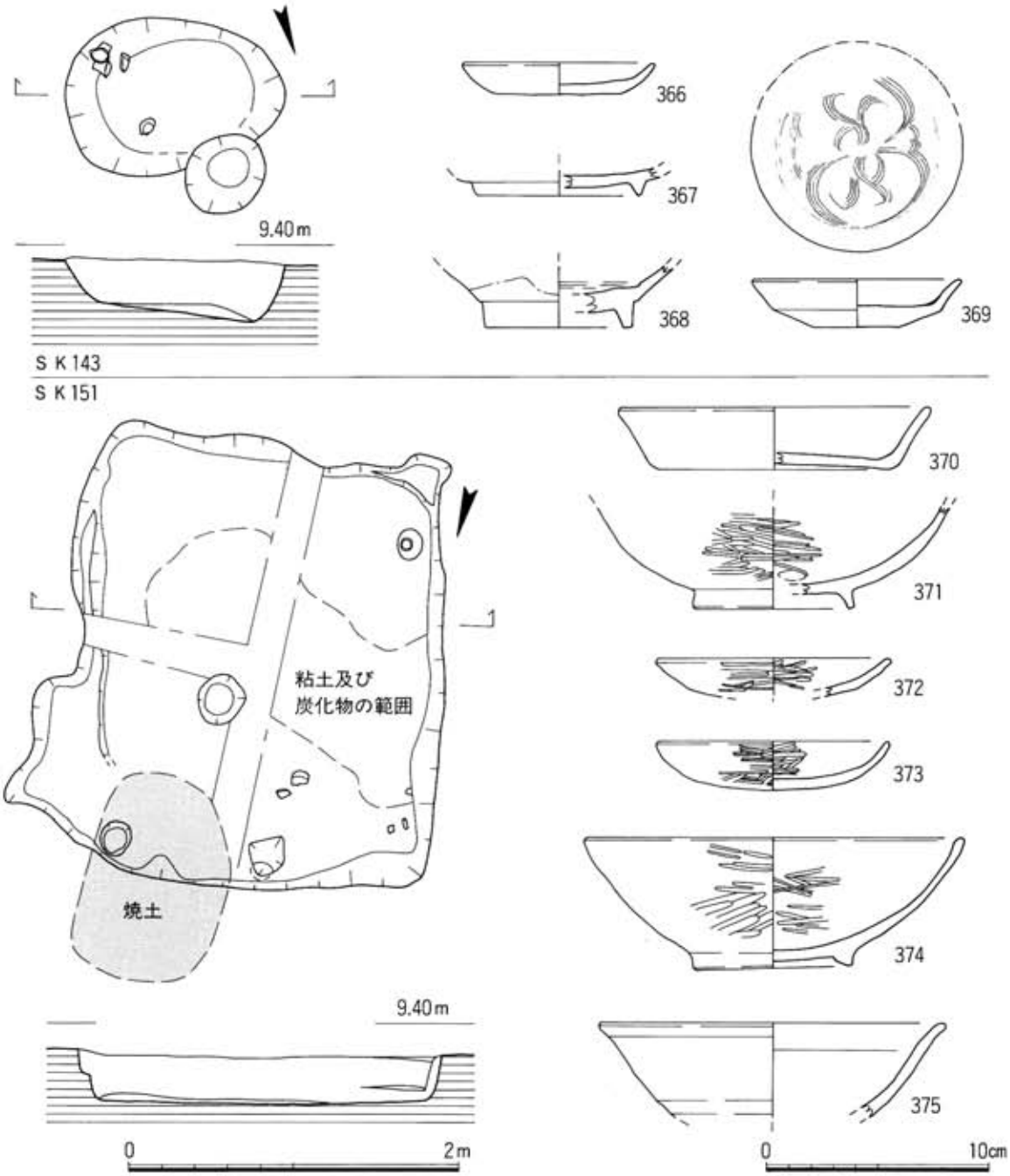


Fig. 58　SK143・151土坑（1／40），出土遺物（1／3）

頭圧痕がみられる。**372**・**373**は瓦器小皿で，**372**は復元口径10.6cm，器高1.7cm，**373**は復元口径10.6cm，器高2.2cmである。**374**は瓦器椀で，口径17.1cm，器高6.0cmである。**375**は白磁椀で，復元口径15.6cmである。図示したものの他に青磁椀が出土している。

SK165土坑（Fig. 59）

調査区中央南西寄りに位置する。全体に深さ0.06～0.1mと浅く，平面も不整形で，土坑と認定してよいかは確実ではないが，一応報告しておく。もっとも大きい場所で，南北軸2.85m，東西軸3.75mである。

376は回転糸切り離しの土師器小皿で，口径8.6cm，器高1.7cmである。**377**・**378**は土師器鍋Ⅲa類である。

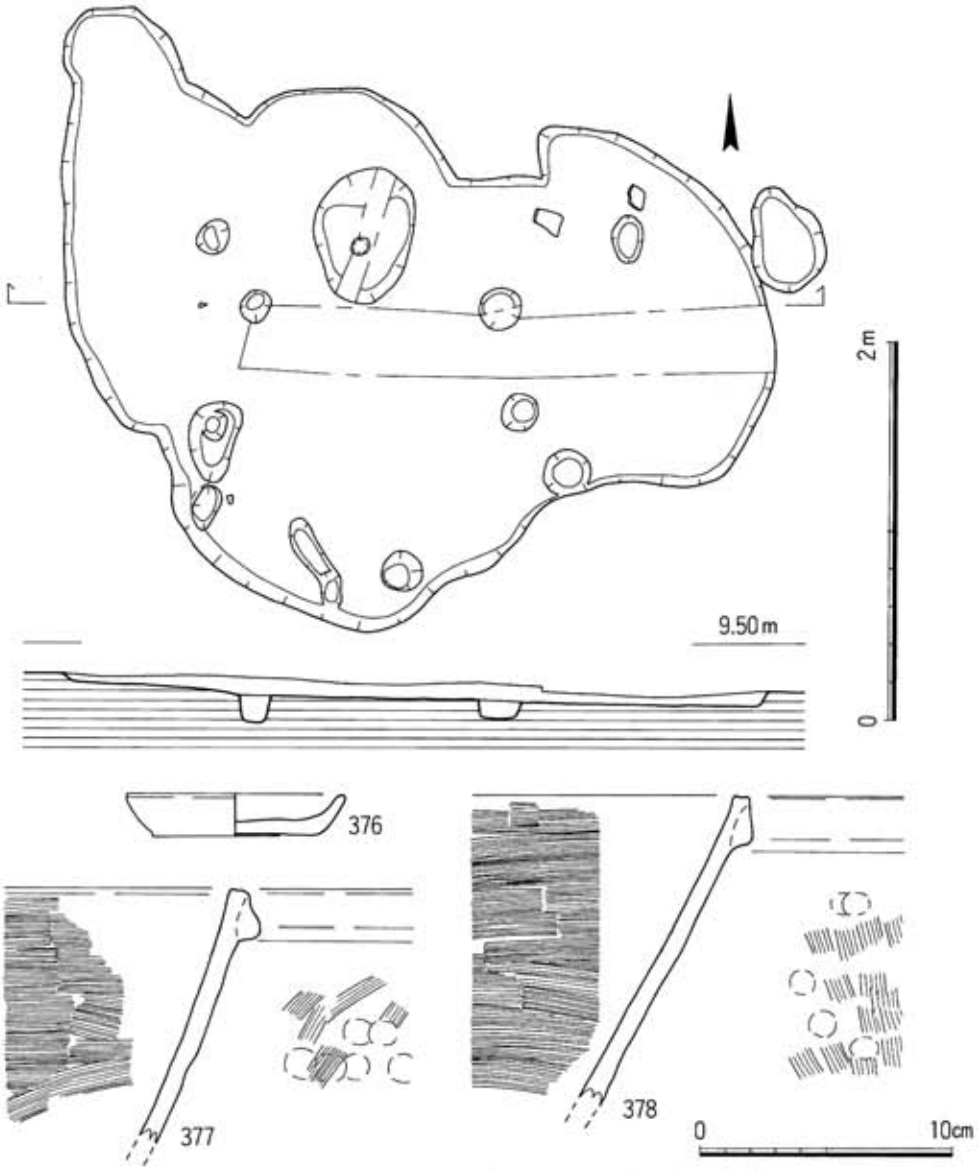


Fig. 59　ＳＫ165土坑（１／40），出土遺物（１／３）

ＳＫ178土坑（Fig. 60）

調査区西側拡張部に位置する。平面は細長い不整形で，長さ3.9m，幅0.65m，深さ0.4mである。底面は東側が低くなっているが，小穴との切合の可能性もある。土師器坏・小皿がまとまって出土している。

379は白磁皿で，復元口径9.6cmである。体部下半部は露胎である。**380**～**386**は回転糸切り離しの土師器小皿である。**380**は口径7.9cm，器高2.4cm，**381**は口径8.1cm，器高1.6cm，**382**は復元口径8.6cm，器高1.8cm，**383**は口径9.0cm，器高2.2cm，**384**は復元口径8.2cm，器高1.5cm，**385**は復元口径8.7cm，器高2.0cm，**386**は復元口径8.9cm，器高2.1cmである。**382**・**384**は口縁部の一部に煤が付着する。**387**～**389**は回転糸切り離しの土師器坏である。**387**は口径11.9cm，器高3.2cm，**388**は復元口径12.1cm，器高3.3cm，**389**は口径12.2cm，器高3.0cmである。図示したものの他に土師器鍋Ⅲａ類がある。

ＳＫ213土坑（Fig. 60）

調査区南東部に位置する。平面図では完掘したものかどうか判別できず，本来土坑であったかどうか明確

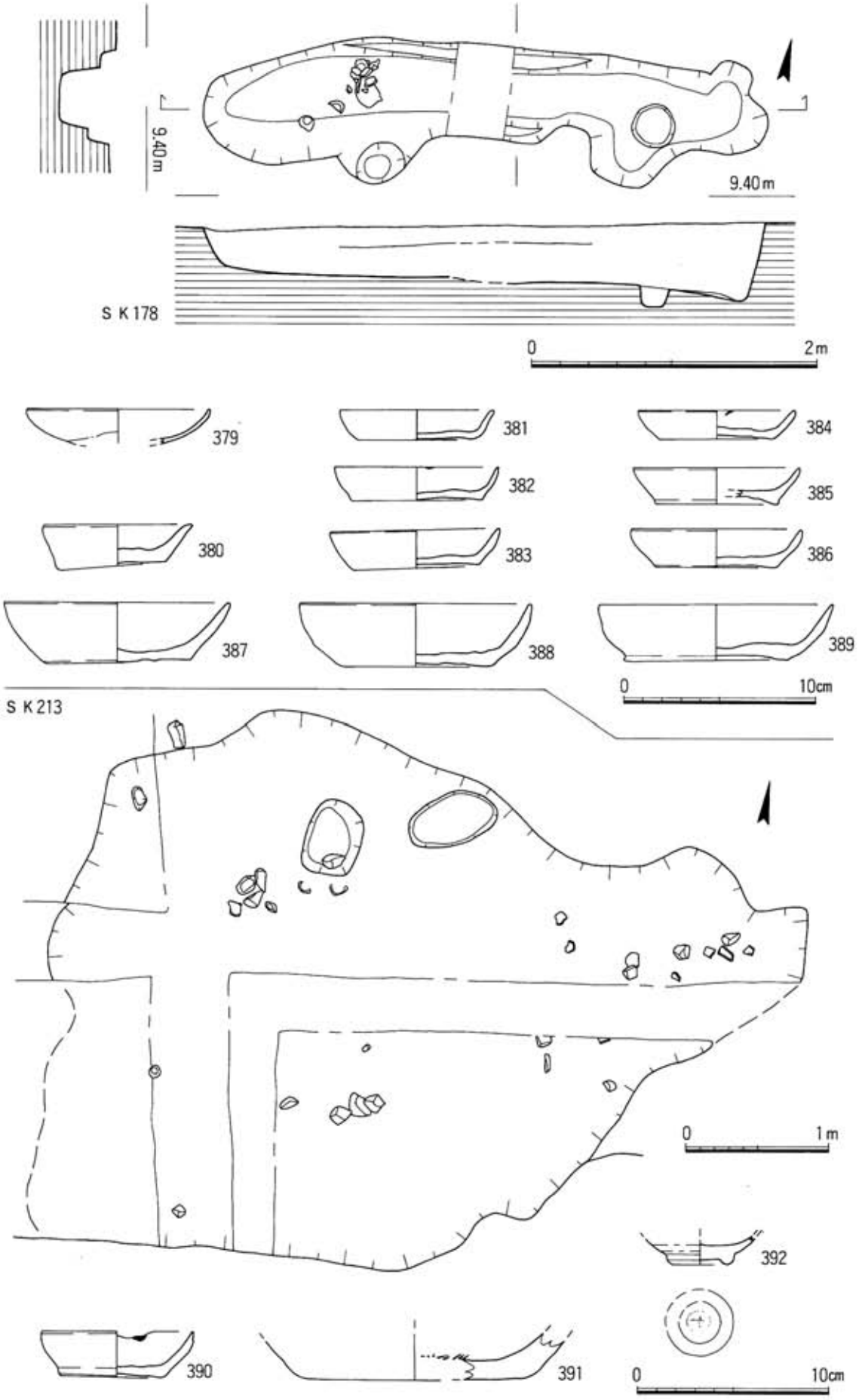


Fig. 60　SK178・213土坑（1／40），出土遺物（1／3）

ではない。平面図のみ図示しておく。他の遺構との切合関係もよくわからない。

390は回転糸切り離しの土師器小皿で，口径8.0cm，器高2.4cmである。口縁部の一部に煤が付着する。**391**は瓦器擂鉢である。**392**は白磁皿で，高台内部に記号と思われる墨書がある。図示したものの他に土師器鍋Ⅲａ類，瓦器椀，瓦器火鉢，龍泉窯系青磁椀Ⅰ－５－ｂ類，白磁椀などが出土している。

（４）その他の遺構と遺物

畑状遺構（Fig. 61）

調査区西側中央に位置する。長さ3.5～10.4ｍ，幅0.3～0.5ｍ，深さ0.02～0.15ｍの不定形な浅い溝が７～８列並んでいる。おそらく畑の痕跡であろう。平面実測図から判断すると，方形区画Ⅱ－１を構成するＳＤ155溝より新しいものと考えられる。細片のため図示していないが，土師器鍋Ⅲａ類などが出土している。なお，現地では溝ごとにＳＸ183～189・191～193，ＳＤ190として遺構番号が付されている。

ＳＰ241土坑墓（Fig. 62）

調査区中央部に位置する。現地では土坑墓と判断していないが，完形の黒色土器椀１点と土師器小皿２点が重なるように出土しており，副葬品の可能性が高いので，ここでは土坑墓として報告することにした。なお，時代的には古代後期であるが，紙面の都合により中世の項で報告する。深さは0.04ｍと非常に浅く，平面形は正確に判断することはできないが，長さ約1.6ｍ，幅約0.9ｍの長方形であろうか。また，本遺構のすぐ北側にも主軸方向は異なるものの，同じような規模の長方形の掘形が確認されており，これも副葬品をもたない土坑墓であった可能性がある。

393・**394**はヘラ切り離しの土師器小皿である。**393**は口径9.4cm，器高1.5cmで，底部外面に板状圧痕がみられる。**394**は口径9.8cm，器高1.7cmである。**395**は黒色土器Ｂ類椀で，口径15.1cm，器高6.0cmである。

ＳＥ201井戸（Fig. 63）

調査区中央部南西寄りに位置する。報告者は井戸にするには小規模で，深さも不足していると判断しているが，現地でＳＥという分類記号を付しているので，ここでは井戸として報告することにした。平面は不整形な長方形で，長軸0.96ｍ，短軸0.8ｍ，深さ0.72ｍである。前述のようにＳＢ177掘立柱建物と関連がある可能性が高い。細片のため図示していないが，内面に段をもつ土師器坏などが出土している。

小穴・検出面出土遺物（Fig. 64）

396は回転糸切り離しの土師器坏で，口径13.2cm，底径9.7cm，器高3.8cmである。体部内面下半部にハケメ状の工具痕がみられる。Ｐ713から出土した完形品である。**397**は国産陶器の水注の把手と思われるが，産地については不明である。胎土は暗灰色で，外面に灰釉がかけられる。ＳＤ101と注記があり，ＳＫ101土坑かＳＤ242溝の上層検出面から出土した。**398**は産地不明の須恵器で，壺ないしは鉢であろうか。調整はヨコナデで，灰白色を呈する。ＳＫ459土坑から出土しており，共伴遺物には同安窯系青磁椀，龍泉窯系青磁小椀？，白磁椀，瓦器椀などがある。**399**は朝鮮半島産陶器皿で，底径4.3cmである。全面に施釉され，内面と高台に目跡が５ヶ所みられる。古代のＳＫ132土坑上層の検出面から出土した。**400**は景徳鎮窯系染付椀で，検出面から出土した。**401**・**402**は輸入陶器天目椀で，体部外面下半部から底部外面は露胎である。**402**は復元口径11.8cm，器高7.4cmである。**401**はＰ106，**402**は検出面出土である。**403**は白磁水注か。復元口径9.6cmである。

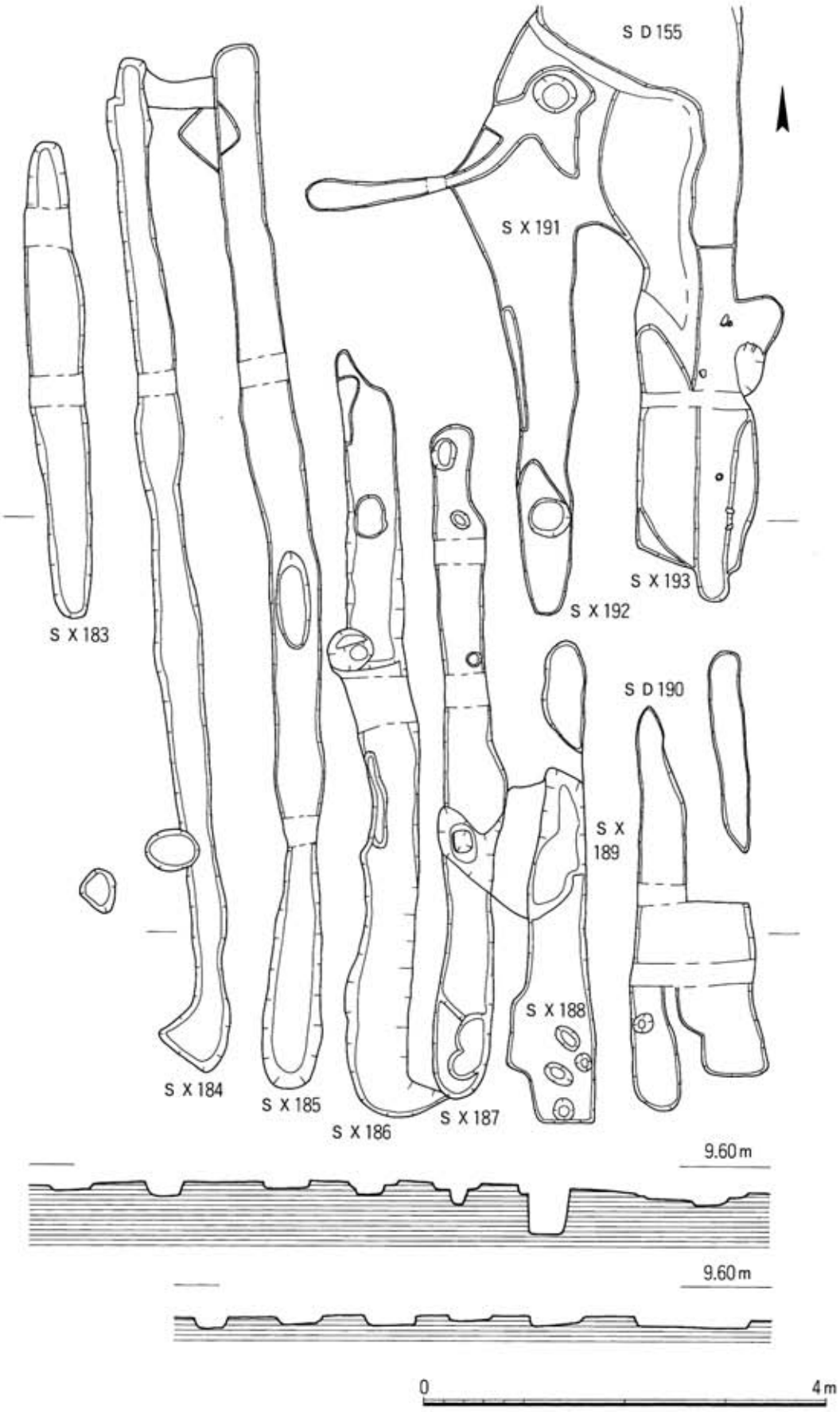


Fig. 61　畑状遺構（1／60）

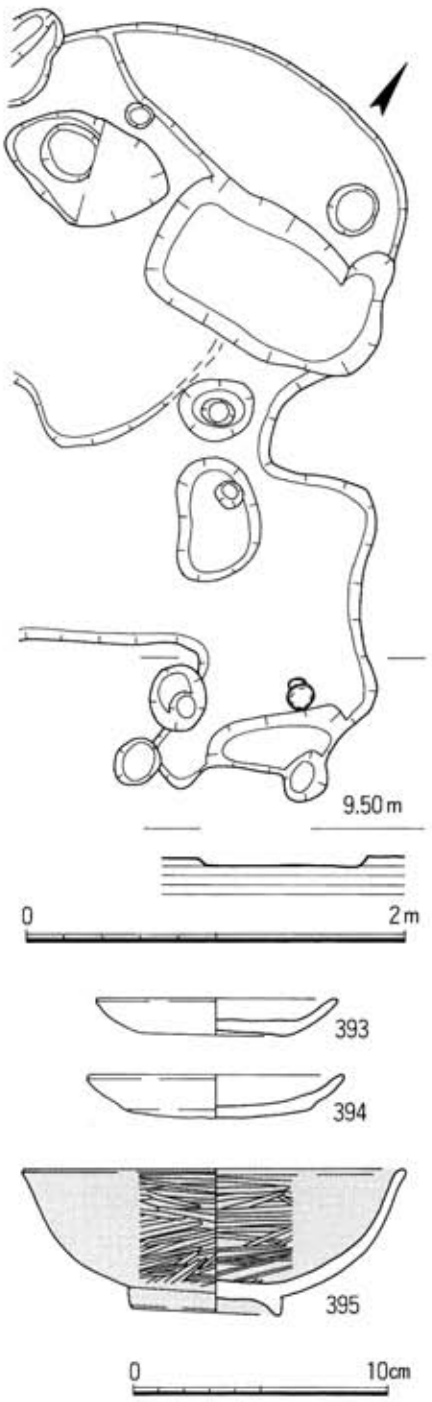


Fig. 62　ＳＰ241土坑墓（１／40），出土遺物（１／３）

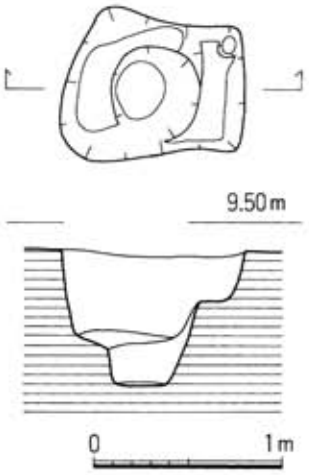


Fig. 63　ＳＥ201井戸（１／40）

404は皇宋通寳（初鋳1039年）で，銭径2.48～2.54cm，内径0.70～0.73cm，銭厚0.13cm，量目2.3gである。Ｐ69下層から出土した。**405**は太平通寳（初鋳976年）で，銭径2.43cm，内径0.61cm，銭厚0.11cm，量目1.5gである。Ｐ624下層から出土した。**406**は至道元寳（初鋳995年）で，銭径2.48～2.49cm，内径0.59cm，銭厚0.13cm，量目2.5gである。Ｐ662検出面から出土した。**407**は天聖元寳（初鋳1023年）で，銭径2.46～2.47cm，内径0.58～0.60cm，銭厚0.13cm，量目2.9gである。Ｐ704下層から出土した。**408**は聖宋元寳（初鋳1101年）で，銭径2.46～2.51cm，内径0.63～0.64cm，銭厚0.18cm，量目3.2gである。小穴下層から出土した。**409**は祥符元寳（初鋳1008年）で，銭径2.50～2.51cm，内径0.51～0.52cm，銭厚0.14cm，量目2.6gである。検出面から出土した。他にＰ43検出面から宋銭（聖宋元寳？），検出面から銅銭片が出土している。

410は鉄製刀子で，Ｐ657から出土した。共伴遺物に備前焼大甕片がある。**411**はガラス製丸玉である。径1.12cm，孔径0.2cm，厚さ1.1cmで，色調は緑色である。ＳＤ206溝（時期不明）から出土した。**412**は不明鉄製品である。表層の大部分が剥離しているので，形態については推定である。鉤状に曲げられた製品と考えられ，残存長4.1cm，径1.1cmである。ＳＫ158と注記があるが，日付から古代で報告した土坑ではなく，中世の別の土坑から出土したと考えられる。共伴遺物に白磁椀などがある。

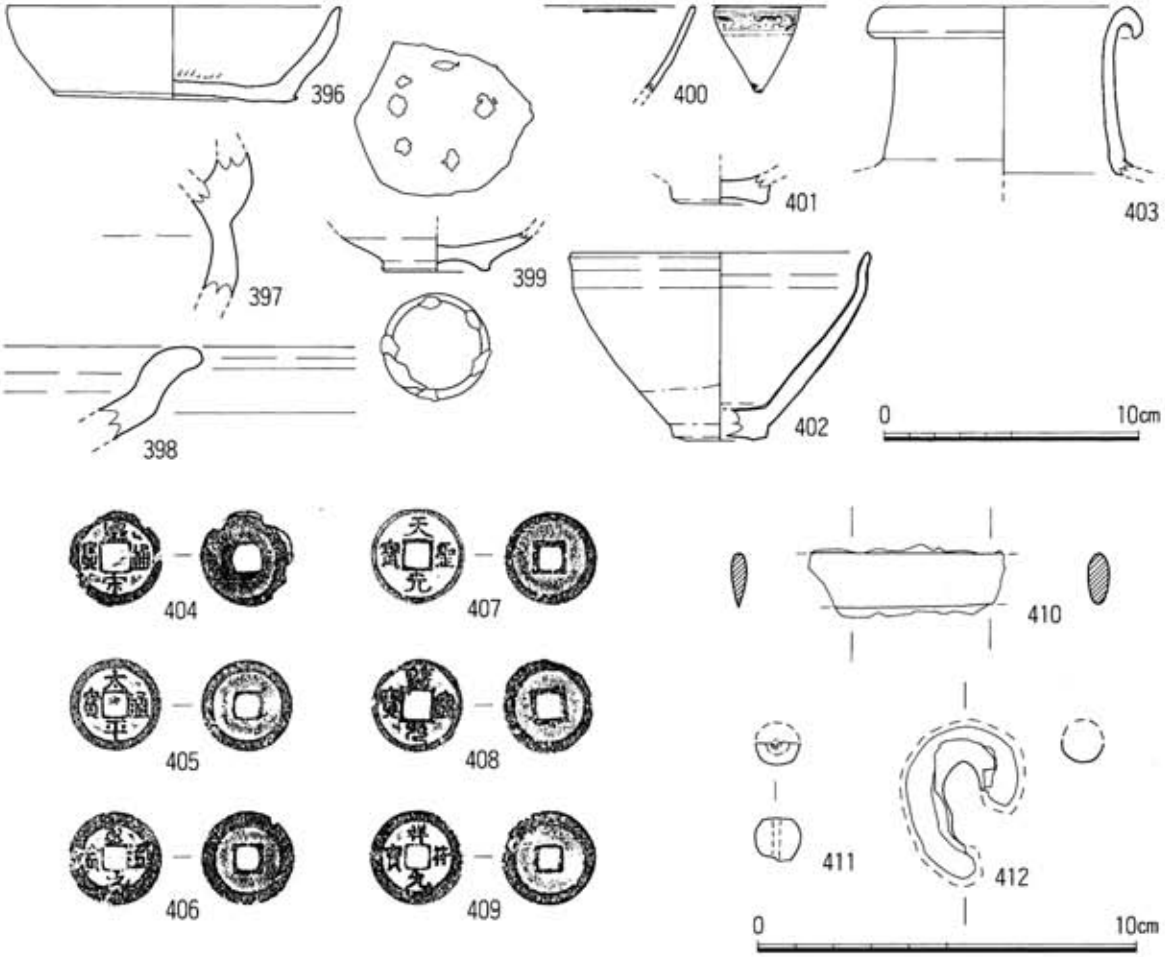


Fig. 64　小穴・検出面他出土遺物（396～403：1／3，404～412：1／2）

第4章　ま　と　め

1．弥生時代から古代

杉籠遺跡II区で確認された弥生時代の遺構は小穴がほとんどであるが，弥生土器は後期前半のものを中心として相当量出土している。残念ながら，弥生時代にどのように利用されたかは推測することができないが，土器にはローリングがあまりみられないことから，この場所で弥生人の何らかの営みがあったのであろう。

簾状文が施された壺や凹線文が施された器台といった外来系土器が出土していることは注目される。報告者の力量不足で，これらの土器がどの地域からの搬入品，あるいは模倣品なのかといったことを明らかにできなかったが，弥生時代終末期以前の外来系土器は佐賀平野においてもそれほど多くはなく，終末期以前における他地域との交流を知る上で貴重な資料である。遺跡の立地からみて，もしかすると田手川の水運に関係するのかもしれない。

古墳時代の遺構，遺物はかなり乏しい。布留式甕が出土しているが，弥生時代との連続性を考えた方がよいのかもしれず，古墳時代後期になってわずかに土坑1基が確認される程度である。

奈良・平安時代になると，廃棄土坑中心ではあるが，再び活発な人々の営みが展開されるようになる。明確な建物は確認されなかったが，ＳＫ112土坑などから出土した一括廃棄されたと考えられる土師器，須恵器や「志」とヘラ書きされた土師器，ＳＫ125土坑出土越州窯系青磁は注目されよう。第2章で述べたように神埼郡内の同時代の遺跡からは相当数の輸入陶磁器が出土しており，この地域の対外交渉が盛んであったことの裏付けになる資料と考えられる。また，中世の項で説明したＳＰ241土坑墓は大宰府編年[(1)]XII期に並行するものと考えられ，11世紀後半～12世紀初頭の年代が与えられよう。

さて，杉籠遺跡は大きくみれば，遺跡西側に所在する吉野ヶ里遺跡の一部ということができよう。いうまでもなく，吉野ヶ里遺跡は弥生時代最大級の環壕集落であり，また古代肥前国神埼郡の中心地でもある。これまで述べてきた弥生時代から古代の杉籠遺跡の動向は，吉野ヶ里遺跡の動向とよく符合している。今回の杉籠遺跡の調査成果は，吉野ヶ里遺跡について考える上でも重要なものである。

2．中世

今回の調査でもっとも大きな成果は，溝で区画された中世の屋敷地が確認されたことである。屋敷地全体が明らかとなったわけではないが，ある程度様相をとらえることができる。区画溝は切合関係からおおよそ3時期に分けられ，方形区画II－1→方形区画II－2→方形区画Ｉの順が考えられる。

方形区画II－1の段階はＳＤ102・155・166溝などで構成される時期で，ＳＤ155溝とＳＤ166溝が同時期に存在していたとすれば，南北に区画された空間が隣接して存在したことになる。ＳＤ211溝を区画溝と考えるならば南側の区画は南北約50ｍ，東西30ｍ以上の規模である。この区画に伴う掘立柱建物を明らかにすることはできないが，ＳＤ152溝とＳＤ153溝の間の掘立柱建物集中部には何回かの建て替えなどがあるものとみられるので，この時期の建物があったものと推定される。

方形区画II－2の段階はＳＤ102溝とその内部を区画すると考えられるＳＤ152・153溝などで構成される時期で，区画内区画に特徴があるといえよう。この段階の規模については推定することも難しいが，前段階に

比べ大規模になっているのではないだろうか。ＳＤ152溝とＳＤ153溝の間にある掘立柱建物群の状況を明らかにすることができなかったが，この区域が屋敷地内の主要な居住空間であったことは確実であろう。

方形区画Ｉの段階はＳＤ104・105・107溝で構成される。規模は南北56ｍ以上，東西30ｍ以上であるが，前段階に比べ縮小した感は否めない。方位が正方位に近く，ＳＢ175・176掘立柱建物やＳＢ177掘立柱建物などがこの時期の建物の可能性がある。このようにみてみると，方形区画II－２の段階がもっとも複雑な構造をもった時期であることが推測される。

出土遺物の特徴としては，龍泉窯系青磁盤が一定量出土すること，火鉢類が多いことなどがあげられる。盤の出土はこの屋敷地に住んだ人々の階層を考える上で重要であろう。なお，遺物の面からは区画ごとの格差はみられないようである。出土した輸入陶磁器は14世紀後半～15世紀前半のものが主体であり，16世紀後半に多量に流入する染付はほとんどみられない。在地土器の鍋は土師質のもの（徳永分類III類[2]）がほとんどで，土師器坏・小皿もおおよそ15世紀代の特徴を持っており，区画溝の年代は15世紀代を中心とするものであろう。ただ，ＳＫ142土坑出土資料のように大宰府編年XVI～XVII期に併行するものがあり，区画溝が成立する以前の集落の存在が考えられる。

このようにみると，この屋敷地に居住した人々は一般農民層とはいえず，より上位階層であったものと考えられ，そのピークは方形区画II－２の段階であったであろう。付近の遺跡と比較をしてみれば，やや時代がさかのぼるようであるが，東脊振村大曲Ａ遺跡[3]とは屋敷地の規模や出土遺物の点で格差が明らかである。16世紀代の吉野ヶ里遺跡志波屋六本松乙地区II区の屋敷地と比較しても，規模はやや大きい可能性が高く，遺物の点からも格差があるようである[4]。階層差が屋敷地の様相に表れているものと推測される。

さて，調査区の南側約300ｍの地点に所在する東妙寺との関係について少しふれておく。東妙寺は弘安年間（1278～1287年）に異国降伏祈願のため建立された奈良西大寺の末寺で，東妙寺に残された文書（『東妙寺文書』）によればその勢力が大きかったことが知られている。建武２（1335）年における東妙寺・妙法寺の寺領は田地91ヶ所（49町９反），畠地13ヶ所（１町７反４丈），屋敷10ヶ所，荒地６ヶ所とある。しかし，南北朝の動乱期には力の弱い寺社領では濫妨狼藉が多発しており，応永12（1405）年には動乱により東妙寺が衰退することを嘆く旨の文書が残されており，15世紀代には勢力が弱くなっていることがうかがえる。杉籠遺跡の屋敷地が成立し，存続した時期にはこのような状況であり，東妙寺の勢力と直接結びつけるのは難しく，むしろ在地有力者との関係を想定した方がよいのではないだろうか。

以上のように，今回の調査で多岐にわたる問題点が提起されたと考えられる。しかしながら，力不足から貴重な成果を十分にまとめきれなかった。今後の課題としたい。なお，出土遺物に関しては大橋康二氏，徳永貞紹氏からさまざまなご教示を頂いた。記して感謝いたします。

〈註〉

1．山本信夫「統計上の土器－歴史時代土師器の編年研究によせて－」『九州上代文化論集』　1990

2．徳永貞紹「肥前における中世後期の在地土器」『中近世土器の基礎研究』VI　1990

3．東脊振村教育委員会『大曲遺跡群II』東脊振村文化財調査報告書第９集　1985

4．原直樹「吉野ヶ里遺跡（志波屋六の坪乙II区）」『佐賀県文化財年報』１　1996

遺物は吉野ヶ里遺跡発掘調査事務所において整理途中である。なお，本来ならばそれぞれの図面を提示して比較すべきであるが，紙面の都合上できなかった。ご了承願いたい。

Tab. 2　遺物一覧表

Fig.－番号	出土遺構	種　別	器　種	色　　調	備　　考	登録番号
4－　1	ＳＫ218	土師器	坏	淡褐色		99003000
5－　2	Ｐ597	弥生土器	複合口縁壺	淡褐色		99003139
3	Ｐ597	弥生土器	甕	明褐色		00002671
4	Ｐ598	弥生土器	複合口縁壺	淡褐色		99003140
5	Ｐ661	弥生土器	複合口縁壺	明褐色	外面に黒斑あり	00002663
6	Ｐ661	弥生土器	甕	明褐色		00002664
7	Ｐ661	弥生土器	甕	外面：明褐色／内面：淡褐色		00002665
6－　8	ＳＫ124	弥生土器	壺	淡褐色	簾状文	00003444
9	Ｐ765	弥生土器	壺	淡褐色	外面丹塗り	00002672
10	表採	石製品	石包丁	赤灰色		00002654
11	検出面	ガラス製品	小玉	ライトブルー		00002652
12	検出面	弥生土器？	鉢	明黄褐色	編み籠圧痕	99003146
13	Ｐ839	土製品	土玉	明～淡褐色		00002651
14	Ｐ470	弥生土器	壺	淡黄褐色		00002669
15	Ｐ470	弥生土器	甕	淡褐色		00002668
16	Ｐ547	弥生土器	器台	淡褐色	凹線文	00002670
17	Ｐ467	弥生土器	鉢	明褐色		00002666
18	Ｐ467	弥生土器	鉢	明褐色		00002667
19	Ｐ215	土師器	甕	淡褐色	外面一部煤付着	00002673
20	Ｐ776	土師器	甕	淡褐色		00002674
8－　21	ＳＫ108	須恵器	蓋	灰色	注記：ＳＫ117	99002883
22	ＳＫ108	須恵器	蓋	灰色		99002758
23	ＳＫ108	須恵器	坏	灰色		99002757
24	ＳＫ108	須恵器	坏	明褐色～にぶい橙色		99002874
25	ＳＫ108	須恵器	高台付坏	灰色		99002756
26	ＳＫ108	須恵器	皿	灰色		99002873
27	ＳＫ108	須恵器	高坏	灰色		99002759
28	ＳＫ108	土師器	坏	淡褐色	注記：ＳＫ117	99002885
29	ＳＫ108	土師器	坏	明褐色	注記：ＳＫ117	99002884
30	ＳＫ108	土師器	甕	外面：淡褐色／内面：暗褐色	注記：ＳＫ117	99002887
31	ＳＫ108	土師器	甕	明黄褐色		99002754
32	ＳＫ108	土師器	甕	明黄褐色		99002755
33	ＳＫ108	土師器	甕	淡褐色	注記：ＳＫ117	99002886
34	ＳＫ108	土師器	甕	明褐色		99002872
9－　35	ＳＫ110	須恵器	蓋	灰色		99002780
36	ＳＫ110	須恵器	蓋	灰色		99002781
37	ＳＫ110	須恵器	蓋	灰色		99002782
38	ＳＫ110	須恵器	蓋	灰色		99002770
39	ＳＫ110	須恵器	壺	暗灰色		99002768
40	ＳＫ110	須恵器	高台付坏	灰色		99002776
41	ＳＫ110	須恵器	坏	灰色		99002778
42	ＳＫ110	須恵器	坏	灰色		99002777
43	ＳＫ110	須恵器	坏	灰白色		99002779
44	ＳＫ110	須恵器	皿	灰色		99002785
45	ＳＫ110	須恵器	高坏	灰～緑灰色		99002783
46	ＳＫ110	須恵器	高坏	灰色（内面一部灰白色）		99002769
47	ＳＫ110	須恵器	高坏	灰色		99002784
48	ＳＫ110	土師器	蓋	明褐色		99002765
49	ＳＫ110	土師器	高台付坏	明褐色		99002771
50	ＳＫ110	土師器	高坏	明褐色		99002766
10－　51	ＳＫ110	土師器	甕	外面：明褐色／内面：暗褐色		99002772
52	ＳＫ110	土師器	甕	明褐色		99002774
53	ＳＫ110	土師器	甕	淡～暗褐色		99002775
54	ＳＫ110	土師器	甕	明褐色		99002761
55	ＳＫ110	土師器	甕	明褐色		99002760
56	ＳＫ110	土師器	把手	明褐色		99002767
57	ＳＫ110	土師器	坏	明褐色		99002762
58	ＳＫ110	土師器	坏	明褐色		99002763
59	ＳＫ110	土師器	坏	明褐色	外面に黒斑あり	99002764
60	ＳＫ110	須恵器	蓋坏	灰色		99002773
11－　61	ＳＫ111	須恵器	坏	明赤灰色		99002790
62	ＳＫ111	須恵器	坏	灰色		99002791
63	ＳＫ111	須恵器	蓋	灰色		99002795
64	ＳＫ111	須恵器	高台付坏	灰色		99002788
65	ＳＫ111	須恵器	高台付坏	灰色		99002787
66	ＳＫ111	須恵器	高台付坏	灰色		99002786
67	ＳＫ111	須恵器	皿	明緑灰色		99002789
68	ＳＫ111	須恵器	皿	灰色		99002793
69	ＳＫ111	土師器	高台付皿	明黄褐色		99002794

Fig.－番号	出土遺構	種　別	器　種	色　　調	備　　考	登録番号
70	ＳＫ111	土師器	甕	外面：褐色／内面：暗褐色		99002800
71	ＳＫ111	土師器	甕	淡褐色		99002801
13－　72	ＳＫ112	須恵器	蓋	灰色		99002817
73	ＳＫ112	須恵器	蓋	灰色		99002809
74	ＳＫ112	須恵器	蓋	灰色		99002802
75	ＳＫ112	須恵器	蓋	灰色		99002806
76	ＳＫ112	須恵器	蓋	灰色		99002803
77	ＳＫ112	須恵器	蓋	灰色		99002811
78	ＳＫ112	須恵器	蓋	赤灰色		99002812
79	ＳＫ112	須恵器	蓋	黄灰色（一部赤褐色）		99002813
80	ＳＫ112	須恵器	蓋	灰色		99002805
81	ＳＫ112	須恵器	蓋	灰色		99002807
82	ＳＫ112	須恵器	蓋	灰色		99002814
83	ＳＫ112	須恵器	蓋	灰白～灰色		99002815
84	ＳＫ112	須恵器	蓋	灰色		99002808
85	ＳＫ112	須恵器	蓋	灰色		99002810
86	ＳＫ112	須恵器	蓋	灰色		99002816
87	ＳＫ112	須恵器	高台付坏	灰色		99002820
88	ＳＫ112	須恵器	高台付坏	灰色		99002823
89	ＳＫ112	須恵器	高台付坏	灰色		99002819
90	ＳＫ112	須恵器	高台付坏	灰色		99002828
91	ＳＫ112	須恵器	高台付坏	灰色		99002822
92	ＳＫ112	須恵器	高台付坏	灰色		99002825
93	ＳＫ112	須恵器	高台付坏	青灰色		99002818
94	ＳＫ112	須恵器	高台付坏	灰色		99002826
95	ＳＫ112	須恵器	高台付坏	褐色		99002827
96	ＳＫ112	須恵器	高台付坏	灰色		99002821
97	ＳＫ112	須恵器	高台付坏	灰色		99002824
14－　98	ＳＫ112	須恵器	高坏	灰色		99002833
99	ＳＫ112	須恵器	高坏	灰色・灰白色		99002831
100	ＳＫ112	須恵器	坏	にぶい赤褐色		99002830
101	ＳＫ112	須恵器	皿	青灰色		99002829
102	ＳＫ112	須恵器	壺	外面：灰赤色／内面：明褐～褐色		99002834
15－ 103	ＳＫ112	土師器	蓋	明褐色		99002839
104	ＳＫ112	土師器	蓋	明褐色		99002838
105	ＳＫ112	土師器	蓋	明褐色		99002840
106	ＳＫ112	土師器	蓋	明褐色		99002859
107	ＳＫ112	土師器	高台付坏	淡褐色		99002856
108	ＳＫ112	土師器	高台付坏	赤褐色		99002860
109	ＳＫ112	土師器	坏	褐色		99002855
110	ＳＫ112	土師器	高台付皿	赤褐色		99002857
111	ＳＫ112	土師器	高坏	明褐色		99002841
112	ＳＫ112	土師器	高坏	明褐色		99002866
113	ＳＫ112	土師器	高坏	明褐色		99002837
114	ＳＫ112	土師器	高坏	明褐色		99002836
115	ＳＫ112	土師器	高坏	明褐色		99002868
116	ＳＫ112	土師器	高台付鉢	褐色		99002867
16－ 117	ＳＫ112	土師器	坏	黄褐色		99002863
118	ＳＫ112	土師器	坏	明褐色		99002853
119	ＳＫ112	土師器	坏	外面：褐～明褐色／内面：明褐色		99002850
120	ＳＫ112	土師器	坏	外面：明褐色／内面：淡明褐色		99002852
121	ＳＫ112	土師器	坏	淡褐色		99002862
122	ＳＫ112	土師器	坏	明褐色		99002854
123	ＳＫ112	土師器	坏	外面：淡黄色／内面：淡褐色		99002861
124	ＳＫ112	土師器	坏	明褐色		99002858
125	ＳＫ112	土師器	坏	外面：褐～淡褐色／内面：褐色		99002851
126	ＳＫ112	土師器	坏	淡褐色		99002864
127	ＳＫ112	土師器	坏	淡褐色		99002849
128	ＳＫ112	土師器	甕	明褐色		99002871
129	ＳＫ112	土師器	甕	褐色		99002869
130	ＳＫ112	土師器	甕	外面：明褐色／内面：灰白色		99002844
131	ＳＫ112	土師器	甕	明褐色	外面に黒斑あり	99002843
132	ＳＫ112	土師器	甕	淡褐色		99002870
17－ 133	ＳＫ112	土師器	鉢	淡褐色（内面一部黒褐色）		99002846
134	ＳＫ112	土師器	鉢	外面：淡褐色／内面：明～暗褐色		99002845
135	ＳＫ112	土師器	甕	褐色		99002848
136	ＳＫ112	土師器	甕	褐色		99002847
18－ 137	ＳＫ125	青磁	椀か皿	胎土：灰白色	越州窯系	00002684
138	ＳＫ125	土師器	椀	明褐色		00002675

Fig.－番号	出土遺構	種　別	器　種	色　　調	備　　考	登録番号
19－ 139	ＳＫ127	土師器	坏	明褐色	注記：ＳＫ124	99002889
140	ＳＫ127	土師器	椀	明～淡褐色	注記：ＳＫ124	99002888
141	ＳＫ127	須恵器	大甕	外面：灰色／内面：赤灰～灰色		99002908
20－ 142	ＳＫ132	須恵器	蓋	灰色		99002912
143	ＳＫ132	須恵器	蓋	灰白色		99002911
144	ＳＫ132	須恵器	高台付坏	灰色		99002909
145	ＳＫ132	須恵器	坏	灰白色		99002910
146	ＳＫ132	土師器	坏	外面：明～淡褐色／内面：明褐色		99002913
147	ＳＫ132	土師器	高坏	淡褐色		99002914
148	ＳＫ132	土師器	甕	外面：明褐色／内面：暗褐色		99002917
149	ＳＫ132	土師器	甕	外面：淡褐色／内面：明褐色		99002916
150	ＳＫ132	土師器	鉢	外面：暗褐色／内面：褐色		99002915
151	ＳＫ132	瓦	平瓦	外面：明褐色／内面：灰白色		99002918
21－ 152	ＳＫ156	須恵器	壺	暗灰～灰色		99002943
153	ＳＫ156	須恵器	坏	外面：灰色／内面：暗灰色		99002944
154	ＳＫ156	土師器	坏	明褐色		99002941
155	ＳＫ156	土師器	甕	淡褐色		99002939
156	ＳＫ156	土師器	甕	淡褐色		99002940
22－ 157	ＳＫ158	須恵器	高坏	にぶい赤褐色（内面一部明褐色）		99002957
158	ＳＫ158	須恵器	蓋	暗灰色		99002956
159	ＳＫ158	須恵器	蓋	灰色		99002955
160	ＳＫ158	須恵器	坏	暗灰色（口縁部一部灰色）		99002949
161	ＳＫ158	須恵器	坏	灰色		99002950
162	ＳＫ158	須恵器	坏	灰色(体部下半部～底部：暗灰色)		99002951
163	ＳＫ158	須恵器	皿	灰色		99002953
164	ＳＫ158	須恵器	皿	灰色		99002954
165	ＳＫ158	須恵器	椀	明赤灰色		99002952
166	ＳＫ158	土師器	坏	外面：明褐色／内面：淡褐色		99002948
167	ＳＫ158	土師器	坏	外面：淡褐色／内面：明褐色		99002947
168	ＳＫ158	土師器	甕	淡褐色		99002946
169	ＳＫ158	土師器	甕	淡褐色		99002945
23－ 170	ＳＫ162	須恵器	蓋	灰色		99002966
171	ＳＫ162	須恵器	高台付坏	灰色		99002964
172	ＳＫ162	須恵器	高坏	灰～暗灰色		99002967
173	ＳＫ162	土師器	坏	明褐色・淡褐色		99002963
174	ＳＫ162	土師器	坏	淡褐色		99002961
175	ＳＫ162	土師器	坏	淡褐色		99002962
176	ＳＫ162	土師器	坏	淡褐色		99002960
177	ＳＫ162	土師器	蓋	外面：褐色／内面：淡褐色		99002965
178	ＳＫ162	土師器	高坏	外面：明黄褐色／内面：淡褐色		99002968
179	ＳＫ162	土師器	甕	明黄褐色		99002959
180	ＳＫ162	土師器	甕	淡褐色		99002958
181	ＳＫ162	土師器	甑	明黄褐色	外面に黒斑あり	99002969
24－ 182	ＳＫ163	土師器	椀	淡褐色		99002970
183	ＳＫ164	須恵器	蓋	灰白色		99002972
184	ＳＫ164	須恵器	高台付坏	外面：灰白色／内面：灰色		99002971
185	ＳＫ164	土師器	高坏	明褐色		99002976
186	ＳＫ164	土師器	高台付坏	明褐色		99002973
187	ＳＫ164	土師器	坏	淡褐色		99002975
188	ＳＫ164	土師器	坏	淡褐色		99002974
189	ＳＫ164	土師器	甕	褐色		99002777
190	ＳＫ164	土師器	甕	明褐色		99002778
25－ 191	ＳＫ199	須恵器	蓋	灰色		99002993
192	ＳＫ199	須恵器	高台付坏	灰色		99002994
193	ＳＫ199	土師器	甕	明黄褐色(口縁部内面一部暗褐色)		99002995
194	ＳＫ199	土師器	甕	淡褐色		99002996
26－ 195	検出面	土師器	坏	明褐色	注記：Ｐ876	00002679
196	検出面	土師器	甕	外面：褐色／内面：明褐色	注記：Ｐ864	99003141
197	検出面	土師器	甑	明褐色	注記：Ｐ864	99003142
29－ 198	ＳＤ104	白磁	皿	胎土：灰白色		99003032
199	ＳＤ104	瓦器	火鉢	暗灰色		99003033
200	ＳＤ104	土師器	鍋	明褐色		99003030
201	ＳＤ104	土師器	鍋	明褐色	外面煤付着	99003031
202	ＳＤ107	土師器	小皿	灰白色		99003029
203	ＳＤ107	土師器	小皿	灰～灰白色		99003028
204	ＳＤ105	土師器	小皿	灰色	平面八角形	99003042
205	ＳＤ105	土師器	小皿	淡褐色		99003034
206	ＳＤ105	土師器	小皿	淡褐色		99003040
207	ＳＤ105	土師器	小皿	淡褐色		99003038

Fig.－番号	出土遺構	種　別	器　種	色　　調	備　　考	登録番号
208	ＳＤ105	土師器	小皿	淡褐色		99003041
209	ＳＤ105	土師器	小皿	明黄褐色		99003036
210	ＳＤ105	土師器	小皿	明黄褐色		99003035
211	ＳＤ105	土師器	小皿	淡褐色		99003037
212	ＳＤ105	土師器	小皿	明褐色		99003039
213	ＳＤ105	土師器	坏	外面：暗褐色／内面：淡褐色		99003043
214	ＳＤ105	土師器	坏	灰白色		99003046
215	ＳＤ105	土師器	坏	灰白色		99003045
216	ＳＤ105	土師器	坏	灰白色		99003044
217	ＳＤ105	土師器	鍋	暗褐色		99003047
218	ＳＤ105	土師器	鍋	淡褐色	外面煤付着	99003048
219	ＳＤ105	瓦器	火鉢	暗褐色		99003052
220	ＳＤ105	瓦器	火鉢	灰色		99003051
221	ＳＤ105	瓦器	火鉢	外面：淡褐色／内面：褐色		99003053
222	ＳＤ105	瓦器	火鉢	外面：明黄褐色／内面：淡赤褐色		99003059
223	ＳＤ105	瓦器	火鉢	暗褐色		99003049
224	ＳＤ105	瓦器	火鉢	灰褐色		99003054
225	ＳＤ105	瓦器	火鉢	脚部：淡褐色／内面：暗灰色		99003050
30－ 226	ＳＤ105	陶器	大甕	にぶい赤褐色	備前	99003056
227	ＳＤ105	陶器	擂鉢？	外面：赤灰色／内面：灰赤色	備前	99003057
228	ＳＤ105	陶器	擂鉢	橙色	備前	99003058
229	ＳＤ105	青磁	皿	胎土：灰白色	龍泉窯系	99003064
230	ＳＤ105	白磁	水注？	胎土：灰白色		99003066
231	ＳＤ105	青磁	盤	胎土：灰白色	龍泉窯系	99003061
232	ＳＤ105	青磁	盤	胎土：灰白色	龍泉窯系	99003060
233	ＳＤ105	青白磁	皿	胎土：灰白色		99003065
234	ＳＤ105	青磁	椀	胎土：灰白色	龍泉窯系	99003062
235	ＳＤ105	青磁	椀	胎土：灰白色	龍泉窯系	99003063
32－ 236	ＳＤ102	土師器	小皿	灰白色	内面に赤色顔料	99003022
237	ＳＤ102	土師器	小皿	淡明褐色		99003021
238	ＳＤ102	瓦器	茶釜	暗褐色		99003023
239	ＳＤ102	青磁	水注	胎土：灰白色	越州窯系	00002686
240	ＳＤ102	白磁	椀	胎土：灰白色		99003025
241	ＳＤ102	青磁	皿	胎土：灰白色	龍泉窯系	99003026
242	ＳＤ102	石製品	滑石製石鍋	灰白色	外面煤付着	99003027
243	ＳＤ102	瓦器	火鉢	外面：灰色／内面：暗灰色		99003017
244	ＳＤ102	瓦器	羽釜	外面：黒色／内面：灰色		99003015
245	ＳＤ102	瓦器	鉢か擂鉢	灰色		99003016
246	ＳＤ102	須恵器	壺	灰色		99003014
247	ＳＤ102	須恵器	壺	灰色		99003013
248	ＳＤ102	土師器	擂鉢	外面：明褐色／内面：褐～暗褐色		99003024
249	ＳＤ102	土師器	鍋	明褐色		99003019
250	ＳＤ102	土師器	鍋	明褐色		99003020
251	ＳＤ102	土師器	鍋	明褐色		99003018
33－ 252	ＳＤ155	土師器	小皿	褐色（底部外面暗褐色）		99003078
253	ＳＤ155	土師器	小皿	褐色		99003077
254	ＳＤ155	土師器	小皿	褐色		99003085
255	ＳＤ155	土師器	小皿	明褐色		99003084
256	ＳＤ155	土師器	小皿	褐色（内面一部暗褐色）		99003082
257	ＳＤ155	土師器	小皿	明褐色		99003086
258	ＳＤ155	土師器	小皿	灰白色	平面八角形	99003079
259	ＳＤ155	土師器	小皿	淡褐色		99003120
260	ＳＤ155	土師器	小皿	明～暗褐色		99003083
261	ＳＤ155	土師器	小皿	灰白色		99003087
262	ＳＤ155	土師器	坏	灰白色		99003094
263	ＳＤ155	土師器	坏	灰白色		99003091
264	ＳＤ155	土師器	坏	灰白色		99003090
265	ＳＤ155	土師器	坏	灰白色		99003095
266	ＳＤ155	土師器	坏	灰白色		99003093
267	ＳＤ155	土師器	坏	灰白色（一部黒褐色）		99003092
268	ＳＤ155	土師器	鍋	暗褐色		99003112
269	ＳＤ155	土師器	鍋	淡褐色		99003113
270	ＳＤ155	土師器	鍋	淡褐色		99003109
34－ 271	ＳＤ155	土師器	鍋	明褐色		99003110
272	ＳＤ155	土師器	鍋	淡褐色	外面煤付着	99003111
273	ＳＤ155	土師器	鍋	褐～暗褐色		99003119
274	ＳＤ155	土師器	鍋	暗褐色		99003148
275	ＳＤ155	土師器	鍋	淡黄褐色	外面煤付着	99003116
35－ 276	ＳＤ155	土師器	鍋	淡明褐色（一部黒褐色）	外面煤付着	99003118

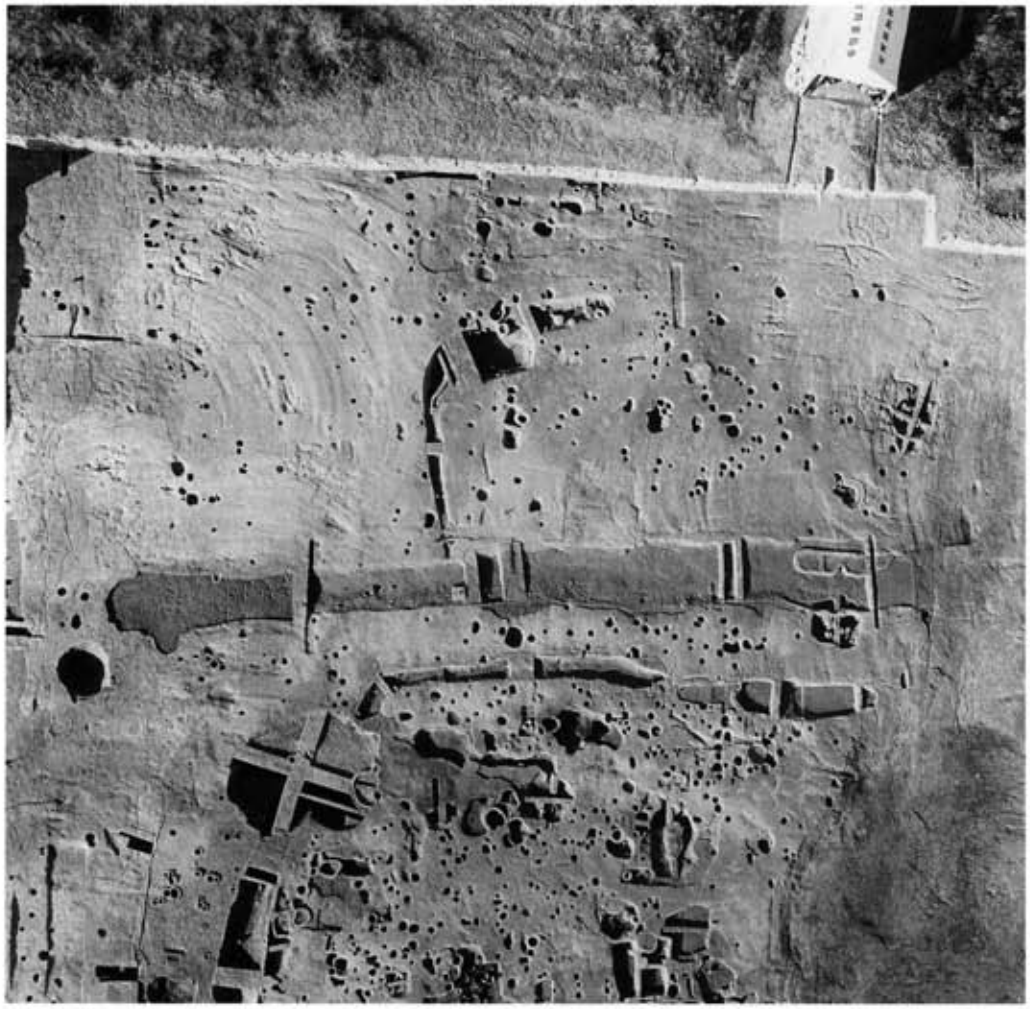
Fig.－番号	出土遺構	種　別	器　種	色　　調	備　　考	登録番号
277	ＳＤ155	瓦器	茶釜	外面：暗～黒褐色／内面：淡褐色		99003099
278	ＳＤ155	瓦器	茶釜	暗灰色		99003117
279	ＳＤ155	瓦器	茶釜	暗褐色		99003096
280	ＳＤ155	瓦器	茶釜	外面：黒褐色／内面：淡褐色		99003098
281	ＳＤ155	瓦器	茶釜	外面：暗褐色／内面：淡褐色	外面煤付着	99003097
36－ 282	ＳＤ155	白磁	坏	胎土：灰白色	墨書，平面八角形	99003108
283	ＳＤ155	青磁	皿	胎土：灰白色	龍泉窯系	99003107
284	ＳＤ155	青磁	椀	胎土：灰白色	龍泉窯系	99003104
285	ＳＤ155	青磁	椀	胎土：灰白色	龍泉窯系	99003106
286	ＳＤ155	青磁	椀	胎土：灰白色	龍泉窯系	99003105
287	ＳＤ155	青磁	盤	胎土：橙色	龍泉窯系	99003102
288	ＳＤ155	青磁	盤	胎土：灰白色	龍泉窯系	99003100
289	ＳＤ155	青磁	盤	胎土：灰白色	龍泉窯系	99003101
290	ＳＤ155	青磁	椀	胎土：明褐灰色	越州窯系	99003103
291	ＳＤ155	瓦	軒丸瓦	灰色		99003115
292	ＳＤ155	瓦器	擂鉢	暗灰色		99003089
293	ＳＤ155	瓦器	擂鉢	灰色		99003121
294	ＳＤ155	土師器	擂鉢	明褐色		99003088
37－ 295	ＳＤ152	瓦器	椀	外面：浅黄色／内面：灰白色		99003072
296	ＳＤ152	白磁	椀	胎土：白～灰白色		99003073
297	ＳＤ152	石製品	ミニチュア	灰色	外面煤付着	99003074
298	ＳＤ153	土師器	小皿	明褐色	検出面出土	99003075
299	ＳＤ153	土師器	坏	褐色	検出面出土	99003076
300	ＳＤ179	土師器	小皿	明褐色		99003129
301	ＳＤ179	土師器	小皿	明褐色		99003130
302	ＳＤ222	土師器	坏	淡褐色		99003137
303	ＳＤ182	土師器	小皿	灰白色		99003131
304	ＳＤ182	土師器	小皿	淡明褐色		99003133
305	ＳＤ182	土師器	小皿	黒褐色		99003134
306	ＳＤ182	土師器	小皿	淡明褐色		99003132
307	ＳＤ166	瓦器	擂鉢	黒褐色（一部明～淡褐色）		99003123
308	ＳＤ166	土師器	鍋	暗褐色	外面煤付着	99003122
309	ＳＤ166	土師器	小皿	淡褐色		99003125
310	ＳＤ166	土師器	小皿か坏	淡～暗褐色		99003124
311	ＳＤ166	白磁	小椀？	胎土：灰白色		99003126
312	ＳＤ166	青磁	椀	胎土：灰白色	龍泉窯系	99003128
313	ＳＤ166	青磁	盤	胎土：灰白色	龍泉窯系	99003127
314	ＳＤ166	木製品	曲物			00001725
50－ 315	ＳＢ172	土師器	小皿	淡褐色		00003441
316	ＳＢ172	土師器	小皿	淡褐色		00003443
317	ＳＢ172	土師器	小皿	明褐色		00003438
318	ＳＢ172	土師器	小皿	明褐色		00003439
319	ＳＢ172	土師器	坏	褐色		00003440
320	ＳＡ230	土師器	鍋	外面：暗褐色／内面：淡褐色		00003448
321	ＳＡ230	土師器	小皿	外面：明褐色／内面：淡褐色		00003442
322	ＳＡ230	青磁	椀	胎土：明褐灰色	龍泉窯系	00003447
323	ＳＢ237	土師器	小皿	淡褐色		00003435
324	ＳＢ237	土師器	小皿	淡褐色		00003437
325	ＳＢ237	土師器	坏？	淡褐色		00003436
326	ＳＢ228	土師器	鍋	外面：暗褐色／内面：淡褐色		00003449
52－ 327	ＳＫ100	瓦器	羽釜	黒褐色		99002751
328	ＳＫ100	土師器	鍋	外面：淡～暗褐色／内面：淡褐色		99002752
329	ＳＫ100	土師器	鍋	外面：暗褐色／内面：淡褐色	外面煤付着	99002753
330	ＳＫ101	土師器	鍋	暗灰色		99003005
331	ＳＫ101	土師器	鍋	灰色		99003004
332	ＳＫ101	土師器	鍋	外面：暗褐色／内面：淡褐色		99003006
333	ＳＫ101	土師器	鍋	暗褐色	外面煤付着	99003003
334	ＳＫ101	土師器	鍋	外面：暗褐色／内面：淡褐色		99003007
53－ 335	ＳＫ101	土師器	小皿	灰色		99003008
336	ＳＫ101	白磁	皿	胎土：灰白色		99003009
337	ＳＫ101	青磁	椀	胎土：明褐灰色	龍泉窯系	99003010
338	ＳＫ101	瓦器	羽釜	暗褐色		99003002
339	ＳＫ101	瓦器	羽釜	外面：黒色／内面：暗灰色	外面下半部煤付着	99003001
54－ 340	ＳＫ109	土師器	小皿	明黄褐色		99002875
341	ＳＫ131	瓦器	椀	黒褐色		99002893
55－ 342	ＳＫ134	土師器	擂鉢	淡褐色		00002682
343	ＳＫ134	土師器	鍋	外面：黒褐色／内面：暗褐色		99002894
344	ＳＫ134	土師器	鍋	淡褐色		99002895
345	ＳＫ134	青磁	椀	胎土：灰白色	龍泉窯系	99002896

Fig.－番号	出土遺構	種　別	器　種	色　　調	備　　考	登録番号
346	ＳＫ134	青磁	盤	胎土：灰白色	龍泉窯系	99002897
347	ＳＫ135	石製品	滑石製石鍋	灰白色	外面煤付着	99002898
348	ＳＫ135	土師器	小皿	淡褐色		99002899
56－ 349	ＳＫ137	土師器	小皿	淡褐色		99002902
350	ＳＫ137	土師器	小皿	淡褐色		99002901
351	ＳＫ137	須恵器	捏鉢	灰色		99002900
352	ＳＫ139	土師器	鍋	暗褐色		99002904
353	ＳＫ139	土師器	小皿	淡褐色		99002903
354	ＳＫ139	青磁	皿	胎土：灰白色	同安窯系	99002906
355	ＳＫ139	瓦器	火鉢	灰色		99002905
356	ＳＫ139	青磁	盤	胎土：灰白色	龍泉窯系	99002907
57－ 357	ＳＫ142	須恵器	捏鉢	灰色	東播系	99002925
358	ＳＫ142	土師器	小皿	淡明褐色		99002921
359	ＳＫ142	土師器	小皿	淡褐色		99002920
360	ＳＫ142	土師器	小皿	淡褐色		99002922
361	ＳＫ142	土師器	小皿	灰白色・暗褐色		99002919
362	ＳＫ142	土師器	坏	淡褐色		99002923
363	ＳＫ142	瓦器	椀	黒褐色・灰白色		99002924
364	ＳＫ142	白磁	椀	胎土：灰白色		99002929
365	ＳＫ142	土師器	鍋	外面：暗褐色／内面：淡褐色		99002926
58－ 366	ＳＫ143	土師器	小皿	淡褐色		99002928
367	ＳＫ143	瓦器	椀	黒褐色（内面一部灰白色）		99002927
368	ＳＫ143	白磁	椀	胎土：灰白色		99002930
369	ＳＫ143	青磁	皿	胎土：灰白色	龍泉窯系	99002931
370	ＳＫ151	土師器	坏	灰白色		99002935
371	ＳＫ151	土師器	椀	外面：黒褐色／内面：淡～暗褐色		99002936
372	ＳＫ151	瓦器	小皿	灰色		99002933
373	ＳＫ151	瓦器	小皿	灰白色・暗灰色		99002932
374	ＳＫ151	瓦器	椀	暗褐色		99002934
375	ＳＫ151	白磁	椀	胎土：灰白色		99002937
59－ 376	ＳＫ165	土師器	小皿	淡明褐色		99002981
377	ＳＫ165	土師器	鍋	外面：暗褐色／内面：褐色		99002979
378	ＳＫ165	土師器	鍋	外面：橙～暗褐色／内面：橙色		99002980
60－ 379	ＳＫ178	白磁	皿	胎土：灰白色		99002982
380	ＳＫ178	土師器	小皿	明褐色		99002987
381	ＳＫ178	土師器	小皿	淡褐色		99002992
382	ＳＫ178	土師器	小皿	明黄褐色		99002983
383	ＳＫ178	土師器	小皿	淡褐色		99002988
384	ＳＫ178	土師器	小皿	明黄褐色		99002986
385	ＳＫ178	土師器	小皿	明黄褐色		99002984
386	ＳＫ178	土師器	小皿	明黄褐色		99002985
387	ＳＫ178	土師器	坏	明黄褐色		99002989
388	ＳＫ178	土師器	坏	淡褐色		99002990
389	ＳＫ178	土師器	坏	淡褐色		99002991
390	ＳＫ213	土師器	小皿	淡褐色		99002998
391	ＳＫ213	瓦器	擂鉢	淡褐色		00002681
392	ＳＫ213	白磁	皿	胎土：灰白色	墨書	99002999
62－ 393	ＳＰ241	土師器	小皿	明黄褐色	注記：Ｐ751	00002676
394	ＳＰ241	土師器	小皿	淡褐色	注記：Ｐ751	00002677
395	ＳＰ241	黒色土器	椀	黒色	注記：Ｐ751	00002678
64－ 396	Ｐ713	土師器	坏	淡褐色		00002680
397	検出面	陶器	水注？	暗灰色	ＳＫ101かＳＤ242	00003446
398	ＳＫ459	須恵器	壺か鉢	灰白色	国産だが産地不明	00003445
399	ＳＫ132	陶器	皿	胎土：灰白色	李朝	99003143
400	検出面	磁器染付	椀	胎土：灰白色	景徳鎮窯系	99003145
401	Ｐ106	陶器	天目茶碗	胎土：灰白色		00002685
402	検出面	陶器	天目茶碗	胎土：灰白色		99003144
403	検出面	白磁	水注？	胎土：灰白色		99003147
404	Ｐ69	銅銭	皇宋通寶			00002658
405	Ｐ624	銅銭	太平通寶			00002659
406	Ｐ662	銅銭	至道元寶			00002660
407	Ｐ704	銅銭	天聖元寶			00002657
408	小穴	銅銭	聖宋元寶			00002662
409	検出面	銅銭	祥符元寶			00002661
410	Ｐ657	鉄製品	刀子			00002655
411	ＳＤ206	ガラス製品	丸玉	緑		00002653
412	ＳＫ158	鉄製品	不明製品			00002656

図　版

調査区遠景（南上空から）

調査区全景（上空から）



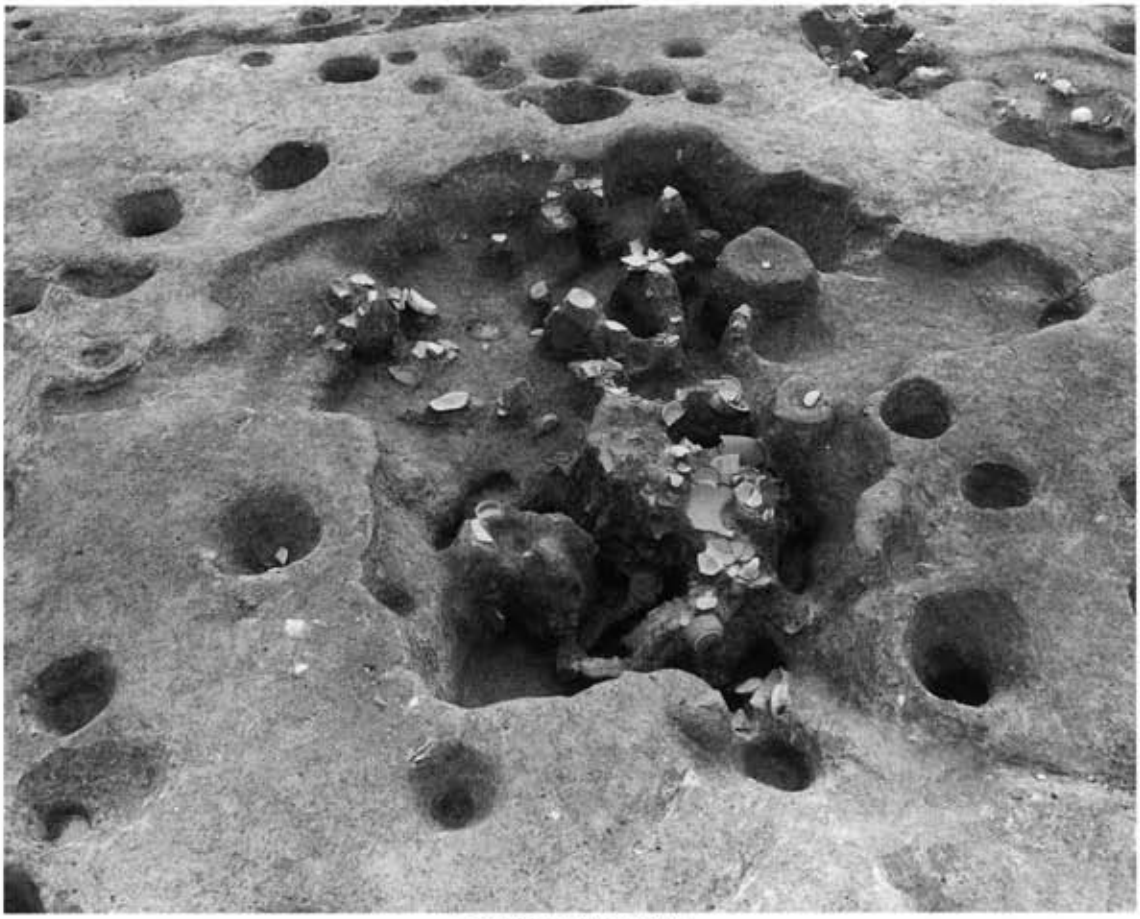
調査区北半部
（上空から）

調査区中央部
（上空から）

P597・598検出
状況（南から）

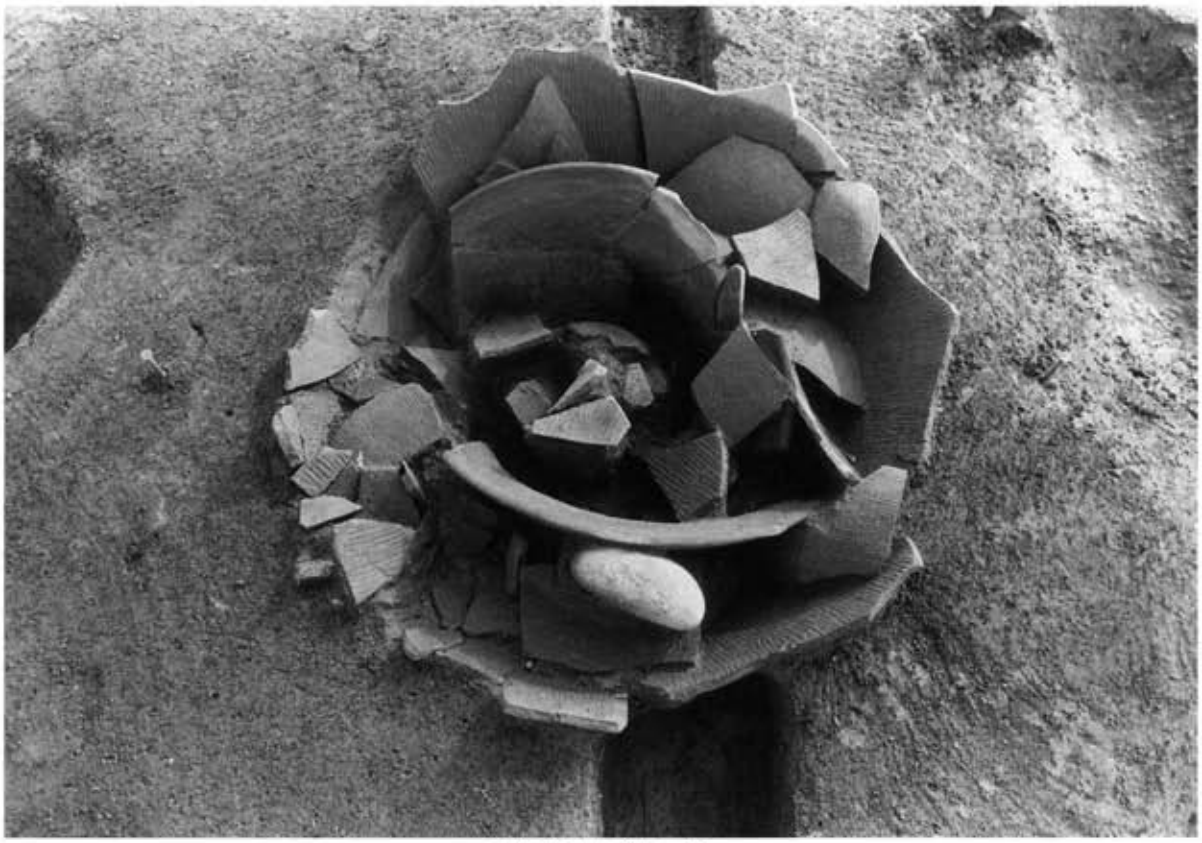
P597・598遺物出土
状況（北から）

ＳＫ110土坑
（南から）

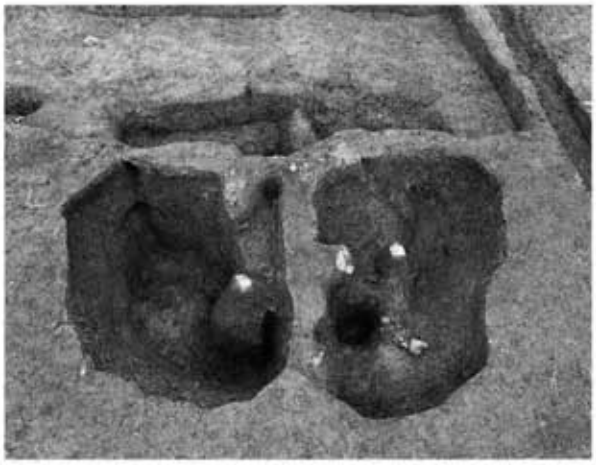


ＳＫ112土坑（北から）

ＳＫ112土坑遺物出土状況

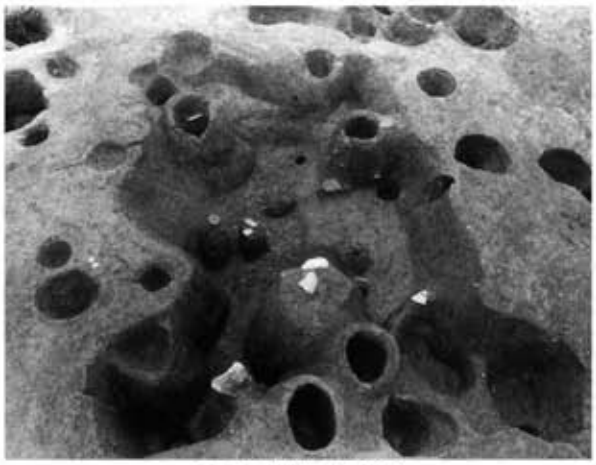


ＳＫ127土坑（北から）



ＳＫ132土坑（南から）

ＳＫ156土坑（西から）



ＳＫ158土坑（南から）

ＳＫ162・163・164土坑（東から）

ＳＤ104溝土層

ＳＤ105溝土層①

ＳＤ105溝土層②

ＳＤ155溝土層①

ＳＤ155溝土層②

ＳＤ166溝土層①

ＳＢ173掘立柱建物（北から）

ＳＡ171柵列（北から）

掘立柱建物集中部（上空から）

ＳＫ100土坑（東から）

ＳＫ138・139土坑（東から）

ＳＫ151土坑（南から）

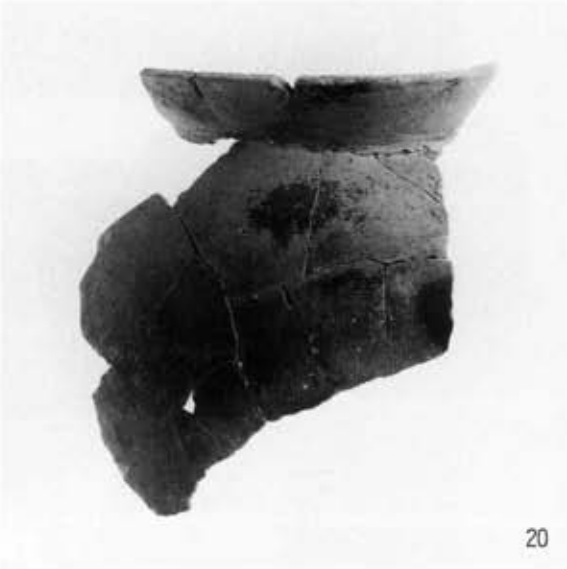
ＳＥ201井戸（東から）

4

8

16

12


20

1

138

59

出土弥生土器・古墳時代土師器，ＳＫ110・125土坑出土土師器

73

76

81

78

82

100

87

95

89

97

92

ＳＫ112土坑出土須恵器

104

107

118

126

127

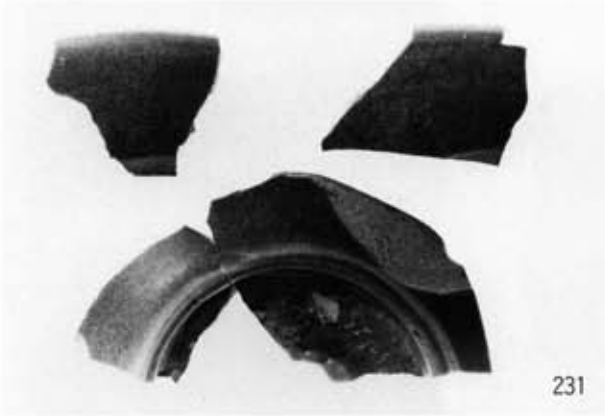
115

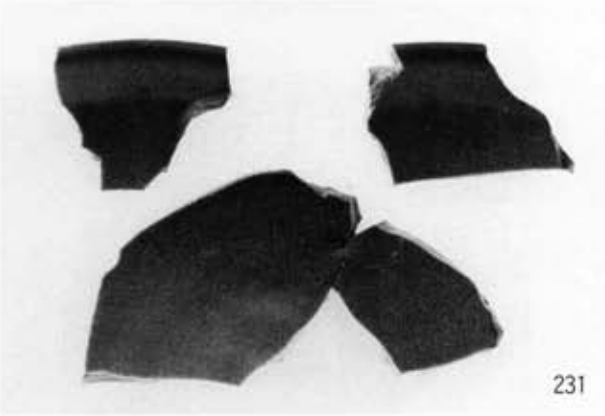
116

S K 112土坑出土土師器

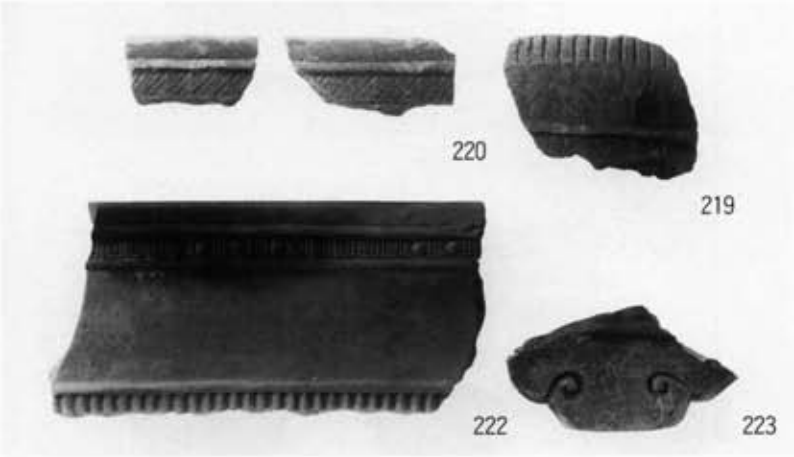
232

232


231


231

267



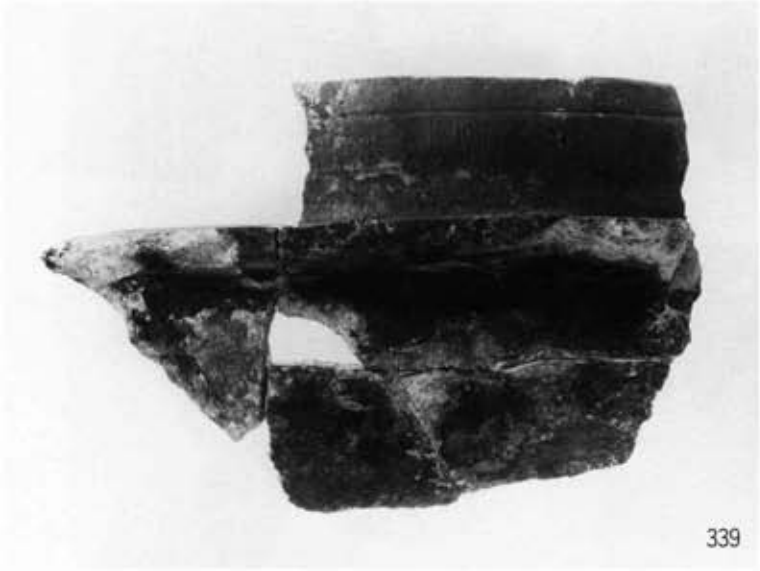
279

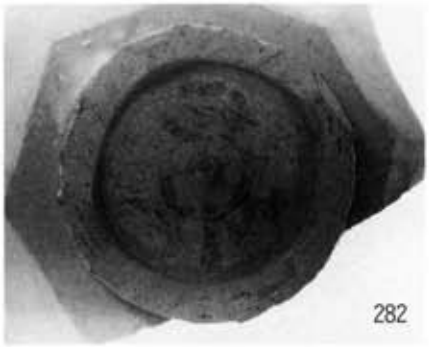
278

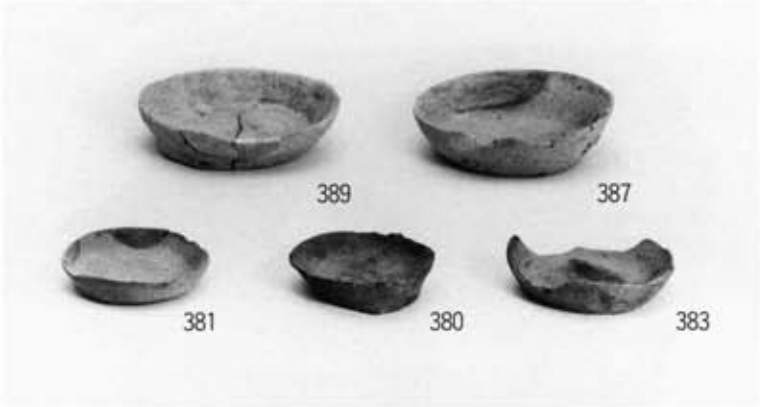
291

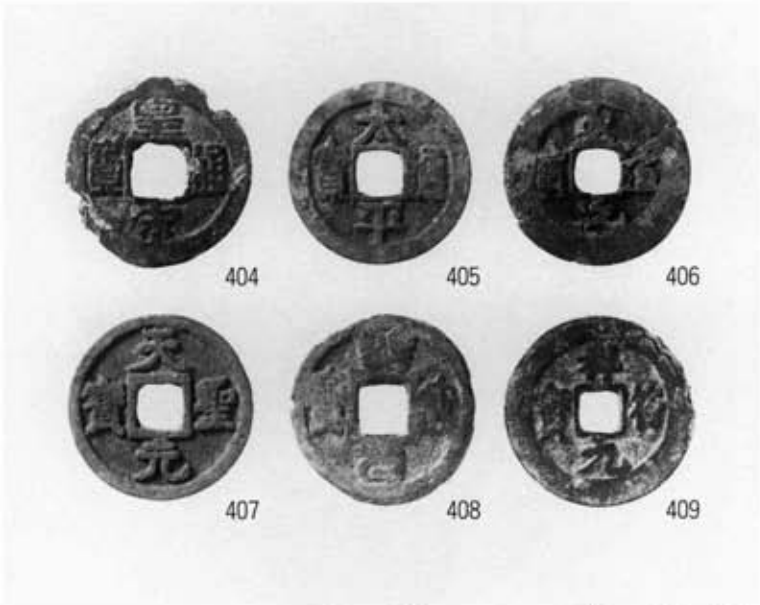
275

中世区画溝出土遺物









ＳＫ101・151・178土坑出土遺物，ＳＰ241土坑墓出土遺物，墨書白磁，銅銭，国産陶器，天目茶椀

報告書抄録

ふりがな	すぎごもりいせき
書　　名	杉籠遺跡
副 書 名	国営吉野ヶ里歴史公園整備に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻　　次	1
シリーズ名	佐賀県文化財調査報告書
シリーズ番号	第146集
編著者名	渋谷　格
編集機関	佐賀県教育委員会
所 在 地	〒840-8570　佐賀県佐賀市城内1丁目1－59　Phone：0952-25-7233
発行年月日	西暦2001年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
すぎごもり 杉籠遺跡 （II区）	さがけんかんざきぐん 佐賀県神埼郡 みたがわちょう 三田川町 おおあざたであざすぎごもり 大字田手字杉籠	413232	－	33° 19′ 10″	130° 23′ 30″	19970811 ～ 19980126	4,300	吉野ヶ里歴史公園整備に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
杉籠遺跡 （II区）	集落跡 集落跡 集落跡 墓地 集落跡	弥生 古墳 奈良・平安 鎌倉～戦国	 土坑 土坑 土坑墓 区画溝 掘立柱建物11 柵列・土坑・小穴	弥生土器 土師器 土師器・須恵器・青磁 黒色土器 土器（土師器・瓦器），中国陶磁（青磁・白磁），国産陶器（備前），銅銭，石製品	外来系土器が出土。 越州窯系青磁，ヘラ書き土器が出土。 溝で区画された15世紀代を中心とする屋敷地を確認。青磁など輸入陶磁器が多数出土。

佐賀県文化財調査報告書第146集

杉 籠 遺 跡

－国営吉野ヶ里歴史公園整備に伴う埋蔵文化財調査報告書１－

平成13年３月　印刷
平成13年３月　発行

編集　佐賀県教育委員会
発行　佐賀県佐賀市城内１丁目１－59
印刷　九州電算株式会社
佐賀県佐賀市天神１丁目1－32